
王様と喪女

館野和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王様と喪女

【Nコード】

N2323R

【作者名】

館野和

【あらすじ】

只野はるか、27歳事務員。
漫画を描くことと、預金通帳の残高を見ることだけが生きがいの非モテ女。

そんな彼女が大事な原稿を抱えてジャージ姿でいきなり落ちた先は、なぜか異世界の王様の婚礼契約書の上だった。

怒り心頭の王様は、責任をとって結婚しろとはるかに迫るが……？

ものぐさ主人公に突然訪れた人生の転機。 9/18完結しました！

たまたに番外編を投下中。

登場人物紹介（挿絵有り）

只野はるか（ハルカ）

> i 3 0 1 0 1 — 3 8 6 8 <

27歳、元工場系事務員。

漫画を描くことと、預金通帳の残高を確認することが趣味。
自分はモテないとかたくなに思い込んでいる。たぶん天然。

カレヴィ

> i 3 1 2 1 0 — 3 8 6 8 <

異世界、オルデリード大陸・ザクトアリア王国の国王。24歳。
イケメンだが、あっち方面がちよつと……（なんだ）。

自分の結婚に対しては政略が当たり前と思っっている。

千花（ティカ、旧姓：佐藤）

27歳。はるかの幼なじみ。真っ直ぐの長い黒髪が印象的な美女。
美人で出来がいいと近所で評判。はるかは幼少時から千花と比べられて育った。

実は異世界では世界最強の魔術師。

1話 喪女の身の上

「よし、下書きまでは完成ーっ」と

その時のわたしは作成中のオリジナル漫画の進行具合が大変よろしかったので、その事に浮かれていた。

「しっかし、さすがに肩こったなー」

ジャージ姿のわたしは、自分にあてがわれた部屋でこきこきと首を鳴らしながら独り言を言う。いい加減、この癖は改めなければと思うが、長年の癖なのでなかなか抜けない。

わたしは只野はるか、二十七歳。職業は製造業の事務員。

恋人はいない。というかこの歳まで彼氏がいたことはない。いわゆるもてない女 喪女というやつだ。

顔自体はそこまで悪くはない……と思う。

ものすごいブスでもなければ、美人でもない。ごく普通の顔。

もちろん、この歳になるまでに恋人が出来る機会が全くないことはなかった。

友人やら周りの上司や知人やらに、男性を紹介すると言われたり、親に見合いを勧められたりしたからだ。

だが、わたしはそれを今はそんな気はないからと断り続けた。それを続けているうちに周りも諦めたのか、紹介すると言ってくる人も稀になった。

なぜ、わたしが周りの親切を断り続けたのか。

……それはひとえによく知らない男に合わせるのが面倒くさいのと、趣味に生きたかったからである。

趣味……それは、オリジナルの漫画を描くことである。とはいっても、どこかの出版社に投稿する気もなく、ウェブの自サイトに載せているだけという完全に自己満足のものであった。

今は騎士と姫君の恋物語を描いていて、そこそこ見てくれる人もいるので、それでもわたしは上機嫌だった。

わたしは原稿と漫画道具一式を百均で買ってきたプラスチック容器にまとめると、本棚兼物置に置きに行く。

この後の予定では、もう一つの趣味の預金通帳の残高を見て一人で悦に入る予定だった。

しかし、汚部屋に積み上げた漫画本の角に足の小指がぶつかり、わたしは見事に前につんのめった。

「いつてえ〜っ！」

二十七の女の叫び声としてはどうかと思うが、本当に痛いのでしようがない。

だが、原稿一式は死守。
どうあっても、死守。

足の小指の痛みをこらえながら、わたしは転ぶのだけはどうにか持ちこたえて、その場に座り込んだ。

しかし、そんなわたしの目の前を何枚もの紙が舞っている。

……あれ、原稿用紙は封筒にしまっただけあるし、あんなふうには散らばることはないはずなのに。

「……………おい」

わたしが舞い落ちる紙に見とれていると、なぜかいきなり横から男に声をかけられて、わたしは思わず後ずさるうとした。……………がな

んだこれ。

「おい、やめろ！」

なぜか馬鹿でかい机の上にいたわたしは、目の前の男に取り押さえられて、呆然とする。

どっだ、ここは。

さっきまでわたしは自分の汚部屋にいたはず。

だけど、今いるのは異国情緒溢れる豪華絢爛な広い室内。

そしてわたしを取り押さえているのは、浅黒い肌に銀髪の、深い青色の瞳をした美形。

「おまえ……、なんてことをしてくれたんだ」

美形がその秀麗な顔を歪ませて見てくるけど、こっちはそれどころじゃなかった。

いったい、なに？　なにが起こったの？

汚部屋から豪華絢爛な室内に一瞬にして移動してくるなんてありえない。

それに、目の前の絶対日本人じゃない顔立ちの男。

……もしかしてこれは、ひょっとしてひょっとすると、ウェブ小説とかでよくある異世界トリップってやつですか！？

2話 完全なる不審人物

馬鹿でかい机の上からとりあえず降ろされたわたしは、目の前の美形に尋問された。

「おまえは誰だ。どうやら移動魔法で現れたようだがどこから来た」
移動魔法とか言われても、よく分からない。

でも、目の前の美形は威厳があつてとても偉そうだ。

……どうやらわたしは不法侵入者っぽいし、ここはおとなしく質問に答えた方がいいのかもしれない。

「……只野はるかです。日本から来ました」

「タダノハルカ？ ニッポン？ どこだそれは」

日本を通じないとしたら、じゃあ、これでどうだ。さすがにこれは通じるだろ。……ここが異世界じゃないならだけだ。

「それじゃ、ジャパン」

「……ジャパン？」

美形男は首を捻ってる。これでも通じないのか。

「……恐れながら」

今まで気がつかなかったけど、近くには五十代くらいのおじさんがいた。その人が言葉を発する。

「この方は、異世界召喚された方では？」

「しかし、異国の者には見えるが、言葉が通じるぞ」

「ニッポンという国名に聞き覚えがあります。……確かガルディアの最強の女魔術師がその国の出身だったかと」

わたしはおじさんのその言葉に、今の状況も忘れてぼかんとしてしまつた。

……そうすると、その最強の女魔術師って、日本人なの？

「……そうか。異世界召喚でこつも自然に言葉が通じるのは疑問だったが、かの魔術師なら納得できるな」

美形が得心したように頷いた後、ガルディアに問い合わせなければなと呟いた。

「……あの、普通は言葉が通じないものなんですか？」

「それはそうだろう。……おまえはまったく行ったことのない大陸で話を通じるのか？」

それが、あまりにも当然の言葉だったので、わたしは納得してしまつた。

「言われてみれば、そうですね」

……でも、なんで召喚されたのがわたし？

こんな枯れた地味女じゃなくて、もつと若くて可愛い女子高生とか召喚すればいいじゃない。

「……しかし、召喚されてきたのは分かったが、おまえはとんでもないことをしてくれたな」

「はい！？」

美形に呻くようにして言われたので、わたしは思わず大きな声で聞き返してしまつた。

「おまえは届いた婚礼契約書を滅茶苦茶にしてくれたぞ。あとは署名するだけだったのに、どうしてくれる」

「どうしてくれるって……、再発行してもらえばいいだけでは？」

「あれは他国からの書簡だ。そんなものをまた発行してもらつわけにはいかん」

美形にそう言われて、わたしは自分のしたことの重大さに血の気が引く思いだつた。

「す、す、すみません！」

わたしは頭を下げて美形に謝つたけど、こんなことでは許してもらえないだろうな。どうしよう。

ちろりと美形を覗くと、彼は苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた。

「……仕方ない」

美形がそう言ったことで、わたしは許してもらえたのかと思つて

頭を上げた。

「おまえが代わりに俺の花嫁になれ」

「えええ、嫌ですよ！」

わたしは思ってもいなかった彼の言葉に、飛び上がって拒絶する。「俺だつて嫌だ。しかし、契約より先に婚礼が決まっていたことにしなければ先方に言い訳できん」

「でも、なんでわたしなんですか！？ 花嫁にするならもっと若くて綺麗な人がいるでしょう！？」

「無理矢理そうすることもできるが、いきなり俺の花嫁にされる姫が気の毒だ」

この人今、姫つて言った？

……そんな人を花嫁に出来る目の前のこの美形はいったい何者！？

「姫？ あなたの身分はいつたいなんなんですか？」

「俺は、ザクトアリア国王、カレヴィだ」

「カルビー？」

なんとなくポテチが食べたくなってくる名前だな。ちなみにわたしはコンソメパンチ派だ。

「違う。カ・レ・ヴィだ」

美形がわざわざゆっくりと発音してくれる。

なんだ、某お菓子メーカーと同じ名前じゃないのか。紛らわしい名前だな。

「……つて、国王なんですか！？」

「……おまえ、驚くのが遅いぞ」

カレヴィ王が溜息をついたけど、わたしはそんなこと気にしていらなかった。

だって、そしたらわたしは一国の王の花嫁になれって言われてるってことじゃない！

3話 とりあえず着替える

「国王の花嫁なんて無理ですって！」

わたしは必死で訴えたが、カレヴィ王の反応は冷たかった。

「無理でもやれ。自分のしたことの責任は取れ」

「えええええ……」

わたしは情けない顔でカレヴィ王を見る。

一般人ならともかく、王様って事はいろいろとめんどくさいことがあるってことでしょ？

わたしが困り果てて、近くにいたおじさんとカレヴィ王の顔を見過してたら、王様におもむろに言われた。

「とりあえず、タダノハルカ」

「あ、名前ははるかです。名字が只野で」

わたしが説明すると、カレヴィ王は納得したように頷いた。

「そうか分かった、ハルカ」

そして、カレヴィ王がわたしのよれよれのジャージ姿を見下ろして一言。

「今すぐ着替える」

着替えるに当たって、わたしはお風呂に入れてもらうことになってしまった。

侍女の一人に大事に持っていた原稿一式を奪われて、わたしはちよつと気が動転してしまった。

「そつ、それ、すごく大事なものだから、絶対捨てないで！ ぜつたい、絶対だよー！」

「か、かしこまりました」

侍女達はどん引きしていたけれど、間違えて捨てられでもしたら

困る。

とりあえず、原稿の安全だけは確保したわけだけど、次にはわたしに侍女達に身ぐるみ剥がされるといふピンチが待ち受けていた。

「おとなしくお湯に浸かられてくださいませ」

年甲斐もなく少々暴れてしまったものだから、年かさの侍女から呆れたように言われてしまった。

……まあ、着るものがなければ、素直にそうするしかないし、わたしは半ば自棄になって一個目の湯船に浸かった。

湯殿を見渡すと、泡風呂とか薬草風呂とかあるみたい。

ちよつとした温泉施設だね。

侍女達は湯船に浸かっておとなしくなつたわたしに安堵の溜息をついていた。

……おかしいなあ。そんなに暴れたつもりはないんだけど。

そして、泡風呂へと移動させると一斉にわたしの体を洗い始めた。自分の体ぐらい自分で洗えますってと主張したが、侍女達には聞き届けてもらえず、わたしは体の隅々まで彼女達に洗われてしまった。

「えええつ、ちよつと、ちよつと！」

……なんとというかちよつと犯された気分。ほとんどが若い女の子達だけだ。

お湯で全身に付いた泡を落とされて、今度はわたしは薬草風呂とどうか、ハーブ風呂に連れて行かれた。

ハーブ風呂はラベンダーが主体らしく、リラックスできるようないい匂いがしていた。ついでに浴槽にバラの花びらも浮いていた。

わたしに似合わねええと思ったが、口に出すと無粋なのでやめておく。うん、賢明だ。

そんなこんなでお風呂から上がったら、台の上に横になってくださいと言われて、わたしはその通りにする。

そこで、いい匂いのするオイルを擦り込みながらの全身マッサージを受けた。

あー、肩と首のこりがちよつと酷いんだよね、と言ったらそこを重点的にマッサージしてくれた。うへへ、極楽極楽。

そうしている間にも、他の侍女達がムダ毛の処理とか、手足の爪磨きとかしてくれた。

一度も行つたことないけど、エステってこんなのかなあ。

まあ、たまにはこんな体験もいいよね。なんといつてもタダだし。……ここが異世界ってんじゃないなら、もつといいんだけどね。

全身マッサージも終わつて、ちよつと休憩と言つことで、出されたジュースを飲んでいたら、侍女達はキラキラした素材の衣装をいくつか出してきて、わたしは思わず噴き出しそうになってしまった。まさかと思うけど、それをわたしが着るのか？

もうちよつと地味な素材はないの？ せめて着る人に衣装は合わせで欲しい。

キラキラはやめて、キラキラは、と主張したけど、どうやらこれしかないらしい。ちえっ。

しかも、そのどれも胸元露わで、体の線を強調した衣装だった。

……っ！か、これを着るのか？ 普段ダラケきつた生活をしているこのわたしが？

逃げ出したかったが、なんといつてもわたしは裸。なのでそうするわけにもいかず、おとなしくわたしは侍女達にキラキラした衣装を着せられた。

お腹周りとか心配だったけど、それはなんとか帯を巻いてしのいだ。

衣装のスカート部分はくるぶしまでだけど、これが脚にまわりついて非常に歩きにくい。

で、足には編み上げサンダル。

ここの気候は少々暑いみたいでこれが基本だそうだ。

そして丹念に化粧をされて、わたしの支度は終了。

「まあっ、ハルカ様、とっってもお美しいですわー」

「ありがとう」

侍女達が褒めてくれたけど、目の前の鏡で自分の姿を確認したわたしは、特に舞い上がりもせず冷静だった。

確かに三割増しくらいで綺麗にはなっている。

さっきのよれよれのジャージ姿からしたら別人だろう。

だがしかし、元が平凡なわたしだ。

うん、やっぱり普通は普通だよなー。

わたしはそのことにむしろ安心しながらも、侍女達に先導されてまた王の前に連れて行かれた。

4話 超非凡な友人

着替えさせられて、カレヴィ王の仕事場(?)に戻ったわたしは、そこに見知った人物がいたので驚いた。

着ているのはドレスだし、ものすごく綺麗になっているけど、間違いない。

「ち、千花くっ!?!」

「はるか、ひさしぶりー。元気だったー?」

千花に抱きつかれてわたしはちよつと呆然とする。

「げ、元気、元気だけどー……なんで、ここに千花がいるの?」

確か、結婚して外国にいるって聞いてたんだけど。

「あれ、最強の女魔術師が日本人だって聞いてなかった?」

「聞いてたけど……まさか、それが千花だっていうの?」

友達が異世界で魔術師なんて、そんな馬鹿なことがあるの?

「うん、そのまさか」

「うっそ、そんなことありなの?」

「うん、まあ……。驚くのも無理はないと思うけどー……」

千花はそう言つと、困つたように頬に手をやった。なんとというか、どことなく気品のある仕草だ。

「……なんだ、知り合いだったのか?」

久しぶりのわたし達の再会を遠巻きに見ていた王様が声をかけてきた。

「知り合いつていうか……友達です」

「久しぶりにはるかに会いたいなと思つたら、召喚の座標指定を少し失敗してしまいました。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

千花がカレヴィ王とおじさんに頭を下げる。

「いやいや、ティカ様が頭など下げないでください。あなた様にそんなことをされたら我々がガルディアに睨まれてしまいます」

おじさんがどことなくやけた顔で、それでも慌てて言う。……

まあ、千花は友達の鼻屑目を引いてもとつても美人なだけだね。

「……それにしてもなんでティカって呼ばれてるの？ 千花でしょ？」

「うん、この大陸の人には千花って呼びにくいらしいんだよね。だからティカって呼ばれてるの」

そうなんだ。それなら納得。

それにしても友達が最強の女魔術師って呼ばれてるってすごくない？

「それにしても、千花、魔法使えるなんてすごいね。わたしにも使えるかな？」

わたしがわくわくしながら聞くと、千花はちょっと困った顔をした。

「うーん、はるかにはあまり魔力がないから、あかりを灯す魔法ぐらいしか使えないと思う」

「えー、そうなんだ。残念」

最強と言われる千花がそう言うんだから、事実なんだろう。

でもあかりくらいは灯せるんなら、それを教わってもいいよね。

「……話に割り込むが少しいいか？」

カレヴィ王が遠慮がちにわたし達の話の腰を折った。

「はい、どうぞ」

千花は相手が王様だつていうのに堂々としている。

ひよつとして、最強と言われるほどの魔術師だと、いろいろな国の王族と対等に渡りあえるんだろうか。

さっきのおじさんもいやに腰を低くして『ティカ様』って呼んでたし。

「ハルカが突然現れたことで、隣国のディアルスタン王国の王女との婚約書が滅茶苦茶になった。最強の魔術師の力でどうにかできないか」

「そうですね、婚礼契約書はどうにもなりません、ディアルスタンと話を付けることは出来ますよ。この場合、この婚礼はなしということになります」

「ああ、それでもいい。だが、国内に相手の名までは伏せてあるが、近々婚礼を挙げることは知らせてしまつてある。どうしたらいい」

「そうですね……」

千花は顎に指を当てて難しい顔をして考え込んだ。

「はるかには申し訳ないですけど、このままあなたの花嫁になつてもらふことになりますね」

「ああ、それでいい」

カレヴィ王は頷いてるけど、ちょっと待つてよ！

わたしは驚いて思わず飛び上がってしまった。

「えええ、千花ちよつと、それはひどいよ」

元々は千花がわたしを喚びだしたからこうなつたんじゃない。

「うん、本当にごめんね。でも、カレヴィ王に酷いことはさせないつて約束する」

それつて、結婚しても手は出させないつてことだよな？

「いや、それより家に帰れないことの方が問題なんだけど。趣味だけど、サイトもやつてるし」

「それは異世界召喚でどうにかなるけど。問題は会社だよな。それは残念ながらやめることになりそうだけど……」

「そんなあ……。わたし、せつせと貯めた預金を確認するのが楽しみなのに」

わたしがしょんぼりしていると、千花が慰めるようにわたしの肩に手を置いた。

「それなら、わたし向こうに架空の会社作るけど。はるかはその事務員つてことにするよ。給料も今よりはずむし」

「ええつ、本当！？」

魔術師つてそんなことまで出来ちゃうの？

つていうか、会社設立つて、千花いくら稼いでるんだ。

「カレヴィ王と結婚すれば、多少王妃の仕事はあるけど、それ以外は趣味に没頭できるよ。……はるか、どうする？」

千花にそう言われてわたしは躊躇することもなく笑顔で頷いた。

「ええー、それなら結婚する！」

そんなわたしをカレヴィ王とおじさんが呆れた顔で見っていたけど、わたしはそんなこと構ってなかった。

多少問題ありだけど、趣味に没れるって素敵じゃない？

5話 子を成す覚悟

「ちょっと待て。王妃になるなら子を成してもらわなければ困る」
しばらくわたしを呆れて見ていた王様が、はっと我に返って言った。

「けれど、はるかに無理強いはしたくないですし……。その件については、わたしがどうにかしますから、カレヴィ王はもう少しお待ちいただけますか？」

千花がわたしの顔を見てから、少し困ったような様子で言った。
うん、でもまあ、カレヴィ王が言ったことはごく当たり前のことなんだよね。

形だけの王妃なんて、もらっても困るだけだろう。
そしたら、わたしはおいしいだけの話に食らいついてちゃ駄目だよね。

「千花、わたしなら別にいいよ。王様の子供産んでも」

「え……。はるか、本当にいいの？　もしかしたら、この先好きな人が出来るかもしれないのに」

千花がうるたえたようにわたしの顔を見た。それにわたしは強く頷く。

「うん、いいよ。……ていうか、わたし自身、自分に好きな人が出来る甲斐性があるとは思えないんだよね」

それに加えて、今も彼氏いない歴更新中なんだから、この先もそんな可能性が高い。

……なら、別にカレヴィ王と結婚しちゃってもいいかなあって思うんだ。

まあ、成り行きつちゃ成り行きだけど。

わたしがそう言つと、千花は微妙そうな顔をした。

……まあ、もてる千花には分からない感覚だろうなあ。たぶん、千花はわたしが投げやりになつてると思つてるかもしれない。

「はるかがOKなら、わたしが口を挟むことじゃないよね。……でも、なにか困ったことがあったらすぐに言ってよ？ 出来るだけ協力するから」

千花がわたしの手を取って、それでも心配そうに言ってくる。

うん、持つべきものはやっぱり友達だなあ。

こういう友達がいるなら、別に彼氏とかいなくてもいいや。……今度王妃になるけど。

「うん、ありがと。その時はよろしくね、千花」

「うん」

わたしと千花が和やかに話していると、カレヴィ王がそこに割り込んできた。

「……話は済んだか？ ハルカが子を成す覚悟をしてくれて助かったぞ。……ところでハルカの歳はいくつだ」

「え、二十七歳」

わたしがそう言うと、カレヴィ王とおじさんが絶句した。

「俺より三つも上なのか？ てつきり二十歳そこそこか……」

それじゃ、地味な上にこんな年上の女じゃ嫌かなあ。

「その歳では、既に男を知っているんじゃないのか？ 王妃になるなら、清らかでなければならぬぞ」

うんまあ、そう思うのが普通だよな。

「ああ、それはいいですから。わたしはとつても清らかですよ。なんといいっても、わたしはもてない女ですから」

わたしは事実を述べただけなのに、三人にもものすごく微妙な顔をされた。なぜだ。

「……そ、そうか、ならばいい。だが、おまえの年齢は二十歳ということにさせてもらう。二十七ではなにかと都合が悪い」

「……まあいいですけど……」

個人的には鯖をよむのはどうかと思うけど、王妃にするにはこの歳ではいろいろと不都合な点があるんだろう。

……さつきカレヴィ王が言った男を知っている云々と言ってくる輩も今後出てこないとも限らないしね。

「それじゃあ、今後よろしくお願ひします、カレヴィ王」

わたしが王様に深々とお辞儀をすると、彼は笑顔で頷いた。

「ああ、よろしくな。俺のことはカレヴィでいいぞ。俺に対して敬語もいらぬ」

今まで気が付かなかったけど、この王様はかなり気さくらしい。

この先の人生、ずっと付き合っていかなくちやならない相手なんだから、変に気を遣うような人でなくてよかった。

わたしはほっとしながら笑顔で頷いた。

「うん、分かった。カレヴィ」

「……ただし、公式な場ではそれなりの言葉遣いにしてもらうがな」
う、やっぱりそういうオチがつくよね。まあ、これは仕方ないか

「とりあえず、おまえには趣味に没頭する前に礼儀作法をみっちり学んでもらう。覚悟しておけ」

「ええ〜っ」

わたしはカレヴィの言葉に抗議の声を上げたが、彼はどこ吹く風だ。

「千花、助けてっ」

「ごめん、こればかりは我慢して」

頼みの千花にもそう返されて、わたしは撃沈した。うう、やっぱり駄目か。

……やっぱり、そうそうつまい話は転がってないよなあ……。
そう考えながら、わたしは深く溜息をついた。

6話 召喚の真相

カレヴィの王妃になることが決まったわたしには、彼の部屋の隣の王妃の間が与えられることになった。

まあ、隣と言っても間に共同スペースみたいなものがあって、王と妃と一緒に過ごすときはそこを使っらしい。

とりあえず今は、わたしと積もる話があるから泊まっていくな言っただけで、二人とも寝間着に着替えて、一緒に天蓋付きのベッドの上

座り込んでいる。

絹の寝間着は千花の綺麗な体の線を露わにしている、友達のわたしでも惚れ惚れする。

「まず、はるかに謝らなきゃいけないことがあるんだ」

千花は真剣な顔をしてわたしに向き合った。

「な、なに？」

「召喚の座標指定を失敗したっていうのは嘘なの。わたしは、わざとあそこにはるかが現れるようにし向けたの」

「え……」

にわかには信じがたい話に、わたしの頭が理解を拒否する。

「うそ……」

じゃあ、千花がわざとカレヴィと結婚するようにし向けたってこと？

「本当にごめんなさい！」

千花はベッドの上で土下座する。対するわたしは信じられない事実

「な、なんで……？」

とりあえずそれだけ絞り出すと、千花は顔を上げた。

「今回カレヴィ王と結婚する予定だったディアルスタンのリリーマリー王女は既に想い人がいたの。それは王女の守護騎士なんだけど」

なになに、王女と騎士の恋!?

わたしは素早くそれに反応して千花に詰め寄った。

なにを隠そう、今わたしが描いている漫画は騎士と姫君の恋物語だ。なので、わたしはその話にもものすごく興味を引かれてしまった。

「詳しく聞かせて」

わたしは千花の肩をがしつと掴むと、目を輝かせて彼女を覗きこんだ。

千花はそれに若干引き気味になりながらも説明してくれた。

「王女の守護騎士の方も、彼女を憎からず想っていてね。そのうち王に思い切って結婚したいと申し出るつもりだったらしいの」

「あらー……」

わたしは思わず気の抜けた声を出してしまった。

だって、それじゃカレヴィ、思い切り邪魔者じゃない。

「でも、王の方はそんなことは全く気づいてなかったから、王女とカレヴィ王との婚約話を進めちゃったのよね。カレヴィ王も今まで執務に明け暮れてたけど、重臣達にせっつかれて、そろそろ結婚しないとまずいと思ったらしくて、その政略結婚を決めたらしいのね」

「政略結婚かあ。よく知らないわたしに結婚しろって言うてくるくらいだもんね。それくらい平気でするよね」

カレヴィは王女がどんな人物でも一向に構わなかったってことか。わたしはその王女じゃないけど、なんか失礼だな。

……けど、王なんだから、結婚するに当たって相手のこと少しくらい調べない？ わたしも人のことは言えないけど、本当に恋とか愛は必要ないんだな。結婚するはずだった王女が可哀想だ。

「それで今回、リリーマリー王女からわたしにどうにかしてほしいって依頼があつて。けど、あまり時間がなくてどうしようかと思っ

てただけど、婚礼契約書にカレヴィ王がサインしなければこの結婚は成立しないことになるのよね。それで、そこに目を付けたの」

「……それはわかったけど、なんでそこにわたしが召喚されるの？」
「突然召喚されてきたことにすれば、契約書が滅茶苦茶になっても不自然じゃないかなと思って。それにはるかなら、カレヴィ王とうまくいくかもしれないなって思ったし」

「ええっ？ 千花、なに言ってるの？」

いきなり千花が妙なことを言い出したので、私はびっくりする。

「二人とも自分の恋愛には頓着しないタイプじゃない。愛のない結婚が耐えられない人もいるけど、その点、はるかなら大丈夫だと思っただし。だから、わたしはその可能性にかけたの」

まあ、確かに結婚に夢も希望も持ってないけどね。千花、鋭すぎる。

「でも、本当にカレヴィ王に手を出させるつもりはなかったんだよ？ それだけは信じて」

「うん、分かってる。……千花、もしかしてわたしの行く末も心配してくれてた？」

わたしがそう言うと、千花はちよつとうろたえた。……凶星かあ。そうか、我が道を行くわたしは、そんなに千花に心配をかけてたのか。ちよつと反省。

「……恋愛面はともかく、カレヴィ王は悪い人じゃないから。はるかが不幸になることはないと思っただ。本当にごめんね、はるか」
そう言うと、もう一度千花は深々と頭を下げた。

「別にいいよ、千花がわたしのこと心配してくれてるの分かったし。千花はこのこともう気にしないで。……それに生活面もものすごく保証されてるしね」

いたずらっぽくわたしが笑って言うと、千花は安心したように息をついて、「うん」と頷いた。

7話 異世界に嫁入りするにあたって

翌朝。千花とわたしとカレヴィは一緒に朝食をとりながら、これからのことを話していた。

「とりあえず、一回家に帰って事情を話しておきたいんだけど。会社にもやめるって言わなきゃいけないし」

「あ、そうだね。それがいいよ。わたしもはるかの家にお邪魔するから」

「うん、そうしてくれると助かる」

いきなり異世界の王様のところに嫁にいくって言ったら正気を疑われかねないから、千花が同行してくれるのは本当に助かった。

「……俺も行かなくていいのか？」

カレヴィは忙しいらしいんだけど、わざわざそう言ってくるのは、かなり気を遣ってくれてるんだらうな。

「どうしても必要だったら出てきてもらうかもしれないけど、今のところ大丈夫だよ。うちの両親はここに直接来てもらって理解させるつもりでいるし」

彼氏もいなかった娘が異世界の王様と結婚するなんて、普通だったら到底信じてはもらえないだらうけど、そこは千花がいるし、大丈夫だよな。

「……問題は会社かなあ」

わたしは焼きたてのパンにバターを塗りながら溜息をつく。

「ああ、そうだね。いきなりやめます、はい分かりましたって訳にはいかないものね」

千花もスクランブルエッグをフォークですくいながら同意した。

「うーん、急ですけど外国に嫁ぐことになりましたって言ったら、認めてくれるかなあ。一応他の子になにかあった時のために仕事内容は教えてはあるんだけど」

ていうか、結婚すること自体信じてもらえなさそうな気がするの

は、わたしの気のせいだろうか。

「ではそこで俺を呼べ。必ず認めさせてやるから」

おお、力強いお言葉。カレヴィがそう言つと、なんとなく可能な気がしてくるから不思議だ。

「そう？　じゃあ、そうしようかな。カレヴィ、その時はお願いね」

「ああ、まかせておけ」

そう言つて爽やかに笑う顔はマジでイケメンで、なんで結婚相手が喪女のわたしなんだと思わざるを得ない。……まあ、手近にいたのがわたしだからなんだろうけど。

そして、なんとなくもやもやしつつも、わたしはとりあえず帰宅することにした。

こちらの世界の服に着替えた千花と一緒に自分の部屋に移動したわたしは、適当な服に着替えた。昨日いなくなっていた間、千花の家に泊まっていたことにするためだ。

言い訳するのに、いくら外見に頓着しないわたしでも、さすがにあのよれよれのジャージで外出はしないからそうしたんだけど、着替えてる間、千花はわたしの汚部屋を整理整頓してくれた。……う、ありがたい。

それで改めて着替えたわたしは、家の鍵とバックを持って家の外に移動した。

……なんかすごく間抜けな感じがしないでもないけど、仕方ない。……「……ただいま」

家の鍵を開けて中に入ると、リビングからおかんが飛び出てきた。「……はるか？　連絡もしないで、今までどこ行つてたの。携帯は通じないし、まったくあんたって子は」

……心配してくれてるのは分かってるけど、わたしもいい歳なん

だし、いい加減子供扱いはやめてほしい。

おかんのその上からの物言いに、わたしが思わずむっとしてると、そこで千花がフォローを入れてくれた。

「おばさん、お久しぶりです。すみません、はるかはわたしの家に泊まっていたんです。心配をおかけしてすみませんでした」

申し訳なさそうに頭を下げて謝る千花を見て、おかんは驚いたようだ。まあ、千花は外国に行っていることになってるからね。

「まあ、千花ちゃん、また綺麗になって。いつ帰ってきたの？」

近所でも美人で出来がいいと評判の千花に久しぶりに会って、おかんはころりと機嫌がよくなった。

「……ちよつと、ぐれてもいい？ それには十年ぐらい遅すぎる気もするけど。」

「つい、夕べです。それで、はるかに会いたくていきなり呼び出しちゃったんですけど、本当にすみませんでした。だから、はるかは全然悪くないです」

「まあ、それじゃしょうがないわね。でも、はるかは今度からそういうときは連絡入れときなさいよ」

「……分かった」

おかんの小言に内心うんざりしつつも、ここで逆らうとまたうるさいので、とりあえず頷いておく。

「さ、千花ちゃん上がって、上がって。すぐにお茶出すから」

おかんは上機嫌で千花を促すと、「お父さん、千花ちゃんが帰ってきたわよ！」とリビングに戻っていった。

「……なんていうか、娘のわたしと千花との扱いの差が激しすぎる。確かにわたしは出来の悪い娘だけどさ。」

「……おばさん、相変わらずだねー……」

千花が同情するように言ってきたのをわたしはただ苦笑いして受け止めた。

改めて自分の評価を突きつけられた気がして、非常に情けなかった。

8話 話すよりもまず実行

「……それにしても、ごめんね。わたしが召喚したせいで、いろいろ迷惑かけて。おばさん達にも心配かけちゃったし、すぐに帰せばよかったね」

千花が眉を下げて申し訳なさそうにわたしに謝ってきた。

美人の千花にそんな顔をされると、こっちが悪いことをしたように思えてくるから不思議だ。

「別にいいよ。うちの親がいい歳した娘を干渉すぎるんだよ」

……とはいえ、連絡の一つもすればよかったな。

携帯の電波くらい千花ならどうにかできただろうし、それは失敗だったなと思う。

まあ、過ぎてしまったことは仕方ない。次は気をつけよう。

「それより、千花上がったよ。千花には説明頑張ってもらわないといけないし」

そうなのだ。

情けないことに、わたしでは通常の結婚話すら信じてもらえない可能性が高いので、千花の存在は不可欠なのだ。

「うん、お邪魔します」

千花は頷いて玄関を上がると、わたしの後に付いてリビングに入った。

「おじさん、お久しぶりです」

千花はおかんに比べるとちょっと影の薄いおとんに笑顔で挨拶した。

千花のその様子はとても爽やかで感じがいい。

「千花ちゃん、久しぶりだね。元気だったかい？」

「はい、おかげさまで。夕べははるかをお借りしちゃってすみませんでした」

「うん、いいんだよ。こういことがないとはるかは家にひきこもってるんだから」

……おとももなにげに毒舌だね。それにしても、どれだけ親の評価低いんだ、わたし。

わたし達はとりあえず、リビングのすぐ傍のダイニングテーブルでコーヒーを飲んでいた。

千花はおとんとおかんにいろいろ聞かれていたけれど、そのうちにわたしは業を煮やして無理矢理話を遮った。

「あ、あのさ、実は大事な話があるんだ」

「なに、まさか会社辞めたいとかじゃないでしょうね。この不景気に冗談じゃないわよ」

う、いや、それも含まれてはいるんだけどね。

わたしが口ごもると、おかんの目がつり上がる。

おかんがなにか言おうとする前にわたしは慌てて言った。

「じ、実は今度結婚することになったんだ」

すると、おとんとおかんがうるんな目でわたしを見た。

……まあ、今まで男の影がなかったわたしの言うことを二人が信じられなくても仕方ない。

「本当です。あの変なことを言うと思われちゃうけど、聞いてください。はるかとは異世界の王様の花嫁になることになりました」

評価が抜群に高い千花のその言葉に、おとんとおかんの目が点になった。

「あの……、千花ちゃん？ どうしちゃったの？ はるかならともかく、千花ちゃんそんなこと言うなんて……」

わたしならともかくって、どういう意味だ、おかん。

いくらファンタジー漫画を描いているわたしでも、現実と空想の区別くらいはついてるぞ。

「信じられないのも当然ですね。……実はわたし、その異世界で魔術師をしています」

見てください、と千花は言うと、その手から明るい球体を出した。……もしかして、これが昨日千花が言ったあかりを灯す魔法のかな？

千花はふわふわ浮かぶその球体をいくつもその手から出した。それをおとんとおかんが釘付けになって見ている。

「……千花ちゃんは手品師なのかな？」

おとんが間の抜けた顔で聞いてくる。まあ、魔術師＝手品師と受け取っても不思議じゃない。

「違います。言うなれば、魔法使いですね。……よく見てください」

千花は椅子から立ち上がると、瞬間的にリビングにあるテレビの傍に移動した。

それをぼかんとして見る、おとんとおかん。……まあ、信じられなくても無理はない。わたしもこんな事態にならなければ、到底信じられなかった。

千花はテレビの傍からもう一度元の場所に戻ってくる。

それをおとんとおかんは少し恐怖の入り交じった目で見ていた。

「……信じていただけましたか？」

その視線に少し寂しそうな笑顔で千花は尋ねる。

「そ、そんな馬鹿なことが……」

おとんがまだ信じられないように呟いたが、千花がそれに対して強く頷いて言った。

「あるんです。これからその王様のところに移動してもらいますが、玄関で靴を履いてもらっていいでしょうか？ できれば出かける支度をしていただけるといいんですけど。あと戸締まりもしてください」

「あ、そうだね。ガスの元栓も閉めとかなきゃ」

呆然としているおとんとおかんを後目に、わたしは家の戸締まりを開始した。

「おじさん、おばさん、信じられないかもしれませんが、これは本

当のことです。すみませんが、準備してください」

千花がおとんとおかんに向かつて右手を広げると、二人はふらふらと自分達の部屋に行き、よそ行きの服に着替え始めた。

……もしかして千花がなにかしたのかもしれない。

おとんとおかんは玄関で靴を履いたところで我に返ったようだった。

すっかりよそ行きの格好になっている自分達におとんとおかんはうるたえた。

「こ、これはいったい……」

「千花ちゃん、どうなってるの、これ」

「すみません、説明は後で。……はるか、行くよ」

「うん」

千花に促されて、わたしも慌てて靴を履いた。

……しかし、さすがに四人も玄関にいと狭い。

けれど、それを気にする様子もなく、千花は短く何事かを唱える。すると、その次の瞬間にはわたし達は豪華絢爛な広間に移動していた。

ザクトアリアなのは分かるけど、えーと、ここはどこだろう……？

9話 謁見

「来たな、ハルカ」

その声のした方を見ると、一段高くなったところにある豪華な椅子にカレヴィが悠々と腰掛けていた。

「ここは……？」

わたしが疑問を口にするのと、おじさん改め、宰相のマウリスがそれに答えてくれた。

「ここは謁見の間ですよ、ハルカ様」

言われてみれば、確かにそれっぽい。わたしはなるほど納得した。

「ハルカ、そちらにいるのがおまえの父母か？」

「うん、そう」

カレヴィの改めでの確認にわたしは頷いた。

そこで初めておとんとおかんは我に返ったらしくて、見慣れない豪華絢爛な謁見の間と、若いけれど威厳のある人物を目の当たりにして、落ち着かなさげに視線をさまよわせていた。

「そうか。……俺はザクトアリア王国の国王カレヴィだ。この度はるかを花嫁に迎えることになった。今後、よろしく頼む」

「は、はあ……」

威風堂々としたカレヴィに対し、おとんは気の抜けた返事をした。……まあ、今まで一緒に暮らしていた娘が、突然異世界の王様の花嫁になることになったわけだし、この反応は無理もないだろう。

一応反応したおとんはまだいい方で、おかんにいたっては、呆然とカレヴィの端正な顔を見ているだけだった。

「ハルカ、隣に座れ」

カレヴィに隣の席を示されて、わたしは驚いてしまった。

だって、あれって王妃の席じゃない？ わたしはまだ王妃になつてないぞ。

「え、いいの？」

「構わない。おまえは一月後には俺の妃になる。遠慮するな」
そう、それじゃ遠慮なく。

わたしはカレヴィの言葉に従って、一段高くなったところに上がり、カレヴィの横の豪華な椅子に座った。

そしておとんとおかんの方に向くと、二人は並んで座っているわたしとカレヴィを呆然と見ていた。

「今言った通り、一月後にはハルカは俺の花嫁になる。そなたらもそのつもりでいてくれ」

「……はあ」

おとんとおかんは未だに信じられない様子で、間の抜けた返事をする。

「……そういうことですから、今現在はおかさんが勤めている会社は辞めてもらうことになります。その代わりと言ってはなんですけど、わたしが新たに会社を設立して、おはるかをその事務員とすることになりましたから、経済的な心配はいらないと思います」

「千花ちゃんが会社を……」

千花の説明にぼかんとするおとんとおかん。

でもこれは、わたしが異世界で王妃になるよりも現実的だと思うぞ。

「ティカ殿。そのことなんだけど、ハルカにかかる費用はザクトアリアから出すことにしたいのだが」

「そうですね。おはるかには王妃になるのですし、その方がいいかもしれませんね」

カレヴィの提案に千花は頷いて了承した。

そうか、わたしの給料はこの国から出るのか。まあ、それが一番妥当だろうな。

でもそうになると、わたしも趣味だけにかまけてられないな。王妃の仕事も頑張らないと。……今のところ、どんなことをやらなければいけないのか全然分かってないけれど。

「……ハルカの父母はなにか質問はないか？ あれば答えるが」
カレヴィのその言葉に、おとんははつとして言った。

「お、恐れながら、どうしてはるかが王妃に選ばれたのでしょうか？ 容姿は普通ですし、性格もけして気の回る方ではない。友人には恵まれています、そう社交的でもない。それなのに、なぜですか」

今まで呆然としていたおかんもそれに便乗するように言った。

「そ、そうです。王様ならもっと若くて綺麗な方を選び放題でしょう。それなのに、なぜよりによってはるかなんです？」

……二人とも、ここぞとばかりに言いたい放題だな。二人が普段わたしのことをどう思ってるかよく分かったよ。

わたしが思わずむっとしていると、カレヴィが椅子の肘掛けに置いてあったわたしの手にその手を重ねてきた。

「王である俺が、ハルカを選んだのだ。それに文句があるのか」

カレヴィが威圧的にそう言うと、おとんとおかんはかなりびびったようだった。それ以上言う気もなくなったようで、口を噤んだ。

「……もう質問はないな。それでは、これで謁見は終了とする。ハルカの父母は別の間で休むように。……ハルカ、来い」

わたしは立ち上がったカレヴィに手を取られて立ち上がると、彼にぐいぐいと引っ張られた。

……なんか、カレヴィ結構怒ってるみたいなんだけど。

ひよつとして、おとんとおかんの話の聞いて、変な女を掴まされたとも思っているのかなあ……？

10話 憤るカレヴィ、舞い上がる両親

わたしは機嫌の悪そうなカレヴィに、そのまま謁見の間の控え室みたいなところまで強引に連れていかれた。

「こんなことは言いたくはないが、なんだ、あの両親は」

……あれ、わたしに怒っているわけではないんだ。

わたしは思わず気が抜けて、カレヴィの端正な顔を見返した。

「……俺は、このことに対してハルカの父母からの怒りを受ける覚悟もしていたんだぞ」

「え……、なんでおとん、じゃなかった、父と母が怒るの？」

わたしはカレヴィの思ってもいなかった言葉に思わずぽかんとしてしまった。

「普通は、異世界などという訳の分からないところには大事な娘をやりたくはないだろう」

「ああ、そうか。今まで一緒に住んでたんだしね。……でもたぶん、二人ともまだ状況がはつきり把握できていないだけだと思うよ」

おとんとおかん、謁見の間中呆然としてることがほとんどだったものね。

「それがなんだ。娘のことをあげつらうような真似をして。親なら娘の長所くらい分かっついていそうなものだろう」

「あー、カレヴィわたしのために憤ってくれてるんだね？」

彼に惚れるまではいかないけど、これにはちよつと感動した。

カレヴィ、なんだかんだ言っついていい人だなあ。

「……未来の王妃をあそこまで言われて黙っているほど、俺は薄情ではないつもりだぞ」

「うん、ありがと。……でもわたしの長所って自分でも思いつかないなあ。だからうちの両親がそういう物言いになったのも仕方ないと思うよ」

わたしがそう言つと、カレヴィは顎に手を当てて少し考え込んだ。
「ハルカの長所は、おおらかなところじゃないか？ たまに卑屈な発言も混じるが」

「……卑屈？」

カレヴィの言っていることがよく分からなくて、わたしは首を傾げた。

「自分も持てない女だと豪語していたじゃないか」

ああ、あれね。

「いや、実際もてなかつたし。だから、そう言っただけなんだけど」「それはやめる。おまえの容姿はおまえが言っほど酷くない。それに、おまえは俺の妃になるのだから、そんなことはもう関係ないだろっ」

「うん、まあ。そうだね」

わたしはカレヴィのその言葉にくくりと頷いた。

王様でイケメンなのに、気さくでこういう気遣いができる彼は、結婚相手として、これ以上の贅沢はないのだろう。

……ただし、突然現れたわたしを王妃に据えようとするところから、結婚に対するやる気はほとんど皆無だけど。

わたしが頷いたことで、カレヴィはほっとしたように少し息を付く。

「……それでは、ハルカの両親と合流するか。ハルカはまた着替えてこい」

「え、このままでいいよ」

いちいち着替えるの、めんどくさいし。

わたしは断ったけれど、カレヴィがそれを許さなかった。そして、有無を言わさない口調で言った。

「ハルカ、着替える」

カレヴィの命令で大急ぎで自分に与えられた王妃の間に戻ったわたしは、侍女達に例のキラキラした衣装に着替えさせられた。

それで、おとんとおかんのいる部屋に通されると、既にそこには千花の他にカレヴィも来ていた。

中央の大きなテーブルには、おいしそうな料理と中身はお酒と思われるデカンターなんか置いてある。それを目にしたら、なんだかお腹がすいてきた。

わたしの姿を認めたおとんとおかんは真っ赤な顔でふらふらとわたしに近寄ってきた。

「おおっ！ はるか、そういう格好をするとまるで別人だぞ！ さすが未来の王妃だ！」

なにがさすがなんだかよく分からないけど、おとんとおかんは既に出て来た上がっていた。

……誰だよ、こんなに飲ませたの。立派なよっぱらいじゃないか！
「はるか、よくやったわ！ まさかあんたがこんな玉の輿に乗るなんて、まるで夢みたいだわ！」

そう言いながら、おかんは酒と思われるグラスをあおる。
その様子をカレヴィは呆れたように見ていた。

「はるか、ごめん。ちょっとお酒でも入れて、気分をほぐしてもらってから説明しようとしたら、おじさんとおばさん、飲み過ぎちゃって、こんなことに」

千花が申し訳なさそうに謝ってくるけど、どう考えてもこんなに正体を失うほど飲んだ本人達に問題があるだろ。

「侍女になにを用意したのか聞いたら、ルルア酒だったそうだ。これは飲みやすいが、かなり強い酒だ」

カレヴィは、強いと言うわりにはそのルルア酒なるものをくいぐい飲んでる。

わたしはカレヴィの隣に座って彼にルルア酒を注いでもらうと、一口それを含んだ。……なるほど、フルーティで確かに飲みやすい。

「正直、おまえにはまったく期待していなかったが、世の中には不思議なこともあるもんだなあ」

……うっさい、おとん。

「それもこーんなハンサムな王様とお。わたしがもうちょっと若かったら代わりたかったわ」

……もうちょっとって、それでも歳取りすぎだろう、おかん。

「……しかし、ハルカの両親は変わっているな」

カレヴィは溜息を吐いてしみじみと言う。

……わたしがここに来るまでにおとんとおかん、いったいなにをやったんだ。

千花に聞くと、二人は狂喜乱舞の踊りを今まで披露していたらしい。

なんだかさつき二人にムカついていたのが馬鹿馬鹿しくなり、わたしは手元のルルア酒のグラスをあおった。

その後。

見事に出来上がってしまったわたしは、カレヴィを床に正座させて「適当に結婚相手を決めるのはよくない」と懇々と説教していたとか。

それを後で千花から聞かされたけど、わたしはまったく覚えていなかった。

11話 突然ですが結婚します

とりあえず、おとんとおかんにはわたしがカレヴィの妃になるとは分かってもらった。

でも、問題はまだ残っている。

ザクトアリア王妃になるには、その準備期間もあるから、わたしはすぐに会社を辞めなければならない。

ただ、これが社会人として、周りに非常に迷惑をかける行為なのは分かっている。それは本当に申し訳ないと思う。

わたしの直属の上司である主任も今すぐ辞めることには渋るだろう。

それを考えると気が重かったが、とにかくわたしは休み明け早々主任に話をする事とした。

わたしはいつもより早めに会社に出勤して、主任に話を切り出す準備をしていた。

今のわたしは、あか抜けない水色の事務服と白いスカートというこの会社ではまあ標準の格好だ。

ただし、化粧はファンデをごく薄く塗って、リキッド口紅を軽く塗っただけという手抜きぶり。髪はうねるくせっ毛を簡単に後ろで一つにまとめただけだ。

そんな格好してるからモテないのよ、と会社の人に言われたことがあるが、作業員のおばちゃん達相手に巻き髪とか、つけまつげバチバチやる気は、わたしにはまったくない。

「悪いけど、しばらくここで待機しててね」

「……俺も一緒に行かなくていいのか？」

千花に異世界召喚されてきて、この世界の服装をしているカレヴ

イが少々心配そうに言ってきた。

初めてきた世界だというのに、カレヴィはそのことに動揺する気配もない。うむ、肝の据わったやつだ。さすが王様。

……とは言っても、まだ車とか電車とか、立ち並ぶビルとか見た訳じゃないから、その辺りはまだピンときていないだけかも知れないけど。

「うん、まだ大丈夫。必要になったら呼びにくるから。……ちょっと殺風景なところだけど、我慢してね」

今カレヴィや千花という備品倉庫は滅多に人が来ない穴場だ。

もし万が一人が来ても、千花がいるから隠れることはできるし、まあ大丈夫だろう。

「はるか、頑張つて。駄目そうならすぐそっちに向かうから」

「うん、じゃあ後でね」

わたしは千花とカレヴィに手を振り、職場の事務所に向かった。

始業四十分前の事務所にはまだ誰も来ていなかった。

そこでわたしは謝罪と今までの感謝の意味も込めて、みんなの机の上をいつもより綺麗に水拭きしてから、床を箒で掃いた。

ちりとりでゴミを集めていたところで、主任がやってきた。

「おはよう。なんだ、只野ちゃん、今日はやけに早いな」

まあ、いつもは二十分前とかだもんね。主任がそう言うのも当たり前だ。

「ええ、まあ。主任、おはようございます」

わたしは適当にはぐらかしつつ彼に挨拶すると、とりあえずちりとのゴミを捨てに行った。

それから給湯室で手を洗って、お茶の準備をする。

お湯で急須と主任の湯呑みを暖めてからそのお湯を捨て、お茶を淹れる。

わたしは主任の湯呑みをお盆に乗せて運びながら、結婚話をなんと言つて切り出そうかと考える。……あ、もう着いちゃった。

「どうぞ」

「ありがとう」

わたしが机にお茶を置くと、主任はまず一口啜つてから唸った。

「うーん、やっぱり只野ちゃんのと淹れたお茶が一番旨いなー。なんというか、春山ちゃんは淹れ方が適当だからなー」

ちなみに、主任が言った春山ちゃんというのはわたしの後輩に当たる事務の女の子だ。

まあ、わたしの淹れ方もごく普通なので、そんなに褒められるようなものではない。

「ところで、主任。お話があるんですが」

「ん？ なんだ、困ったことでもあったの？」

「いえ、そういうことではないんですが……」

むしろ困るのは、わたしじゃなくて会社の方なだけだね。

「実はわたし、今度結婚することになったんです」

そう言った瞬間、お茶を飲んでいた主任が思いきり吹き出した。

ちよつとその反応はベタすぎるだろ、と漫画描きの視点から、つい心の中でつつこんでしまう。

とりあえず、わたしは急いで給湯室から布巾を取ってきて、惨憺たる状況の主任の机を拭いた。

「あ、ああ、ありがとう。……けど、只野ちゃん結婚するって本当なのか？」

「本当です。あと急で申し訳ないのですが、すぐに辞めさせてもらいたいんですけど」

わたしがそう言うと、案の定主任は渋い顔になった。

「すぐつて一ヶ月後くらい？」

「いえ、できれば今日にでも」

かなりの無茶を言ってるのは自分でも分かっている。主任も渋りきった顔になった。

「それは困るよ、引継もあるし」
そりゃ、そうだろうな。

「一応、春山さんにはわたしの仕事を教えてはありますが」
「でも、いきなり仕事量二倍じゃ、とても春山ちゃん一人じゃさばききれない。次の子を入れるにしても、只野ちゃんにはしばらくいてももらわないと」

「すみません。でも、外国の人に嫁ぐことになったので、それは無理なんです。本当にすみません」

わたしはここぞと主任に誠心誠意頭を下げて謝った。……こんなことしても会社社に迷惑をかけるのは変わりないんだけど、やっぱり気持ち的にすごく申し訳なかつたし。

「只野ちゃんが外国人と……」

主任はモテない女のわたしが急に結婚すると言ってきた、そしてその相手が外国人だということにショックを受けたようだった。

その時だった。

「おい、ハルカ。まだ説得できていないのか」

呼んでもいないのに、なぜかカレヴィがそこに現れてわたしは驚いた。

さらに間の悪いことに事務所の他の人達や作業員のおばちゃん達が出勤してきて、どう見ても外国人で、飛び抜けた美形のカレヴィを目にして大騒ぎになった。

「……えーと、彼がわたしの結婚相手です」

仕方なくわたしは、カレヴィを手で示しながら紹介する。

その後の騒ぎは、もちろん先程の比ではなかった。

12話 寿退社

ちよつとした大混乱の後、わたしとカレヴィは主任から報告を受けた係長、課長と一緒に応接室にいた。

「ほう、それではカレヴィさんはフランスの方なんですね」

どうやっているのかは分からないけれど、わたしとカレヴィの耳元には千花の指示が随時届いている。

わたし達はそれに従って、目の前の課長と係長に結婚に至る嘘の説明をしていた。

最初にカレヴィをフランス人という設定に言った千花に、浅黒い肌のカレヴィははたしてそう見えるのか不安を覚えたわたしだったけれど、まったく問題なかったようだ。

フランス人といったら今まで白人のイメージしかなかったけれど、実際は色々な人種の混血が進んでいて、見た目も様々なんだそうだ。課長と係長もそれは初耳だったようで、カレヴィのどこの国とも知れない容貌を興味深げに見ていた。

「俺の家はそこそこの格式のある旧家だ。そこで、はるかには花嫁修業がてら、言葉を習得してもらう。その為には今すぐ日本を発たなければならぬ」

課長と係長相手にどこまでも偉そうにカレヴィは言う。まあ、一国の王様だから仕方ないのかもしれないけれど。

ちなみに、課長と係長には最初にカレヴィは教わった日本語が偏っているのです。偉そうに聞こえるのは勘弁してくださいと断っている。

でも、課長と係長もカレヴィの威風堂々とした態から、その口調もあまり気になっていないようで、むしろとても偉い人を迎えているような態度になっている。

「そうですか。只野さんは仕事もできるし、本当は抜けられると困りますが、そういう事情ならいたしかたありませんね」

おお。課長、今のはお世辞でも嬉しいよ。

カレヴィの言葉に頷きながら言った課長の言葉にわたしはちょっと感動する。

「確かに、今度から只野さんに急ぎの文書を上げてもらうことができなくなるのはちょっと厳しいな。只野さんのタイピングのスピードは貴重だったからね」

「すみません」

自分では駄目駄目な人間だと思ってたけど、会社の人達はこんなわたしを評価してくれてたんだ。

そう思うと本当に申し訳なくて、わたしは二人に深々と頭を下げた。

「まあ、こんな事情ならしょうがないから、只野さんは自分の幸せを優先して。慣れない海外生活、体に気をつけて頑張ってね」

「あ、ありがとうございます」

課長がわたしに激励の言葉をかけると、係長も続けて言った。

「溜まっている有給休暇はちゃんと消化するからね。仕事のことなら、みんなで分担してなんとかするから、後のことは気にせず、自分の幸せのことを考えてね」

「本当にすみません。ありがとうございます」

暖かい二人の言葉にわたしはつい涙腺が緩んで、ちょっとだけ泣いてしまった。

「ハルカ」

カレヴィがわたしの肩に手を置いて、心配そうに覗きこむ。

課長と係長はそんなわたし達を微笑ましそうに見ながら、心から祝福してくれた。

そしてめでたく寿退社することになったわたしは、自分のロッカ―の整理をしてから、机にある私物をまとめると、事務所の人達に

用意してあったお菓子を配って回った。

「おめでとう、只野さん」

「まさか只野ちゃんが嫁に行くとはなあ。向こうでも頑張ってるね」

「只野さん、いなくなっちゃうなんて寂しいですぅ〜っ」

そう言っただけ抱きついてきたのは、後輩の奈緒ちゃん。さっき主任に春山ちゃんと呼ばれていた子だ。

ちょっと頼りないところもあるけれど、きっと彼女ならわたしの代わりにバリバリ働いてくれるだろうと信じている。

「急なことで本当にごめんね。迷惑かけるけど、後のことは頼むね」

わたしがそう言っくと、奈緒ちゃんは真っ赤な目をして、はい、と頷いた。

「せつかくのおめでたいことなのに、只野ちゃんにお祝いをあげられなくてごめんね」

主任が申し訳なさそうに言ってきたけれど、こんな無茶を聞いてくれただけでも充分ありがたい。

「いえ、そんなこと気にしないでください。急に無理を言っすみませんでした。それから……、今まで本当にお世話になりました」

わたしは事務所の人達に深々と頭を下げてから、失礼しますと言っつて、後ろ髪を引かれながらも踵をかえす。

わたしはカレヴィに肩を抱かれて、その背に「只野さん、お疲れさま」「体に気をつけてね」「お幸せに」等々、ありがたい言葉を受けながらその場を去った。

わたしが備品倉庫まで戻ってくると、その場に待機していた千花は笑顔で迎えてくれた。

「あつ、はるか！ よかったね、うまく説得できて」

「うん」

千花のその笑顔を見たら、なんだか急に泣きたくなって、わたし

は彼女に抱きついた。

そしてぼろぼろ涙をこぼすと、千花は慰めるようにわたしの背を優しく撫でてくれた。

「……こういう場合は、普通、夫になる俺に抱きつくものじゃないか？」

とかなんとか、カレヴィがぼやいたらしいけれど、その時のわたしはもちろん聞いてはいなかった。

13話 花嫁修業……なのかな？

めでたく寿退社したわたしは、またザクトエリアに戻ってきいた。

その前に、サイトには私事が忙しいので更新が滞ると告知してあるので、しばらくは安心だろう。

これからわたしには、怒濤の花嫁修業が待っているんだよね。…それを考えると、ちよつと気が重い。

千花もいろいろ忙しいらしくて帰っちゃったし。

わたしは王と王妃の共同の間で晚餐をとった後、香り高いコーヒを飲みつつ、少し溜息をつく。

それを耳聴く聞きつけたカレヴィが言ってきた。

「なんだ、ハルカ。……不安かな？」

「……まあ、不安といえば不安だけど。わたしは庶民だし、ちよつと気が重いよ」

「そうか、それもそうだな。だが、それは徐々に慣れていけばいい。

……そういえばおまえには決まった侍女を付けていなかったな。代々王妃には三名付くことになっているが」

「え、そんなにいららないよ」

わたしに三人も付くとかそんな大げさな。

「そうはいかない。王妃となればそれなりに体裁を整えなければならぬ」

「そうなの？」

王妃の体裁とか、なんか面倒だなあ。

「侍女長と相談して、若くともしっかりした者を選ぶようにしよう。そうすればハルカのいい相談相手になるだろう」

「うん。ありがとう」

ちよつと重いけど、カレヴィはわたしのためを思っていてくれてるんだから、そこは感謝しなきゃいけないよね。

カレヴィが侍女長のゼシリアを呼ぶと、彼女は既にわたし付きの侍女を決めてあったらしく、すぐに紹介された。

新しくわたしに付く侍女は、赤毛で水色の瞳、褐色の肌のイヴェンヌ、日本人のそれよりもずっと濃い黒髪黒目、象牙の肌のモニールカ、白っぽい金髪、緑青色の瞳、白い肌のソフィアと見た目様々だった。

この国は他の国よりもいろいろな見た目の人が多いらしいから侍女もそんな感じな人達になったらいいけれど、これだったら名前も間違うこともなさそうなのでよかったのかもしれない。

侍女達を紹介された後、わたしは自分の居室に戻って、下描きまでしていた漫画のペン入れでもしようかと思っていたけれど、なぜかそれをゼシリア達に止められて、湯殿まで連れていかれた。

まだ寝るまでに時間はあるし、今はいいよと断ったんだけど、「だからこそです」という謎の言葉を受けて、わたしは首を捻る。

そんなこんなでわたしはゼシリア達に洗い上げられ、香油を使ったマツサージも丹念にされて絹の寝間着を着せられた。

「それではおやすみなさいませ」

「ハルカ様、頑張ってくださいませ」

……頑張るってなにを？

年若い侍女達から赤い顔で言われた言葉に、わたしは天蓋付きのベッドに腰掛けつつも首を傾げる。

そうしているうちに、侍女達は明朝伺いますと言って寝室を出ていってしまった。

なんだかよく分からないながらも、寝るにはまだ早いし、家から持ってきた漫画でも寝ころんで読むかと、居室に置いてあるそれを取りに行こうとして立ち上がった。

その時、いきなり寝室のドアを開けてカレヴィが現れたのでわたしはびっくりしてしまった。

「ハルカ」

「カ、カレヴィ？ どうしてここに」

まさかとは思うけど、アレをしにきたんじゃないよね？ そうであつてほしい。

「おまえを抱きに来た」

はいい つ！？

嫌な予感的中してしまったわたしは思わず飛び上がってしまった。

「な、なに言つて……、だつてまだカレヴィとは婚約期間中でしょう！？」

カレヴィからなるたけ離れようと後ずさつたわたしは、自分からベッドにダイブしてしまった。

思わず悲鳴を上げたわたしをカレヴィは呆気にとられたように見ていたけれど、わたしが体を起こす前に手首を押さえつけてそれを阻んだ。

「だ、駄目だつて！ だつて、花嫁は清らかじゃないといけないつて言つてたじゃない！」

必死に足をじたばたさせながら訴えたが、カレヴィはまったく気にしたふうでもなかった。

「夫になる俺なら別だ。……それにこれは花嫁修業の一環でもある」
そんなの、聞いてないよ！！

そう叫ぼうとした途端、カレヴィの唇に口を塞がれた。

「ちょ……、カレ、……ヴィ……ッ」

文句の一つも言つてやろうと口を開くも、その度にカレヴィの深い口づけを受けてわたしは息も絶え絶えになる。

「こんな、急に……、酷いよ……っ」

なんとかそれだけ言つたけど、彼から返ってきたのは容赦のない言葉だった。

「おまえは俺の妃になると決めたのだから。だつたら我慢しろ」

……そう言われると、わたしはなにも言えなくなつてしまふ。

最終的にザクトアリア王妃になることを決めたのは他でもないわたし自身なんだし。

「……分かったよ」

わたしが諦めて体の力を抜くと、カレヴィは無駄に色気を振りまいてふつと笑った。

けれど、その笑みは経験ゼロのわたしには恐怖でさえあった。

思わず息を飲んでしまったわたしをカレヴィは見下ろすと、いらん宣言をしてくれた。

「いろいろと仕込んでやるから覚悟しておけ、ハルカ」

14話 不機嫌な朝

「……そう怒るな、ハルカ」

少しばかり遅い朝食の席で、カレヴィはわたしにちょっと後ろめたそうに言ってきた。

昨夜は結局合意の上でそういう行為に至ったわけだけど、なぜか起き抜けにまでアレを無理矢理されて、わたしは機嫌が悪かった。

「おまえが思いの外よかったので、つい我を忘れた。すまない」
うるさい、このエロ王。……いや、野獣。

わたしを結婚相手に選ぶくらいだから、アレの方も淡泊なのかと思ったら、実はとんでもなかった。

カレヴィは、恥ずかしがるわたしにさんざんエロいことや言葉責めをし、そしてあるうことが、わたしにまでそのエロいことをするように強要してきたのだ。

「……言っておくけど、わたしは初めてだったんだからね？」

カレヴィは最初はなるべく痛くしないように配慮してくれてたみたいだけど、でもやっぱり初めてだから痛かったし。……まあ、でもそれは仕方ない。けど問題はそれからだ。

カレヴィはなにかたがが外れたしまったようで、わたしは何回もやられてしまった。そしてわたしは、今腰が痛くてたまらない。

「それは悪かったと思っている。しばらくはあの手の無理強いはない」

「……なら、いいけど。それにしてもいやに手慣れてたけど、過去にそういう人でもいたの？」

わたしがそう聞くと、カレヴィはちよつとろたえてた。

……カレヴィは美形だし、王様だし、そういう人がいてもわたしは一向に気にしないけど。

「いや、王宮付きの高級娼館からの娼婦としかそういうことはして

いない」

「…………へ…………」

意外と言えば意外。

まあ、その方があとくされもないのかもしれないけど。

そうか、だからわたしに対してでも高級娼婦相手にするような行動に走ったんだ。

「あれ、普通の姫だったら、びつくりしすぎて泣いてたんじゃない？　いくらなんでも初めてであんなこと強要するとかないでしょ」

わたしの代わりに別の姫がカレヴィの結婚相手となった場合を想定してみても、言ってみる。

うん、結婚に夢を持ってる姫ならあまりの扱いにショックを受けるかもね。

わたしは、夢も希望も持っていない歳だった女だからまだまじだけど、それでも初めてであれば酷いと思う。

「…………だから、すまない…………、そうだ、ハルカなにか欲しいものはないか」

それまで居心地悪そうな顔をしていたカレヴィが突然思いついたように言った。

ふーん、カレヴィがせっかくそう言うならねだってみようか。ちようど、欲しかったものがあるんだ。

「それじゃ、腕カバーが欲しい」

わたしがそう言つと、なぜかカレヴィの目が点になった。

「…………腕、カバー…………？」

「漫画描くの衣装の袖が汚れそうなんだよね。腕まくりしてもいいけど、腕が汚れるのは変わりないし」

わたしの描いている漫画はカレヴィには既に見せてある。

最初カレヴィは漫画特有のデフォルメした描き方に戸惑っていたけれど、すぐにそれに慣れて漫画の読み方について聞いてきた。

基本的には一頁の右から左に読んでいくんだよと言ったらすぐ理解したらしくて、わたしの描きかけの原稿にすいすい目を通していった。……こんなことなら今まで描いた原稿も持つてくるんだったな。

そういう訳でわたしの漫画を読んだカレヴィだったけれど、女らしくないわたしにしては、中身がかなり少女趣味だったので結構驚いていたみたいだ。

人は見かけによらないものだな、としみじみ呟いてた。……失礼な。

ちなみにわたしの描く漫画は、千花に魔法をかけてもらってあるから、こちらの世界の人にも理解できるようになっている。

……本当に千花の魔法は便利だなあ。

わたしがつくづく感心していると、カレヴィがちよつと困った顔をして聞いてきた。

「……そんなものでいいのか？ 首飾りとか腕輪が欲しいとかないのか？」

「ううん、腕カバーがいい。それも木綿で黒くて汚れが目立たないやつ」

わたしがきつぱりはつきりそう言つと、カレヴィは仕方なそうな顔で大きく溜息をついた。

……なんだ、腕カバーじゃいけなかったのかな？ でも当面欲しいものもないし、もしあつても千花が持つてきてくれるし。

わたしが首を傾げながらそう思っていると、カレヴィがちよつと呆れたような顔で言つてきた。

「本当に、おまえの考えることは俺には分からん」

うーん、庶民と王様の考え方の違いは結構大きい、のかな……？
なんだか、それだけじゃないような気もするけど。

15話 非難じじじ

それからカレヴィは、イヴェン又達に腕カバーをすぐ持ってくるように言いつけると、ソフィアが代表してそれを持ってきてくれた。

これだよ、これ。

構造は簡単だから、たぶんあるんじゃないかとは思ってたけど、やっぱり異世界にもあったよ、黒い腕カバー。

ちよつと感動しながら装着したら、カレヴィに今着けるのはやめると言われてしまった。

これくらいいいじゃん、けち。

仕方なく腕カバーを外してカレヴィと食後のコーヒを飲んだら、千花が様子を見にやってきた。

「千花っ!」

昨夜のことを報告しようと千花に駆け寄ろうとしたら、途端に腰に痛みが走ってわたしはよろけた。

「危な……」

「ハルカツ」

バランスを崩したわたしに、千花とカレヴィが声を上げる。

その途端、見えないなにかがわたしの体を支えて、どうにかわたしは転ばずに済んだ。……もしかして、千花が魔法で受け止めてくれたのかなあ。

「はるか、どうしたの?」

瞬間的に千花がよろよろしてるわたしの傍に移動して尋ねた。カレヴィも椅子から立ち上がって、わたしの傍に寄ってくる。

「あ……、うん。ちよつと、腰が痛くて」

「……腰?」

千花が首を傾げながらもわたしの肩に触れると、さっきまでわた

しを苦しめていた腰の痛みが急になくなった。

「あ、あれ……？」

「治癒魔法を使ったの。それにしてもはるか、腰が痛いってもしかして……」

千花が眉を寄せて言いづらそうにした。

「あ、うん。昨夜カレヴィとそういう事になったんだ」

わたしがそう言った途端、千花がきつとカレヴィを睨んだ。

「……どういことですか？ まだはるかとは婚約期間中でしょう」

千花のその厳しい視線にも特に堪えた様子もなく、カレヴィはこともなげに言った。

「我が国では、王及び王太子に輿入れする花嫁は、婚約期間中に伽の習いをするしきたりがある。俺はそれに従ったまでだ」

「え……」

千花はザクトアリアのその風習を初めて知ったらしくて、愕然とした顔になった。

「は、はるかか、ごめん。わたし、この国にそんな風習があるなんて知らなくて。……大変だったでしょう？ ごめんね」

千花がうるたえながらわたしに縋りついて謝ってきたけれど、これは彼女が悪い訳じゃない。まあ、あえて言うとしたら悪いのは。

「ううん、千花が謝る事じゃないよ。結局王妃になるって決めたのはわたし自身だし。だから気にしないで」

「でも……」

わたしは笑って言ってみただけど、千花はまだ申し訳なさそうだ。

……仕方ない。千花は最強の魔術師で忙しいのは分かってるけど、その時間を少しもらってしまおう。

「じゃあ、午後の礼儀作法が始まるまでわたしに付き合ってくださいよ。久しぶりに千花に漫画のアシしてもらおうから。それで今回の件は帳消し。ね？」

わたしがにつと笑って千花の肩を叩きながらそう言うと、彼女は

ちょっとだけ泣きそうになりながら、うん、と頷いた。

「……まあ、俺も事前に言っておかなくて悪かったが」
それまでわたし達の会話に入りづらそうにしていたカレヴィがわたしに謝ってくる。

だからわたしは、ここぞとばかりに言っちゃった。

「本当だよね!!」

「……おまえ、ティカ殿と夫になる俺との扱いが違いすぎるぞ」
「そりゃ、千花は幼なじみの友達だもん。昨日今日会ったばかりのカレヴィとは歴史が違うよ。……それよか、カレヴィ執務に取りかからなくていいの？ わたしもいい加減漫画描きたいし、女同士の話もしたいから、もう自分の部屋に戻るね」

わたしはカレヴィの抗議を軽くあしらうと、千花を促して、共同の間から自分の居室へとさっさと移動する。

「おい、ハルカ」

カレヴィがなにか言いたそうだけど、無視。

腕力バーはもらったけど、やっぱりまだカレヴィにはアレのこと
でいろいろと怒ってるんだよね。

「……ねえ、はるか。カレヴィ王が呼んでるけど」

千花が気遣わしげに言ってくるけれど、いいのいいの、気にしないで。

「それよか、聞いてよ千花。カレヴィったら酷いんだよー!」

わたしは完全にカレヴィをしかとして千花に話しかける。

わたしのあからさまな無視にちょっと呆然としているカレヴィを
気の毒そうに見ながらも、モニーカ達三人もわたし達の後について
きた。

それから。

カレヴィはすごすごと自分の執務室に戻っていき、わたしは昨夜のカレヴィの所業を千花と侍女達三人に暴露した。

「まあ、そんなことが」

「それは酷いね」

「陛下、あんまりですわ」

「女心を解さない方ですのね」

……等々、わたしに対する同情が一心に集まった。

ふふふ、そうでしょ、そうでしょ。

カレヴィったら酷いよね。

それでわたしは下降気味だった機嫌もすっかり治ったけれど、今回女性陣の非難が集中したカレヴィは執務室でちよっといじけていたとか何とか。

……まあ、でもこれはゼシリアからの聞きかじりなんだけどね。

16話 アシスタント

昨夜カレヴィがわたしになにをしたのか暴露した後、わたしは居室のテーブルに漫画の原稿を広げていた。

ちなみにわたしは腕力バー装備、アシスタントの千花は魔法で防御するから腕力バーはいらないと言って綺麗なドレスの格好のままだ。

「それにしても……、さっきのはるかのカレヴィ王への態度はまずかつたんじゃないかなあ」

千花がペンで枠線引きをしつつそう言ってきたので、ちょっと納得できなかったわたしは反論する。

「だって、あれくらいしなないときつと反省しないよ。カレヴィは王だからあまり強く言う人間もいないだろうし」

「まあ、そうかもしれないけれど……。でも、あまりやりすぎると二人の仲に関わるかなって思って。できればはるかとかレヴィ王は仲良くやって欲しいし」

「……うーん、そう言われるとなにも言えなくなっちゃうなあ。仕方ない、ここは譲歩するか。」

「分かった。わたし後でカレヴィに謝るよ」

確かに、結婚生活が始まる前から問題起こしちゃまずいものね。

「うん、そうした方がいいよ」

わたしの言葉に千花も頷く。……それにしても、千花っているいい気遣いの出来るいい友達だなあ。わたしにはもったいないくらい。

「……それにしても、ハルカ様は大した技術をお持ちですね。素晴らしいですわ。わたくしもなにかお手伝いすることができればよろしいのですけれど」

イヴェンヌがふいに溜息をついて言ってきたので、わたしはペン入れをする手を止めてうーん、と考えた。

まったくの初心者でも枠線引きとか消しゴムかけならできるかも。
「……もしよかったら、やってみる？ それじゃ千花、ベタ塗りに変わってくれるかな？」

「うん、分かった」

千花は頷くと、すでにペン入れし終わった原稿を魔法で乾かし、
×印の付いたところを筆で塗りつぶし始めた。

「え……、でもわたくしに出来るのでしょうか。足手まといにならなければよいのですが」

彼女にとっては思ってもいない事態だったらしくて、イヴェン又
がうつたえる。……ちよつと自信がなさそうだ。

そこでわたしは、紙にシャープペンで線を何本か引き、その上をペン
でなぞらせて練習させることにした。

「……出来ましたわ！」

千花の隣に座って、しばらく定規とペンで紙相手に格闘していた
イヴェン又は充実感で瞳をきらきらさせて言った。……うお、ちよ
つと眩しい。若いっていいね。

肝心の枠線引きの出来は……どれどれ。うん、きちんとシャープ
ペンで描いた線の上を一発でなぞれてるし、これなら合格かな。

それでわたしは原稿を一枚イヴェン又に渡し、枠線引きを開始し
てもらった。

それに時折、千花の的確なフォローが入り、イヴェン又は少し緊張
しながらも、綺麗に枠線を引いていた。

……ありがと、千花。さすが千花は気が利くなあ。

わたしは千花の存在をありがたく思いながらも、ペンを走らせる。

千花は仕事が速いから、おちおちしてられないのだ。

「イヴェン又ばかりずるいですわ。わたくしもお手伝いしたいです」
ソフィアがそう言うと、モニターカも負けじと言う。

「わたくしもハルカ様のお役に立ちたいですわ」

うーん、道具もそんなにないから枠線引きの練習してもらおうわけにもいかないし、後は消しゴムかけぐらいいしか残ってないな。

……今度元の世界に帰ったときは、もう少し、ペンとか定規とかも補充しておこう。

「……じゃあ、ソフィアは消しゴムかけして。モニーカは悪いけどイヴェン又とソフィアの分の腕カバー持ってきてくれるかな。あとみんなのお茶淹れて。あ、モニーカの分もね」

わたしがそう言うと、ソフィアはぱつと顔を輝かせ、モニーカはがっかりしたような顔になった。

「ごめんね。モニーカにも明日手伝ってもらおうから。ソフィアは、わたしの隣に座って。今から消しゴムかけしてもらうけど、紙を破らないように、文字の書いてあるところだけは残して綺麗に消して……」

……こんなふうに」

わたしは千花がベタ塗りして乾かしてくれた原稿に慎重に消しゴムをかけて手本を示した。

「分からなかったら、声かけてね」

「はい、かしこまりました」

ソフィアは使命感に燃えた瞳で頷くと、教えた通り綺麗に消しゴムをかけてくれている。さすがに王宮付きの侍女だけあって、仕事が丁寧だ。

「腕カバー、頂いてまいりましたわ！」

そこで、一時わたしの居室から出ていたモニーカが戻ってきて、侍女二人に腕カバーを渡した。

すると、二人はわたしが指示するまでもなく、腕カバーを装着した。

見ると、モニーカも自分の分を確保しているようだ。大事に居室の隅っこに置いていた。

それで、モニーカにお茶を淹れてもらってみんなでほっこりとし

休み。

そこで、今描いている話の前の話の原稿はないのかと侍女達に聞かれたので、わたしは午後の礼儀作法が終わった後、画材の調達を兼ねて家から今までの原稿を持ってくることにした。もちろん、これは千花頼みなんだけどね。

わたしが彼女達にそう伝えると、「楽しみですわー」とうきうきしながらまた作業に入ってしまった。

「ハルカ様、これで完成なのですか？」

ふと、消しゴムかけまで終わった原稿を眺めていたモニカが聞いてきた。

「ああ、まだ。トーン貼りとか写植とかが残ってるよ」

わたしが簡単にトーン貼りと写植の説明をすると、侍女三人が感嘆したように溜息をついた。

「ハルカ様は随分と細かい作業がお得意ですね」

「絵もお上手ですし」

「お話も素敵ですわ」

「……ありがとう」

侍女三人が口々に褒めてくれるので、わたしはちよつと照れながらも礼を言った。

いやー、恥ずかしいけど、やっぱり褒められるのは素直に嬉しいね。

それに、三人の新たなアシスタント候補が増えたことも嬉しいし。わたしがそう言ったら、千花にすかさず突っ込まれた。

「……はるか、王の婚約者付きの侍女だよ。そこは間違えちゃ駄目だよ」

う、そうだった。彼女たちは王宮付きの侍女だった。だとしたら、そうそう荒使いはできないよなあ。

わたしがそう思っていたら、ソフィアが言った。

「まあ、ティカ様、わたくしは侍女兼アシスタントがよいですわ」

そうするとイヴェンヌも言う。

「わたくしもそれがよいです。なんだかおもしろそうのでわくわくしますわ」

「わたくし、ゼシリア様に正式に許可をいただきますわ。そうすれば、なにも問題ないでしょう」

モニーカもわたしや千花にっこり笑いかけながら言う。

……この三人、マジだよ。

マジでわたしのアシやる気だ。

わたしは感動しながら、千花はちょっと呆れながら三人を見ていた。

でもまあ、これで効率が上がって趣味のサイトの更新頻度も上がってめでたしめでたし、なのかなあ？

けど、その前にカレヴィの花嫁修業という難関が立ちふさがっているけどね。

17話 仲直り

千花や侍女達と和気あいあいとしていた時は過ぎて、今はお昼。千花をお昼に誘ったけど、ちょっと用があるからという理由で断られちゃった。……しょぼん。

「それより、はるかにはカレヴィ王に早く謝ったほうがいいよ」という千花の言葉を受け、わたしは侍女経由でカレヴィに昼食の誘いをしてみた。

それに対して、カレヴィはすぐにお昼の用意してある共同の間までやってきた。

「先程は俺を無視していたのに、どういう了見だ」
わたしと向かい合って座ったカレヴィは幾分機嫌悪そうにしていた。

「……ありやく……。やっぱりわたし、彼の機嫌損ねちゃったんだ。
「いや、それはやりすぎだよ。ごめんね」

慌ててわたしがカレヴィに頭を下げると、彼は不機嫌そうに言うてきた。

「おまえがそんなに簡単に自分の考えを翻すと言うことは、おおかたティカ殿に諫められでもしたのだろう」

うつ、カレヴィ 鋭い。

思わずわたしが絶句していると、彼はふん、と皮肉げに笑った。

む、感じ悪いぞ。

「……千花にカレヴィと仲良くやってほしいと言われたのは本当だよ」

「おまえはティカ殿の言うことなら聞くのか」

なんだ、やけにつつかかってくるなあ。

「だって、千花の言うことはいちいちもつともだし。これから嫌でもずつと顔を合わせることになるんだから、少しはわたしも譲歩し

なきやと思つたんだ」

「……讓歩か。まあ、いい。食事が冷める。早く食べる」

わたしはカレヴィに大皿の料理を取り分けてもらったので、慌ててありがとうとお礼を言った。

「……ああ。そういえば、おまえは昨夜のことを侍女にまでばらしたのだな」

わたしはそれで、フォークにすくっていたポテトグラタンを皿にぼとつと落としてしまった。

うお、思い切りばれてるよ！

ふと周りを見ると、わたし付きの侍女達は少々心配そうに、カレヴィ付きの侍女達は興味津々にわたし達の様子を窺っている。

「……い、いけなかった？」

つい、興奮してその場にいたみんなに暴露しちゃったけど、やっぱりまずかったかな。

「いけないに決まっているだろう。そんなことを公にするやつがあるか。……おかげで俺は女心の分からない王というそしりを受ける羽目になったぞ」

「……事実じゃない」

わたしが小声で言うつと、カレヴィにじろつと睨まれた。

「なにか言つたか」

「う、ううんっ、なんでもない！」

うるたえたわたしは、慌ててポテトグラタンを口にする。おいしいけど熱い。

わたしはそれでちょっと涙目になりながらも、カレヴィに謝った。

「ご、ごめん。気に障ったのなら謝るよ。だから機嫌直して」

「……まあ、いい。おまえは今度からそのことを周りにやたらと口にするな。慎みがないと思われるぞ」

「あ、うん。ごめんなさい」

それでわたしはちよつとしょんぼりしてしまった。

確かに、怒りのままにアレのことを暴露してしまったのははした

なかったかも。

わたしがずーんと落ち込んでいると、カレヴィは料理が冷めるから早く食べると再度口にした。

それでわたしは、酸味の効いたソースがかかった鳥の唐揚げをナイフとフォークで切り分けて口にする。そうしたら、これからのこととかじわじわと不安になってきた。

「わたし……、王妃失格かな？」

美人じゃない上に憤りもないし、カレヴィがいくら適当に決めたとはいえ、愛想を尽かしても不思議じゃない。

せつかく、職場の人達にも祝福されたのに。

おとんとおかんも、さぞがっかりするだろうな。

…… 自業自得とはいえ、ちよつと泣きそうだ。

「……夜の習いまでしているのなら、そう簡単に婚約は解消されない。安心しろ」

カレヴィにそう言われて、わたしはなんだか泣きたくなくなって涙をぼろぼろとこぼしてしまった。

…… ああ、とりあえずは大丈夫なんだ。よかった。

「ハ、ハルカ、なぜ泣くん。俺はそんなにきつく言ったか？」

ちよつと慌てたように言ってくるカレヴィに、わたしはうっんと首を横に振ると溢れてくる涙をハンカチで拭いた。

「……恐れながら陛下、ハルカ様は慣れない環境におられるのですから、あまり不安を煽られないようにお願いします。淑女の慎みについてはわたくしからもハルカ様にお伝えします故、なにとぞ広いお心で見守りくださいませ」

代表するように侍女長のゼシリアがそう言うと、周りにいた侍女達も頷いた。

「……まいったな。ハルカはこの短期間のうちに侍女達を掌握したのか。やりにくくてかなわん」

そう言いながら、カレヴィはソースのかかった茹で野菜をフォー

クに刺して溜息をつく。

う、うーん。掌握とかは違うと思うなあ。

いくなれば、女心の分からないカレヴィの相手のわたしに対する同情心からだと思うけど。

でもわたしは、あえてそれをカレヴィには伝えなかった。

おまえに泣かれると調子が狂う、と言って目元を染めて不機嫌そうに食事を進める彼がちょっとおもしろかったからだ。

……うーん、こうしてみるとわたしって結構いい性格してるかもしれない。

18話 礼儀作法とその他諸々

カレヴィとの昼食を終えて迎えた、礼儀作法の初授業。

ああ、一番恐れていた時間が来ちゃったよ。

千花からも、礼儀作法の先生は厳しいものと覚悟しておいた方がいいよ、と言われていたので内心どきどきだ。

でも実際に現れたのは上品で優しい感じの先生だった。名前はシレネだって。

「それではハルカ様、立つたまましばらく静止してみてください」
そうシレネ先生に言われたので、わたしはその通りにしてみる。
すると、シレネ先生の細かいチェックが入った。

「ハルカ様、頭が揺れてます。もう少し我慢してください」
そう言いつつ、肩の位置やら、立ち方やらの矯正が入る。

……あ、さつきよりは大丈夫な感じ。

「……はい、今の姿勢がすべての基本ですから忘れないくださいね。……それでは略式の礼の仕方に入ります」

略式の礼と言われて、わたしはこっちの礼の仕方をぜんぜん知らないことに気がついた。

教えてもらった略式の礼は、膝を軽く降り曲げつつスカートの両側を摘んで、小首を右に傾げるというもの。ちなみにこれは大陸共通のものだそうだ。

わたしはそれを何度か繰り返した後、ようやく合格点をもらえた。

「それでは少し休憩にいたしましょうか」

それですっかりわたしは安心してしまっ、いつも通りテーブル席に腰掛けたら、シレネ先生から座り方のチェックが入った。

う、これも礼儀作法の一環なんだね。

その後も、カップの持ち方やらなんやら指摘されて、それも正す

ように言われた。

……うーん、シレネ先生は礼儀作法の教師にしては優しい方なのかもしれないけれど、やっぱりチェックは厳しいや。

そして休憩という名の礼儀作法の時間がすぎて、本日のシレネ先生の授業は終了となった。

「今日習ったことの復習を忘れないでくださいね」

「はい、ありがとうございます」

シレネ先生の礼に、わたしは習った略式の礼で返す。

わたしはシレネ先生を笑顔で見送った後、こっそりと溜息をついた。

一応、あつちでは事務職で接客することもあったから、そういうセミナーを受けたことはあるんだけど、やっぱり一回二回の付け焼き刃じゃ駄目か。

そこで、テーブルマナーや礼の復習はカレヴィに見てもらいながらやろうとわたしは決意する。……王であるカレヴィなら作法に関しては完璧だろうし。

そんなことを思いつつ、長椅子に座ってくつろいでいたら千花がやってきた。

これからあつちの世界で足りない画材の買い物があるのだ。……

千花、お世話になります。

ちなみに、千花に礼儀作法の先生は割と優しかったと言ったら、ずるーい、と返された。なんだ。

……ひよつとしたら、千花の礼儀作法の先生は余程厳しかったのかも知れない。

わたしは百均と画材屋で画材をしこたま買い込んだ後、スーパーに寄ってスナック菓子やお煎餅を千花と二人でたくさん買った。

「向こうはお菓子って言ったら、甘いものだもんね。だから時々塩気の利いたものが無性に食べたくなるよ」

千花のその言葉に、確かにあつちでは甘いものしか出てこなかったなと思り返す。

とりあえず、今日買ったお菓子は明日のお茶受けに出してもらおうことにしよう。

カレヴィやイヴェン又達も珍しがるだろうな。ふふ。

わたしは大量の買い物袋を下げ、ザクトアリア城に戻り、そこで千花と分かれた。千花、今日は（も？）ありがと。

「買い物というのは随分と時間がかかるのだな」

わたしが城に着いたのは既に晚餐の時間に近くて、カレヴィが共同の間でわたしの帰りを待っていた。

「ごめんね。目的のものを買ってすぐ帰ってきたつもりんだけど」カレヴィは王様だから、女の買い物にどれだけ時間がかかるかなんて分からないんだろうな。

ウィンドーシヨツピングなんてうっかりしなくてよかった。……

まあ、以前からあまりしてなかったけど。

とりあえず、わたしが帰ってきたことで晚餐ということになり、わたしはカレヴィに礼儀作法の授業のことについて聞かれたので、その内容をざつと説明した。

「千花に礼儀作法の先生は厳しいから覚悟しておいた方がいいって聞かされてたからどうなるかと思ってたけど、実際は優しい先生でよかったよ」

ステーキを切り分けながら笑顔で言うと、カレヴィがとんでもないことを言いだした。

「そうか。……おまえにはもっと厳しい教師を付けた方がよかったか？」

「え、えっ？ いや、今のままで結構です！」

「……冗談だ」

見ると、カレヴィはおかしそうに口元を押さえている。うう、おもしろがられてるよ、わたし。ひよっとして、これは朝の仕返しか？

まあ、それに関してはわたしにかなり非があるので強くは言えない。

……実はわたし、カレヴィにとんでもない借りを作っちゃったんじゃない？

ふと浮かんだ恐ろしい考えを振り払って、わたしはカレヴィに礼儀作法の復習のことについて言ってみた。

「そ、それで、先生に復習してくださいって言われたんだ。だから、カレヴィ後でわたしがきちんと出来ているか見てほしいんだ」

「ああ、いいぞ。しっかり見てやる」

わたしのそのお願いにカレヴィは笑顔で快諾してくれた。

うーん、カレヴィ、いい人だ。……夜は野獣だけど。

「その代わり、おまえには夜の方も頑張ってもらうぞ」

……結局そのオチか！

いい人と思っただのは撤回。カレヴィは王様の皮を被った野獣だ。

「……なら、侍女達に見てもらおうからいいよ」

「礼儀作法なら俺が見た方が確実だぞ。遠慮するな」

そんなこんなでカレヴィに押し切られたわたしは、礼儀作法の復習を彼に見てもらおうことになって、確かにその人選は間違ってたなかつたんだけど。

「……約束は守ってもらうぞ」

とかなんとか言われて、結局わたしは夜のカレヴィとのアレを何回も付き合わされることになってしまったのだった。

19話 喪女と野獣

外が明るい。

「……ハルカ、朝だぞ」

耳元でゾクゾクするような美声が響く。

こないない声の知り合いなんかいたっけ、とわたしは寝起きの働かない頭で考える。

ふと、隣で人が起き出す気配がした。……ああそうだ、カレヴィだ。

段々頭が冴えてきたけど、わたしはシートにくるまったまま彼を観察する。

浅黒い体は引き締まっていて、すごく綺麗な筋肉の付き方をしていた。

腹筋とか割れてるし、ああ、今すごくカレヴィをデッサンしたい。

「……カレヴィ」

自分で思っていたよりもけだるい声が出て、それにカレヴィが反応する。

「なんだ」

「カレヴィって、いい体してるよね」

褒めたのにカレヴィは目をむいて絶句。

……あれ？ わたしはなにかいけないことでも言ったのだろうか。

「……おまえは俺を誘っているのか？」

「えっ、えっ？ 違うよ、綺麗な体だからデッサンさせてもらおうと……んうっ」

皆まで言わないうちにカレヴィが覆い被さって、わたしに口づけしてきた。

彼の舌がわたしの唇の間から侵入してきて、逃げようとする舌を捉えられた。

「ん……っ、ちが……、ご、かい……っだって……ば」

口腔内を犯されて頭がぼうつとしてくるけど、それでもなんとかそう言った。

このままでは二日連続で朝からされてしまう。

「……そうだとしても、もう遅い。ハルカ、覚悟するんだな」

カレヴィはふつと笑うと、今度は唇に軽いキスをしてきた。

ええー、嫌だよ朝っぱらから。

そして、カレヴィはわたしにかかっていたシーツをはぎ取ると、嫌がるわたしを無理矢理襲った。

それからしばらくして、わたしはカレヴィと一緒に共同の間で朝食を取っていた。

「……もう、信じられない。嫌だって言ったのに」

二日連続で朝からやられてしまったわたしは、またも不機嫌だった。

「すまない。ハルカがそんなに嫌だとは思わなかったんだ」

実はカレヴィは、わたしが誘ったものの、照れて嫌がっている振りをしていると思いこんでいたらしい。

「それに、なんで朝っぱらからなの？ 夜さんざんしたじゃない」

かったるいし、また腰も痛い。

礼儀作法の時間までに痛みが引けばいいけど。

加減ということを知らないのか、この男は。

「……それは朝だからだ」

「……はあ？」

カレヴィの気まずそうな言葉に、わたしは一瞬目が点になる。

「朝……？ ……ああ、分かった。そういうことね」

そこでようやく、カレヴィの言いたいことが分かったわたしは納得して頷いた。

でもアレって放っておけば元に戻るんじゃないの？ わざわざわたしとやることもないのに。

「……そんなに持て余してるなら、娼館の人を呼んで相手してもらったら？ いくら花嫁修業とはいえ、毎日こんな調子じゃわたしの体力が持たないよ」

なにせわたしは、特に運動もしていないただのオタクな女なのだ。それに対して、カレヴィはちょっとむっとしたように言い返してきた。

「おまえという婚約者がいるのに、そんな不実な真似が出来るか」
……これ、聞く人によっちゃ、感動ものの台詞なんだろうな。

現に部屋の隅に控えていた年若い侍女達がきちゃあつ、と嬉しそうな声を上げている。

「……わたしはそれに動じることもなく、焼きたてのパンにバターを塗っていた。……ごめんね、こんな枯れた女で。」

でもそうになると、こんな毎日がこれからも続くってことだよな。頼むから程々にしてくれないかなあ。

「……そういえば、こういうことしてて婚約期間中に子供が出来たりしないの？ それって、あんまり外聞がよくないような気がするんだけど」

わたしは常々聞こうと思っていた質問をカレヴィに投げかけた。

「おまえは知らなかったのか？ この期間中は俺が避妊の薬を飲んでるから、子は出来ない」

……なんと。

初めて知らされる事実には私は目を見開いた。

カレヴィが言うには、この期間は婚約中の二人のお楽しみ期間でもあるんだって。……でも、主に楽しんでるのはカレヴィのような気がしないでもないけど。

「ふーん、そうなんだ。まあ、朝からこんな話題もなんだし、もうやめるね」

わたしがそう言ったら、カレヴィは明らかにほっとしたような顔になった。

カレヴィ、昨日の再現になるとでも思っていたのかな？ でもいくらわたしだって、同じ過ちは繰り返さないよ。

わたしはふわふわのオムレツを味わいながら、そんなことを考える。

「ハルカ、この食事が終わったら庭園に散策にでも行かないか？ 確か王宮の外を見たことはなかっただろう」

……そう言われてみれば、見たことない。

カレヴィが急にこんなことを言い出したのは、朝のアレの罪滅ぼしのつもりなのかなあ。

でも、せつかくカレヴィがこう言ってくれてるんだし、断る理由もない。

それでわたしが頷くと、カレヴィは楽しみにしておけ、と爽やかに笑った。

20話 思わぬ副産物

カレヴィに庭園に誘われたのはいいんだけど、わたし、腰が痛いことをすっかり失念してたよ。

それで、そのことをカレヴィに言ったら、すぐに王宮付きの魔術師を呼んで治癒魔法をかけられた。

「ティカ様ほど完璧にはいきませんが、これでいくらかは痛みが引かれると思います」

「ありがとうございます」

その魔術師に言われた通り、少し痛みは残るけど、だいぶ楽になった。これなら庭園に行けそうだ。

ちなみに治癒魔法って言うのは、完全に治癒させるものじゃなくて、正式には「治癒させる為の魔法」って言うんだって。

千花みたいに完璧に治癒させるのは、むしろ一般の魔術師的にはものすごく非常識な部類に入るらしい。

「……ですが陛下、ハルカ様にあまりご無理なことをなされないようをお願いいたします。治癒魔法もあまり頻繁には使えません故」

カレヴィに苦言を呈した魔術師曰く、痛いからってあまり治癒魔法に頼っていると、人体本来の治癒能力が鈍ってくるからなんだそうなの。

……それなら、仕方ない。次からは湿布とかで我慢しよう。

本当はカレヴィが自重してくれるのが一番いいんだけどね。

「……ああ、分かった。一応頭に入れておく」

「一応じゃなくて、ちよつとは自重してよね」

本当に分かっているんだかどうか分からないカレヴィにわたしは文句をつけたけど、ここまで言っても夜には忘れられてそうだよなあ。

ああ、と言ったカレヴィの目が泳いでるし。

「……まあ、それはともかく庭園まで移動させてくれ。ハルカの体

「のこともあるしな」

む、ごまかしたな。

けど、なんでカレヴィがわたしの体にそこまで執着するのか本当に分からない。

カレヴィに命令された魔術師は頷いて、わたしとカレヴィ、それにお付きの者達を庭園の入り口まで移動させた。

カレヴィに案内されたのは、南国ムード溢れる庭園だった。

南国の植物が茂っているそばに人工の川やら噴水が絶妙に配置されていて庭園自体が涼しくなるように配慮されているみたいだ。

それでも、快適な温度だった王宮内と違ってここは少し暑い。

「ちよつと暑いね」

額に浮かんだ汗をハンカチで拭いながらそう言うと、カレヴィはいつもと変わらない涼しい顔で肩を竦めた。

「この国の気温はこんなものだ。……城の中は魔術で快適な温度に保つてある」

ふーん、常時クーラーが作動しているようなものか。

こんな快適な環境で趣味に浸れて、最強の魔術師が友達で、王の婚約者としてみんなにかしずかされてる。

……こう考えるとわたしがつくづく恵まれてるよなあ。

元はただの一般庶民のわたしは、ザクトアリアの国民に対してちよつと罪悪感を感じてしまう。

それでわたしが少し溜息をついてると、カレヴィが「どうした」と聞いてきた。

わたしがさっきの自分の考えをカレヴィに話すと、彼はわたしの肩を抱き寄せて笑った。

「おまえが気に病むことはない。おまえは王妃の務めを果たすこと

だけ考えていればいい」

「……うん」

王妃の務めつていったら、まず子作りだよね。カレヴィがあの子だったら、結婚してすぐできるかなあ。できるといいな。……ちよつと大変だけど。

そんなことを思いつつ庭園を見回していたら、巨大な黄色い房が垂れ下がっているのが目に入った。

……これって、もしかしてバナナ？

付いてきた庭師の説明によるとやつぱりバナナで、鑑賞用に植えであるそうだ。でも本来は食用の品種なので食べられるんだって。

「へえ……」

わたしは食べごろサインの黒い斑点、いわゆるスイートスポットの出ているバナナを房から一本もぐと、皮を剥いて食べてみた。

うん、濃厚な甘みがあつてとってもおいしい。

にこにこしながらバナナを食べるわたしをカレヴィが呆気に取られて見ているけど、なにか変だつたかなあ。

「おいしいよ」

わたしはバナナをもう一本房からもいでカレヴィに渡すと、彼は仕方なさそうに苦笑した。

「……ああ、確かにうまいな」

わたしと同じようにバナナにかじりついたカレヴィもちよつと驚いたように瞳を見開いた。

「でしょ？ これ少し持つて帰つていいかなあ」

わたしがそう言つたら、庭師が気を利かせて房の一部を切り落としてくれた。

「ハルカ様、よろしかつたら他にも果物がありますよ」

庭師はわたしがバナナをおいしいと言つたことが余程嬉しかつたらしく、パイヤやアップルマンゴーなんかを山ほど取つてくれた。ふふふ、庭師の人、気が利きすぎで嬉しいぞ。

とりあえず、これは今日の食後のデザートにしよう。

でも、ちよつと量が多いかなあ。まあ、後でモニー力達や近衛兵に分ければいいか。

にやにやししながら大量にゲットした南国フルーツを見ていたら、カレヴィがちよつと呆れたように言った。

「おまえは庭園に散策に来たのか？ それとも果実狩りに来たのか？」

「え？ もちろん散策に来ただよ」

思わぬ副産物で、果実狩りもできたけどね。

21話 見学希望

とりあえずゲットした南国フルーツは厨房に届けてもらって、残った分を今いるみんなに分けることにした。

そして引き続きわたしはカレヴィと南国ムード溢れる庭園を巡った。

よく見ると庭園には色鮮やかな鳥達もいて、それに負けない花々と相まってとても素敵だった。

うーん、こういうのを見ると、本当にザクトエリアが熱帯性の気候の国なんだなあって実感が湧いてくる。

そして、カレヴィに次に案内されたのは、薔薇の花とかが咲き乱れる庭園だった。

「あ、涼しい」

ここはさつきと違って魔法が効いているのかな？

そう思ってたなら、カレヴィがそれを肯定してくれた。

「ああ、ここは城と同じような気温になっている。花の管理にはもっと複雑な魔法を使っているらしいが」

そう言われてみれば、この庭園には薔薇の花の他、いろいろな季節の花が咲き乱れていて、桜まで咲いている始末。……いや、綺麗だけどさ。

薔薇と桜と一緒に咲いてるのは、日本人の感覚からしたら、ちょっと異様に見える。

それを直接言うのはなんだだったので、濁しつつそれを伝えたら、カレヴィはそういえばおまえの国には四季があるのだったな、と肩を竦めた。

「この庭園は、ガルディアのものを模して作ってある。あそこは一年中春だからな」

へえ、千花がいる国ってそんななんだ。

それにしてもこの世界の気候ってどうなってるんだろ。まさにファンタジー。

「過ごしやすそうだね」

人が住むには少々暑いザクトアリアの王であるカレヴィはどこか憧憬をこめた瞳で頷いた。

「ああ、そうだろうな。ガルディアは大陸一の魔法大国で教育体制も整っている。おまけに特出した魔術師が二人もいる。大陸中の人間が移住したいと思っている国だろう」

「ふーん、こここの大陸の人には憧れの国ってことかあ」

「それにガルディアは魔術師団もさることながら、騎士団が近衛含めて三つもある。……ガルディアは魔法大国と言われているが、他の軍備も群を抜いている」

騎士団が三つ!?

騎士が出てくる漫画を描いているわたしは、思わずその言葉に反応してしまった。

「えっ!?! そうなの? だったらぜひ、その騎士団を見学してみたいなあ」

うまくいけば漫画のネタになりそう。

カレヴィがあんまり褒めるので、かなり興味を引かれてそう言ったら、彼にがしつと肩を捕まれた。

ちよ、ちよっと痛いよ。

「駄目だ」

「なんでよ」

カレヴィの上からの言葉に、わたしは思わずむっとして言い返す。「おまえは俺の婚約者なんだぞ。いずれ王妃になる者が気安く他国に出かけるな」

う、まあ、それを言われちゃうと苦しいけど。

「じゃ、じゃあ変装して行くっていつのはどう? これなら婚約者ってばれないでしょ?」

「あそこの王弟は鋭いぞ。もしばれたらどうする」

その王弟って人は怖い人なのかな？ 弱味を握られると国として後々困るってこと？ うーん、それはまずいかも。

……でも行きたい。

「なら、こっそり行けばいいじゃない。……千花がいればどうにかなるって！」

困った時の千花頼み。……千花にはいい迷惑だろうけど。

「……おまえはティカ殿、ティカ殿と……まあ、いい。騎士団と言えは聞こえはいいが、要はむさい男の集団だぞ。そんな中に俺の婚約者を放り込む真似ができるか」

……さっきは褒めてたのに、今度はむさいときたか。

カレヴィは強硬に反対するけど、その理由、狼の群に羊を送り込むみたいなの例えだな。

カレヴィ、見学するくらいで大袈裟すぎる。

「だから千花がいるから大丈夫だって！ 紹介くらいしてもらっても別にいいじゃない。減るもんじゃなし」

「減る」

なんだその答えは。お子様か。

「けーち」

対するわたしも随分と大人げない反応で返してしまった。

しばしわたしはカレヴィと睨み合う。

やがてカレヴィがわたしから目を逸らさずに言った。

「いくらティカ殿がいたとしても、駄目なものは駄目だ。どうしても行きたいと言うなら俺を連れていけ」

「ええ!？」

わたしはびっくりしすぎて思わず飛び跳ねちゃったよ。

王であるカレヴィがついてくるって、いったいどういうこと？

「やだよ、そんな大袈裟にするの。そんなことしたら、いろいろとめんどくさいじゃない」

「なら諦める。それ以外は認めん」

うっ、そんなあ。

カレヴィ頑固そうだし、騎士団取材は無理なのか。

……しかたない、千花に騎士団のことを聞くだけにとどめとこう。わたしががつくりしていると、カレヴィは良心が咎めたのか、「後でおまえの部屋にガルディアの騎士に関する本を届けさせる」と言ってきたけど、わたしが会いたいのは生身の騎士なんだよ。

わたしがそう言ったら、カレヴィにすかさず反対された。

「生身は駄目だ、生身は」

「……結局、カレヴィはわたしが生の騎士に会うのが嫌なわけ？」

なんとなく、カレヴィが国とかそういうレベルで言ってる訳じゃなく、実はまったくの個人的な意見だったように聞こえたので、わたしは彼に突っ込んでみた。

すると、カレヴィは瞳を見開いてから、ちよっとうろたえてた。

「……まあ、そうかもしれないな」

なんだ、その曖昧な言い方は。はつきりしないなあ。

でも、庭園から帰ってきたら、早速部屋にガルディアの騎士の本が届けられていて、わたしはカレヴィの行動の早さに思わず舌を巻いた。

なにがカレヴィをそこまでさせるんだ。

せっかくだから読むけど。

……ああそれにしても、生の騎士見たかったなあ。

22話 逆鱗に触れたかもしれない

「え……、今日礼儀作法の授業ないの？」

わたしは侍女長のゼシリアから、礼儀作法の中止の知らせを聞いてちよつと驚いた。

カレヴィもみつちりやると言っていただけに、午後のその授業は当然あるものだと思っていたのだ。

「本日はハルカ様の花嫁衣装のために、急遽時間を取らせていただきました。本来でしたら、もっと早くに取りかかるのですが、陛下からの婚礼のお話も急なことでした故」

「あ……そうだね」

言われてみれば確かに衣装は緊急になんとかしなきゃいけないわ。王妃ともなれば、既製のもので済ますってわけにもいかないだろうし。

言われて気づくわたしも女としてどうなんだ。

そんなわけで、午後からは花嫁衣装の採寸と仕立ての打ち合わせが予定に入ることになった。

うーん、花嫁衣装とか聞くと、ぐつと現実感が出てくるなあ。なんかどきどきしてきた。

「ハルカ様はゆったり構えられておられればよいのですわ。なにも心配なさることはありません」

わたしが家から持ってきた原稿を読みながらイヴェンヌが微笑んだ。

「う、うーん、でも気持ち的に焦るといっつか」

落ち着かない気分でペン入れしながらわたしがそう言うと、枠線引きを練習中のソフィアとモニーカも微笑む。

「まあ、ハルカ様が焦られることなどなにもありませんわ。陛下に愛されておいでなんですもの」

モニーカのその言葉に、思わずわたしの手元が狂った。

うお、危ない。もう少しで線が歪んじゃうところだったよ。

とっさにペン先を原稿から離れたことが功を奏して大事には至らなかった。

「な、なにそれ。いつの間にそんな話になってるの？」

わたしは急遽決まった花嫁だとみんな知ってるはずだぞ。愛とか全然関係ないから。

「庭園で、陛下はティカ様とガルディアの騎士に嫉妬なされていたではありませんか」

「え……」

ソフィアに言われて、わたしは瞳を見開いた。

それでペンを置いてしばし庭園での出来事を思い返してみる。

そういえば「おまえはティカ殿、ティカ殿と」とか、騎士に会いたいって言ったなら「生身は駄目だ」とはカレヴィに言われたな。

あれって嫉妬だったんだろうか。

……うーん、でもカレヴィのあれは、ただの執着じゃないの？

わたしの体に対する執着みたいな。

その証拠にアレの時以外キスしてこないしな。……これってわたしに愛情がないことの最たるものじゃない？

そんなことを思ってたなら突然部屋にカレヴィが現れた。

「ハルカ」

……そういや、カレヴィいつもわたしの部屋に入るときノックして来ないな。

「カレヴィ、今度から突然入ってくるのはやめてよね。共同の間じゃないんだからノックくらいしてよ」

わたしは文句を言いながらも椅子から立ち上がってカレヴィを迎える。

「おまえは妃になる者だ。それくらいいいだろう」

「駄目」

むうつとわたしが睨んだら、カレヴィは仕方なさそうに小さく溜息をついた。

「……分かった。次からはそうする」

「うん、そうして。……で、どうしたの突然」

テーブルの上は散らかっているの、応接セットの方に座ってもらおうと思っただけ、カレヴィは動かない。

どうしたんだろと思って見ていると、やがてカレヴィが言った。

「いや、おまえに謝ろうと思ってな。ゼシリアに言われるまで婚礼衣装のことをすっかり忘れていた。すまない」

「わたしも衣装のことなんて全然思いつきもしなかったよ」

自分のことなのにね、とわたしは笑って言うと、カレヴィもほっとしたように笑った。

「衣装の手配をしたゼシリアには感謝だな」

「そうだね」

話がひと段落すると、今までわたし達を見守っていた侍女達が嬉しそうに話しかけてきた。

「まあ、やはりお二方は仲がおよろしいですわ」

「先程陛下は嫉妬までされてましたものね」

「嫉妬……？」

一瞬カレヴィがなんのことかというようにわたしを見た。

だ、だから違うんだって！

慌ててわたしが彼女達の口を閉じさせようとする前に、ソフィアが高らかに言ってくれた。

「陛下は、ティカ様やガルディアの騎士に対してされておられたではないですか。ですからわたくし達、ただいまハルカ様に『陛下に愛されておいでですね』と申しております」

思ってもいない言葉だったのか、呆然とカレヴィがわたしを見つめる。

わたしは顔に血が急激に集まってくるのを感じた。

うわあああ、すごい居たたまれない。

だって、それは三人の勘違いなのに！

もしかしたらカレヴィ、わたしのことを自意識過剰だって呆れて

るかもしれない。

「そ、それは違うってわたしは分かってるから！ カレヴィがそんなふうになんかわたしを思うわけじゃない！ わたし達は政略結婚以外の何物でもないよ？ その証拠に、カレヴィは寝室以外でキスしてこないし！ わたしもカレヴィのことはなんとも思っていないから！」

一気にそこまで叫ぶように言って、わたしを息を切らせた。

「……口付けしてほしかったのか？」

なぜか怖いくらい無表情になったカレヴィからとんでもない言葉が出てきたことで、わたしは自分が余計なことを口走ったことに気づいた。

慌てて否定しようとしたけれど、わたしはカレヴィに腕を引っ張られて、次には彼の腕の中にいた。

そして、無理矢理上を向かされると、カレヴィの口づけが唇に落とされる。

「ん……うっ」

人前でキスされるといふ異常事態に対して、わたしはなんとかカレヴィから逃げだそうとしたけれど、彼はそれを許さずに益々深く口づけてくる。

やがて膝の力が抜けて立っていられなくなると、カレヴィはわたしの膝裏を浚い、抱き上げた。

「邪魔をするな」

「は、はい……」

侍女三人がカレヴィの言葉に真っ赤な顔で頷く。

彼女達が息をのんで見守る中、カレヴィは真っ直ぐに寝室へと向かっていった。

えええ、なにかカレヴィ怒ってるみたいなんだけど。

わたし、なにかまずいこと言っちゃったのかなあ。

それはともかく、わたしはこれからぐっすりなっちゃおうわ！？

23話 嫌がらせ

わたしはベッドの上にドサリと少々乱暴に降ろされると、カレヴィがのしかかってきた。

「カ、カレヴィ、落ち着いて、ね？」

わたしはなんとかカレヴィの怒りを鎮めようと必死でそう言うけれど、彼は無表情のままわたしを見下ろした。

「あ、朝したし、そういうことしないよね。そうでしょ？」
ぜひともそうであってほしい。

「カレ……ッ、んん……っ」

わたしは再びカレヴィに唇を塞がれて、思わず身を擦る。

カレヴィはそのままわたしの首筋に唇を移動させて、強く吸い上げた。

「……やつ、だめっ」

そんなことされたら、痕が残ってしまう。

わたしの抗議にもカレヴィは耳を貸さず、鎖骨から胸元にかけて花びらのような痕を散らしていく。

「やだ……！ 今日、衣装の採寸があるのに、こんなことやめてよ！」

そのことはカレヴィも知っているはず。……もしかしてこれ、わざと？

カレヴィはそれには答えない。

間違いない、これは絶対にわざとだ。

カレヴィの手が衣装の裾を乱し、太腿を伝う。もう片方の手はわたしの胸元に手をかけ、それを一気に引き下ろした。

「やだああっ！」

わたしは拒絶の叫びを上げたけれど、カレヴィには聞き入れられず、結局は彼にされるがままになった。

わたしはあれから、カレヴィに体中いたるところにキスマークをつけられた。そしてそれは、かなり際どいところまで及んだ。

それからまた彼にされてしまったわたしは、けだるい体をベッドから起こした。

……衣装の乱れはある程度カレヴィが整えてくれたみたいだ。

……けどなんで、こんな時に嫌がらせみたいなのをするの？

わたしはそこまで彼の気分を害するようなことを言っただろうか。わたしがベッドの上で呆然としていると、侍女達がノックして現れて、わたしを湯殿まで連れていく。

「あまり時間もありませんし、急ぎませんと」

イヴェン又達はわたしの体に散っているキスマークを見てちよつと眉を寄せたけれど、手早くわたしをお風呂に入れてくれた。

「……ねえ、この痕、治癒魔法かなにかで消えないかな」

お風呂からあがったわたしはカレヴィに付けられたキスマークを指し示して、モニターに聞いてみた。

ようはこれって内出血なんだし、治癒魔法なら治るんじゃない？
すると彼女は、申し訳なそうに謝ってきた。

「ハルカ様、申し訳ありません。それは陛下から禁じられております」

「え……」

信じられないことを聞いて、わたしは思わず呆然とした。

……なにそれ、それって、キスマークを消すなっこと？

「じゃ、じゃあ、ファンデーションかなにかでごまかして……」

「それも陛下から禁止令が出ております。痕を隠させるなどソフィアも困ったようにわたしに頭を下げる。」

「なにそれ……」

あまりのことに愕然とするわたしを侍女達が気遣わしそうにしたけれど、それでも手早く衣装を着付けていく。

昼食の用意ができておりますという、イヴェンヌの言葉に、後で食べると言い残して、わたしは速攻でカレヴィの執務室へと向かった。

「カレヴィッ」

乱暴に扉を叩いた後、執務室に飛び込んだわたしに、カレヴィがゆっくりと席を立った。

彼の傍には驚いたようにこちらを見つめる宰相のマウリスの姿もあつた。

「……マウリス、席を外せ」

「はっ」

マウリスは胸の前で腕を掲げて礼を取ると、執務室から出ていった。

「カレヴィ、なんでこんなときにこんな痕をつけるの？ しかも、消すなって命令したって……、なんで、そんな意地悪するの？ ひどいよ」

わたしはカレヴィに詰め寄って、彼の服をぎゅっと掴んだ。

「どちらがひどいんだ。……おまえは俺のことをなんとも思っていないそうだな」

「え」

確かにそんなことを言ったような気はする。

「……少なくとも俺は、おまえが慣れない環境で少しでも快適に過ごせるよう尽力してきたつもりだ」

「そ、それは分かってるし、とっても感謝してるよ！ わたしが言いたかったのは、カレヴィのこと、男としては見てないってことで

「

そこまで言った途端、カレヴィは大きな音を立てて、執務机を叩いた。衝撃で幾枚もの紙が辺りに舞う。

わたしは今まで見たことのない彼の剣幕に体を震わせた。

「カ、レヴィ……」

「出ていけ」

絞り出すようにカレヴィが言う。その表情は彼が俯いているため、よく分からない。

「カレヴィ、でも……」

「出ていけというのが分からないのか！ これは命令だ。また襲われたくないならとっとと出ていけ」

ぎらぎらとした肉食獣のような瞳で見つめられて、わたしは動けなくなる。

控えていたゼシリアが見かねたように、固まったわたしを居室まで連れていってくれた。

その間、わたしはよく分からない恐怖に体を震えさせていた。

それは、彼の機嫌を損ねたことによるのかもしれないし、これらの不安のことからくるものかもしれない。なかった。

「……陛下は少し気が立っておいでなのです。ハルカ様、今はまだ陛下をそっとしてさしあげてくださいませ」

ゼシリアは慰めるように言ったけれど、あれはどう考えてもわたし自身がカレヴィを激昂させたとは思えなかった。

昼食が並んだテーブルの席についたけれど、とても食欲は湧かなかった。

「……どうか、召し上がられてください、ハルカ様」

ゼシリアに促され、鬱々とした気分でなんとか食事を押し込む。

朝庭園で取ったフルーツがデザートに出てきて、わたしはなんだか泣きたくなってしまった。

……本当なら、カレヴィと一緒に食べるはずだったのにな。

それなのに、どうしてこうなっちゃったんだろう。

甘くておいしいフルーツを食べながら、わたしはいつの間にか涙を流していた。

「ハルカ様……」
侍女達の気遣わしげな声が聞こえる。
いけない。これじゃ、周りに心配かけちゃう。
慌ててわたしはハンカチで溢れる涙を拭いた。

カレヴィは基本的に人がいい。
それをあそこまで怒らせたのだから、わたしに対する怒りは相当
なのだろう。

でもたぶん、わたしはそこまでカレヴィを怒らせても婚約者とい
う身分は剥奪されないと踏んでいた。

それは伽を既に済ませているという事実もある。
けれど一番の理由は、わたしが千花の友人だということだ。

その気になれば、この大陸を掌握することも可能と言われる最強
の魔術師と繋がりを持てば、国としては相当の強みになる。

そして、その繋ぎがわたしのだ。

だから、カレヴィにどれだけ嫌われようが、離縁だけはされない。

……それに千花もそれを簡単には許さないだろう。

「ハルカ様、こちらへ」

憂鬱な昼食を終えたわたしは、仕立屋や宝石商が待つ別室へと移
動し、手始めに採寸をされた。

「……ハルカ様は陛下にとっても愛されておいでなのですね」
仕立屋がわたしのあちこちについたキスマークを見て、感心した
ように溜息をついた。

それにわたしは曖昧に微笑みで返す。

愛されているなんて、とんでもない。

それどころか、わたしはカレヴィに嫌われているのに。

そう思うと、キスマークの嫌がらせもなんとなく納得できた。

そうか、わたしはカレヴィに嫌われてるんだ。

なんとか涙はこらえたけれど、今度はなぜか胸が苦しくて仕方なかった。

わたしがそんな自分の気持ちを持って余している中、仕立屋と宝石商や侍女達の楽しそうな声が響いている。

それで気をまぎらわせることができて、今はただただそれがありがたかった。

24話 敵かな夜

結局その日は、晚餐もカレヴィとは別々だった。

……衣装のこととか聞いてくると思ったのに。カレヴィにはそれほど興味ないってことなのかな。

まあ、いいや。今日は疲れたし、早めに寝てしまおう。

カレヴィのあの剣幕じゃ、たぶん今夜は来ないだろうし。

そう思っただけだとベッドに横になったわたしは、昼間の疲れもあつてすぐに眠りについた。

「ハルカ、起きろ」

ゆさゆさと体を揺さぶられて、わたしは無理矢理起こされた。

もー、なによ。せつかく人が安眠しているのに。

で、起きたら目の前にカレヴィがいて、わたしは思わず口に出してしまった。

「……なんでカレヴィがいるの？」

まだ少し寝ぼけた頭でそう言うと、カレヴィがむっとしたような顔をした。

「伽に来たんだ。おまえはまだ花嫁修業中だということを忘れるな」

「えっ、まだあるの？ 昼もあつたからてつきりもう終わりかと…」

……

「勝手に終わりにするな。俺はそのつもりはない」

あれで終わりじゃないのか、いったいどんな体力してるんだ、カレヴィ。

「うわあ……」

「なにが、うわあなんだ」

「いや、わたしの体力持つかなあ、と」

そう言うと、カレヴィはちょっと眉を顰めた。

「おまえは俺のことを男と思っていないらしいからな。今日はその認識を改めるようにみっちり仕込んでやる」

「えええ、それ、そういう意味じゃない！」

「ではなんだ」

「う、えと、カレヴィのこと恋愛対象に見てない、みたいなの？」

「うー、こういうこと説明するの苦手なんだよ。それも自分のことだし。」

それをカレヴィはじつと見つめていた。

「……そうか、おまえにはやはりしつかり仕込まなくてはな」

ええ、これでも駄目なのか。

困った、なにかカレヴィをこんなに怒らせたんだろう。

「気を悪くさせたのは悪かったよ。謝る。ごめんなさい」

……もしかしたら謝ってももう遅いのかもしいけれど。

ちくりと痛む胸を押さえて、わたしはカレヴィに頭を下げる。

人に嫌われるのは、こんな歳になってもやっぱりこたえるな。

「……謝られても困る。おまえには俺の婚約者として、いずれ王妃の務めを果たす覚悟をしてもらわなければならぬ。そのことだけは忘れるな」

「はい」

いつもとは違う厳しい口調に泣きそうになるのをこらえて頷くと、一瞬だけカレヴィが動いた。けれど、結局彼は途中で固まったままだった。

「……カレヴィ？」

不思議に思っただけ声をかけると、カレヴィははっとしたようにわたしを見下ろした。

「……いや、なんでもない。それよりハルカ、先程の俺の言葉を忘れるな」

「うん、わたしは王妃の務めを果たすよ」

わたしが頷くと、カレヴィはゆっくりとわたしをベッドに倒した。

……嫌われてはいるけれど、なぜかカレヴィはわたしの体には執着している。

これはこれで、決定的に仲が悪くなるよりはいいのかもな、とわたしは彼にのしかかられながら考える。

「……なにを考えている？」

「ううん、なんでも」

嫌われていることを彼自身に言うのはためらわれた。わたしはただ、首を横に振る。

それをカレヴィは目を細めながら見つめてくる。

「おまえに口づけてもいいか？」

「うん」

いつもはそんなこと聞かないのに変なの、と思いつつも頷くと、カレヴィはそつと啄むようにキスしてきた。

「ハルカ、俺はおまえを抱く」

「……うん」

男はたとえ相手を嫌っていても抱けるって言うよね。

そう思ったら、なぜか涙が流れてきた。……わたしおかしい。

「泣くな」

カレヴィがわたしの頬に流れる涙に唇を押し当てわたしを抱きしめる。

いたわるようなその仕草にわたしは余計泣きたくなくなって困ってしまった。

「……いい人すぎるよ、カレヴィ。」

嫌いなのに、なんでわたしに優しくするんだ。

「ハルカ、おまえは俺の子を成せ」

「……うん」

カレヴィの子だったら産んでもいいよ。

……あ、子供は可愛がつてもいいよね。それくらいは許してもらえるでしょう？

まるで厳かな契約のようなやりとりの中、わたしはカレヴィに抱かれた。

それはなぜか泣きたくなるような不思議な感覚だった。

25話 桜の下で

朝起きたら、既にそこにはカレヴィの姿はなかった。

ゼシリアに聞いたら、カレヴィは既に朝食を終えて執務に入ってるそうだ。

なんとなくもやもやしながら支度をしていたら、ゼシリアが「陛下からでございます」と言っ、白の紗に金の繊細な刺繍の入ったストールを持ってきた。

どうやら、これをかけてキスマークを隠せということらしい。

それにしても随分と高価そうなのだなあ。

ストールの両端に金の小さな平たい飾りがいくつも重なって付いていて、しゃらしゃらと音を立てている。

こういうものにまったく詳しくないわたしが見ても、これが特級品なのは分かった。

わたしは早速モニターカにそれを緩く首に巻き付けてもらい、端を後ろに流してもらった。

「まあ、とても素敵ですわ」

ソフィアがそれを見て溜息をつく。

「こつような素晴らしい品を贈られるなんて、やはり陛下はハルカ様のことを……」

イヴェンヌが感心したように言った台詞をわたしは慌てて否定する。

「そ、そんなことないから！ だって、カレヴィは昨日からわたしと食事も取るうとしないじゃない。カレヴィが贈り物をしたのは、わたしが婚約者だからってだけだよ！」

そう、たったそれだけのことだ。それなのに、みんな大袈裟すぎ。

……確かにこのストールはともいいものだけどさ。

そう考えながら、わたしはストールにそつと触れた。

これ、カレヴィにお礼に行った方がいいのかな。

……でも、うるさがられるかもしれない。

なら、お礼は会った時でいいよね。どうせ、夜には会うんだし。わたしは無理矢理自分をそう納得させると、朝食を取り、腹ごなしに庭園まで散歩に行った。

今回、わたしが行ったのは、ガルディア式の庭園の方。

なんとか桜を無性に見たかったんだよね。

……わたし、早くもホームシックかもしれない。

駄目だなあ。一昨日買い出しに行っただばかりじゃない。

……そういや、あの時に買ってきたお菓子、カレヴィとまだ食べてないなあ。

後でゼシリアに言ってカレヴィのお茶受けに出すようにしてもらおう。

異世界のお菓子を珍しげに食べるカレヴィを見てみたかったんだけどなー……。

でもカレヴィはわたしのことを嫌ってるなりにできる限りのことをしてくれているんだし、今更一緒にお茶会なんて酷だろう。……今でさえ、食事にも顔を合わせないんだから。

わたしが鬱々とした気分を紛らわすように、風に揺られて花びらを散らす桜に手を伸ばす。

……ああ、そうだ。

ここでお花見するのもいいよね。なんとかしてここでできないかなあ。

千花か魔術師の誰かに魔法で明かりを灯してもらってさ。

夜桜見物なんてしたら綺麗だろうなあ。

……ただ、その時間帯はカレヴィのアレに重なるんだよね。どう考えても、彼がいい顔をするとは思えない。

わたしが溜息をついていると、突然目の前に千花が現れた。

「千花ー！」

わたしは彼女に駆け寄って抱きつく。すると、自然に涙が出てきた。……あれれ？

千花は分かっている、というようにわたしの背中をぽんぽんと叩くと、いったん体を離れた。

「……はるか、カレヴィ王とうまくいってないんだって？」

「……うん。なんかわたし、カレヴィをすごく怒らせちゃったみたいで、食事も今別々なんだ。わたし、カレヴィに相当嫌われたかも」
わたしがしゅんとして言うと、

「そんなことはない！」

というカレヴィの声が近くで聞こえた。えええ？

「王や侍女達の話の聞いたら、双方に誤解があるみたいだから、カレヴィ王連れて来ちゃった」

千花はいたずらっぽく舌を出すと、とん、とわたしをカレヴィの方に押し出した。

すると、自然とわたしはカレヴィに寄りかかる形になり、彼がそれを支えた。

「え、と……」

思ってもいない時にカレヴィが登場して、わたしは少し混乱する。……あ、そうだ。

「あ、あの、このストールありがと。大切にするね」

「ああ、おまえが気に入ってくれればいいのだが」

「うん、とても綺麗で気に入ったよ。でも、わたしには高価すぎるかも」

似合っているかどうかも分からないし、本当にもらっちゃってよかったのかな。

「そんなことは、おまえが気にすることじゃない」

のんびりとストールの話をしていたら、千花が呆れたように話に

入ってきた。

「……そうじゃないでしょう、カレヴィ王。まずは、はるかがあなたに嫌われていると思っっているところから誤解を解いていきませんと」

「あ、ああ、そうだったな」

カレヴィは咳払いをすると、わたしを抱きしめた。

「おまえに誤解を与えるような言動をしてしまったのは悪かった。すまない」

わたしは慌ててカレヴィから身を起こそうとするけれど、強い力で抱きしめられていて、それはかなわなかった。

「そんなこと……。わたしもカレヴィをすごく怒らせちゃったし、ごめんなさい」

カレヴィはなにを言う気なんだろう。

こうやって侍女や近衛兵士がいる中で公然と抱きしめられていると、恥ずかしいやらなんやらで、顔に血が上ってくる。

「カレヴィ、わたしを嫌ってないってのは分かったから、とりあえず離してくれないかな。みんな見てるし」

「駄目だ」

わたしの頼みもカレヴィはすげなく返してくる。

「なんでよ」

思わずむっとしてわたしが言うと、カレヴィも負けじと言い返してくる。

「離れたら、おまえは逃げ出しそうだ。だから離さない」

逃げ出さないよ、と言おうとしてわたしが上を向くと、カレヴィに顎を捉えられて、口づけられた。

「ハルカ、俺はおまえが好きだ」

わたしは信じられないことを聞いた気がして固まった。

カレヴィがわたしを好き？ 本当に？

そして、そのままわたしは角度を何度も変えられて、カレヴィにキスされる。

異世界の庭園で、桜の花びらが幻想的に舞い落ちる。
その中で、わたしは呆然と彼の口づけを受け続けていた。

26話 二人でお茶会

べたべたべた。
いちゃいちゃいちゃ。

今のカレヴィとわたしを表すとしたら、こんな感じだろう。でも、わたしはしたくてそうしているわけじゃない。ひとえに今の状況はカレヴィのせいだと声を大にして言いたい。

カレヴィの庭園での告白を受けてから、共同の間に戻ってきたわたし達は、応接セットに陣取っていた。

「これがハルカの世界の菓子か。……塩辛いが旨い。癖になりそうな感じだな」

カレヴィは塩味のポテチをパリパリとつまみながら、時々興味深そうにそれを眺めている。

「これはここでも作れるのか？」

「ポテトチップスくらいなら作れるよ。薄く輪切りにしたジャガイモを水にさらした後、水分をよくふき取ってから油で揚げればいいんだよ。後は好みで塩とか調味料で味付けすればいいだけ」

控えていたゼシリアがわたしの言ったことをメモにとっていく。厨房で作る気なのかな？

フライドポテトは既にあっだし、今までなかったのが不思議なくらいだけど。

「そうか、今後こちらで作らせよう。……ハルカももっと食べる」カレヴィにポテチを口元に持ってこられて、わたしは仕方なくそれに食いついた。

……うう、お行儀悪い。

ポテチなんてただでさえ食べ散らかりやすいのに。礼儀作法のシレネ先生が見たら、なんて言うだろう。

「あの……、カレヴィ？　せめてこの格好だけでもやめていい？　すごく恥ずかしいんだけど」

「俺は恥ずかしくないぞ」

「わたしが恥ずかしいんだって！」

わたしはカレヴィの膝の上に乗せられたまま主張した。

するとカレヴィはちよつと残念そうな顔をした後、おしぼりで手を拭いてからわたしを隣に降ろした。

「おまえは俺の婚約者なのだから、なにを恥じることがある。それに伽まで済ませているのは周知の事実だろう」

いや、そうなんだけどさ。

でも、それとこれは別のような気もする。

千花に助けを求めようにも、カレヴィのあまりのべたべたぶりに呆れたのか、それとも遠慮したのか速攻で帰っちゃったしなあ。

まあ、千花も忙しい身なので、あまりひきとめられないんだけどね。

そんなことを考えていたら、カレヴィに肩を抱き寄せられてキスされた。

うー、お茶の時から自重してほしい。

「カレヴィ、お茶の時間なんだから、そういうのはなるべく遠慮してよ。おちおちお茶も味わえないじゃない」

普段はコーヒーが多いようにも思えるけれど、今日はミルクティーだ。ザクトアリアではコーヒー豆の他に、お茶の生産もしてるんだって。

ちなみにカカオの生産国でもあるので、ココアも選べたりする。チョコレートも食べ放題だし。……ただし、これは太るといふ事情で程々にしている。

でも千花なんかは喜んでお土産にもらって帰って行くんだよな！。もちろん家族にも配るんだろうけど。それでも、いくら食べても太らない体質なのは、まったくもってうらやましい限りだ。

そんなこんなで、大陸中の嗜好品の生産国であるこの国は、実は結構なお金持ちだったりする。

「ああ悪い、ついな。……それはそうと、ティカ殿からおまえに支払う金額を聞いたが、下手したら城の使用人よりも低い金額じゃないか。俺はおまえにそんな金額を払いたくないぞ」

「えええっ」

わたしはその言葉に驚いて思わずカレヴィにすがりつく形になってしまった。

すると、すかさずカレヴィがわたしを抱き寄せる。……ちよつと、どさくさにまぎれてなにやってるんだ。

「……払いたくないって、払わないってこと？」

あああ、わたしの楽しい貯蓄計画がガラガラと音を立てて崩れていく。

「払わないとは言っていない。ただ金額が少なすぎると言っているだけだ」

でも、千花は今までよりも給料は弾むって言ってたし、そんなはずはないんだけどなあ。

単にここの給料が法外なだけじゃないの？

「普通の事務員がいきなり高額な給料になったら、税務署に怪しまれるよ。わたしは満足してるんだから、それでいいじゃない」

カレヴィの腕からやっと逃れたわたしは、ミルクティーを飲みつつ言う。

けど、カレヴィは不満そうだ。

「……だがな、王妃ともなる者にそのような少額を渡すなど、俺の沽券に関わる」

うー、カレヴィってば、強情だなあ。当のわたしがいいって言ってるのに。

「衣装とか、装飾品とかでもかなり使ってるでしょう？ その一部と思えばいいじゃない」

「それでも俺は納得できないぞ。……では、おまえの父母に金品を渡すのはどうだ」

「面倒なことになりそうだから駄目」

一回や二回なら、「まあ記念に」ということで丸く収まるだろうけど、カレヴィのこの調子だと、一回許してしまつたらこの先ずっと続く可能性がある。それこそ、税務署のお世話になりそうじゃないか。

「なんだ、面倒なこととは」

カレヴィが不思議そうに眉を上げて聞いてくる。

「向こうにはいろいろあるの。下手したら不正を疑われるかもしれないし」

「それは困るな」

さすがにカレヴィも事の重大性に気づいたらしく、渋い顔をしたけれど、なにかを思いついたようで、次には笑顔になつて言つてきた。

「それならば、おまえのために離宮を造り、そこにおまえの好きな桜を植えさせよう。そうすればおまえがしたがっていた夜の花見もし放題だぞ。……どうだ？」

……どうだ？ ってそれ、いったいいくらかかるんだ。

王様の金銭感覚って、本当に庶民には理解不可能だ。

27話 恋情への憧憬

「いや、どうだって言われても……。わたしのためにそんなにお金使うなら、むしろ国民のために使ってほしいんだけど」

あまりにも庶民とはスケールの違う話に啞然となりつつも、カレヴィになんとかそう言ったら、なんだかよく分かんないけど、国民にまで気を遣うとは、おまえはやはり王妃にふさわしいのかなんとか、ものすごく感激されてしまった。

「俺はおまえとの婚礼の記念に離宮を建てるぞ」

とかカレヴィに言われてしまって、結局は彼に押し切られる形になってしまった。

えええ、本当にいいのに。

「……わたしは、庭園の桜で充分なのに」

「本当におまえは欲がないな」

いや、だって、カレヴィのいうことがあまりにも並外れているから……。

第一、離宮建築なんていったいくらかかるんだ。

王宮の豪華さから察するに、日本円で数十億、いや数百億だろうか。……はつきりとした金額はあまり想像したくない。

「欲がないわけじゃないけど、今までだって随分と良くしてもらってるし」

わたしはこの世界に来て、カレヴィの婚約者になったことを宝くじ一等を引き当てる以上の幸運だったと思っっている。

もちろん元をたどれば、なぜか異世界で魔術師をしていた千花とわたしが幼なじみの友達だったということが大きいだろうけど。

結婚相手のカレヴィは心の広い王様で、王妃の一番の仕事は子成すことだから、その他の細かいことは問わないとまで言ってくれている。

おかげでわたしは贅沢三昧の上、漫画描きという趣味にも没頭で

きている。

まあ、もちろん王妃になるならば、それなりの気品を対外的に身につけなくてはいけないから、礼儀作法の授業は受けている。けれど、千花からするとそれでもかなり生ぬるいそうだ。

王妃になるなら、国の歴史と世界情勢くらいは把握しておかないといけないよと千花に言われて、納得したわたしは、合間をみて関連の本を読んだりしているけれど。

それでも今のままでいいんだろうか、と時々妙な焦燥を感じてしまふ。

「これ以上なにかしてもらうなんて悪いよ。ただでさえ、わたしは恵まれすぎなんだから」

「おまえがそんなことを気にすることはない。ただ俺がおまえになにかしてやりたいだけだ」

カレヴィは微笑むとわたしを抱き寄せた。

わたしは彼にされるがままになっていたけれど、その胸の内は複雑だった。

わたしは、カレヴィにここまでしてもらう理由がわたし自身に見つからない。

これが千花みたいな美人だったら分かるよ？

それなのに、なぜわたし。

しかも、イケメンのこの王様はなぜかわたしのことを好きらしい。今まで男にもてなかつたわたしにしてみたら、カレヴィは相当の物好きとしか思えない。

ああ、せめてカレヴィのこと好きになれたらなあ。

もちろん彼のことは人間として好意を抱いている。でも、男として好きかと聞かれたら、よく分からない。

……ひょっとしてわたし、人格的に欠陥があるのかもしれない。カレヴィみたいに性格よくてしかもイケメンにここまでされて、

好きにならない人間なんていないんじゃないかと思うんだよね。
カレヴィに嫌われてると思ってた時は、確かに苦しかったけど、
でもそれは愛とか恋とか関係ないと思うし。

カレヴィの逞しい胸にもたれながらわたしが溜息をついていると、
カレヴィが「どうした？」と言ってわたしを覗きこんだ。

ちよつとためらったけれど、わたしは正直に自分の気持ちを話し
てみることにした。

「わたし、カレヴィのことを人としては好きだけど、恋愛感情があ
るかどうかは分からない」

「……そうか」

それだけ言つて、カレヴィは苦笑した。

……ああ、罪悪感。

こんなによくしてもらつて、こんな残酷な言葉言えちゃうわたし
はどうかしてる。

「おまえとは元が政略のようなものだから仕方ないのかもしれない
な」

少し寂しそうに笑うカレヴィに、わたしは慌てて言った。

「ごめん、ごめんね。わたし、そういう感情が実はどういふものか
よく分からないんだ。もしかしたら、感情に欠陥があるのかも」

「ハルカ」

カレヴィがわたしの唇に指を置いて、それ以上なにかを言うのを
阻んだ。

「ハルカ、俺は言ったはずだぞ。自分を卑下するのはやめろ。おま
えは確かに少し変わってはいるが、俺にはどこかに欠陥があるとは思
えない。……それに、おまえが俺に恋愛感情を持ってないからとい
つて気に病むこともない」

「カレヴィ、でもそれじゃわたしあなたに申し訳ないよ」

好かれたなら、出来ればその相手には返したいじゃない。まして
や、相手は婚約者だ。

「申し訳ないという気持ちで、好きな振りをされる方が余程残酷だ。俺が勝手におまえのことを好きただけだ、ハルカは気にするな。…もちろん、おまえに好きになってもらうために俺も努力するつもりだがな」

再びわたしはカレヴィの膝の上に乗せられて、狂おしいほどの熱情を込めた瞳で見つめられる。

その途端、わたしの背筋をなにかがぞくりと走り、わたしは思わず固まった。

カレヴィはわたしを強く抱きしめると、そのまま唇にキスしてきた。

なあ、本当にカレヴィに恋できたら、すごく幸せなんだろうな。

そう考えながら、わたしはなおも続くカレヴィのキスを受け止める。

今は無理でもいつかそうなることができるのかな。

……出来るといいな。

わたしはどうすることも出来ない自分のふがいなさにやりきれない気持ちになりながら、それでもカレヴィの愛の言葉と口づけを受け続けていた。

28話 有効手段

しばらくわたしはカレヴィに抱きしめられたりキスされたりしていたけれど、宰相のマウリスがカレヴィを呼びに来たことで、この恥ずかしいお茶の時間はお開きになった。

わたしの趣味の時間も少なくなっていたけれど、カレヴィの気持ちを考えてたら文句は言えない。

とりあえず、お昼までの時間、趣味にひた走ろう。

「それにしても、素敵でしたわー」

「本当に陛下はハルカ様のことを愛していらっしやるんですね」

「陛下があればハルカ様に執着しておられるのなら、ザクトアリアの将来は安泰ですわね」

ベタ塗りの練習をしてもらいながらの侍女三人のおしゃべりに、わたしは原稿のペン入れをしつつ曖昧な笑みを浮かべていた。

ちなみに、わたしの侍女アシスタント養成計画はいい感じで進んでいる。

さすがに背景とかモブとか描いてもらうことは無理だろうけど、この調子でトーン貼りまで覚えてもらえたらすごく助かるな。

「……うーん、でもわたしがカレヴィのことを好きにならないと、なんとなく悪いような気がするんだよね……」

もやもやしながらわたしがそう答えると三人はいきなりトーンダウンした。

「ま、まあ、それはいきなりはどうしようもないことですし」

「あれだけ陛下に愛されておられるのですもの、そのうち陛下のことをお好きになられますわ」

「そうです、そうです」

「……そうかなあ……」

カレヴィのことはもちろん嫌いじゃないけど、彼に好きとか言っ

てる自分が想像できない。

まあ、カレヴィには悪いけど、この点は我慢してもらうしかないかな。自分でもすごく残酷だと思うけど、今すぐどうこう出来るものでもないし。

「それにしても、ハルカ様が今まで描かれた原稿は本になされないのですか？ せっかくのハルカ様の力作を他の方がご覧にならないのはもったいないですわ」

モニーカにそう言われて、わたしは一瞬ペンを止める。

「うーん、まあ、いずれ本にしたいなあとは思ってたんだけどね」
だいぶ枚数も溜まってきたし、ここらでまとめとくのもいいかなあ。

「まあ、そうなのですか？ ではぜひ、そうしてくださいませ。わたくし絶対に購入しますわ」

「え、ええっ!？」

イヴェンヌの言葉にわたしは驚いて、思わず大声を上げてしまった。

「そんなことしなくても、ただであげるよ」

「いずれアシになってもらうんだし、お金取るなんてとんでもない。ハルカ様、ただなんていけませんわ。このお話にはハルカ様の技術と努力と情熱がこもっているのです。そんなことは絶対に駄目です」

ソフィアの反対に他の二人も頷いた。

「うーん、悪いような気もするけど、せっかくこう言ってくれてるんだし、仕方ない、譲歩するか。」

「そうだね、そうする」

わたしが頷くと、三人は笑顔になって他の侍女達にも宣伝しますと力強く宣言してくれた。頼もしいなあ。

……けど、本作るとなったら、コピー本は労力的にたぶん無理だから、オフセットでサイト通販分併せてとりあえず百部くらい刷れ

ばいいかなあ。

もし、売れ残ってもそれも記念としてとっておいてもいいし。とりあえず、千花にも相談して印刷所とか決めよう。それと、装丁とかも懲りたいなあ。

実際に作ると決めると現金なもので、ああしたいこうしたいと次々欲が出てくる。

でも、本頼んでる時間あるかなあ。通販も手間がかかるし、向こうにちよくちよく行かなくちゃいけないかもしれない。

今は礼儀作法とかあるから、時間的に無理かもしれないなあ。

そうすると、本を作るのは結婚後しばらくしてからになるかもしれない。

その辺りはカレヴィや千花によく相談しよう。

そんなことを考えているうちに、昼食の時間になって趣味の時間はとりあえずお開きとなった。

今日はカレヴィと一緒に食事を取る約束があるから、その時に本のことをちよつと聞いてみようかな。

「ハルカ」

共同の間に行くと、既にカレヴィはわたしを待っていた。

わたしが来るのを待ちわびたように、カレヴィはわたしの手を引くと抱きしめて、キスしてきた。

……カレヴィ、本当に躊躇しなくなってきたね。純粋な日本人のわたしとしてはちよつといや、かなり恥ずかしい。

まだいちゃいちゃしそうなカレヴィをゼシリアが止めてくれて、ようやく昼食となり、わたしはほつとした。

早速わたしは昼食の席で、カレヴィに本作りしたい、そのために時間取りたいけど、大丈夫かなあと一応確認を取ってみた。

「今は駄目だ。……せめて婚礼後、落ち着いてからにしろ」
ちえつ、やつぱり駄目か。

「……でも本は作っていいんだよね？」
ちらりと窺いながら聞くと、カレヴィは渋い顔をして頷いた。

「……ああ。だが、おまえには本よりも優先して作るものがあるだ
ろっ」

う、子作りのことだね。

わたしはひきつり笑いをしながら頷いた。……ここです承してお
かないと、本は作るなど言われかねない。

「もちろん、それは分かっているよ。自分の責務は果たすから」

わたしが真面目な顔をしてそう言つと、カレヴィはちよつと苦笑
した。

「……俺はそんなに早々と子は作らなくてもいいと思っているがな
楽しみは長い方がいい」

「ええ？」

カレヴィ、それじゃさつき言つたことと違うじゃない。子はそん
なに早くいらないうてなにごとだ。

「それじゃわたし、いつまでも本作れないじゃない」

楽しみにしていた分、わたしはかなりむつととしてしまった。

けれど、カレヴィは肩を竦めてこともなげに更に言ってきた。

「時間を取るなら、無理に本にしなくてもいいだろう。別に今のま
までもいいじゃないか」

「カレヴィ、ひどいよ。子を成すなら趣味に没頭してもいいつて言
つたじゃない」

……正しくは、「趣味に没頭する前に子を成してもらわなければ
困る」だったけれど。

わたしが立ち上がつて抗議すると、カレヴィはちよつと動揺した。
「なんでわたしの楽しみを邪魔するような意地悪言つ。そんなこ
と言つなら、カレヴィなんて嫌いになるからね！」

わたしが年甲斐もなく涙目になりながらそう訴えると、カレヴィ

は明らかにうるたえた。

「……いや、ただ俺は、おまえという時間が減るのが嫌なだけで、意地悪をしたいわけじゃないんだ」

とかなんとかカレヴィがいろいろ言い訳してたけど、約束はきちんと守ってもらわなくちゃ困るよ。

……ただ「嫌いになるから」攻撃はかなり有効なことを確認できたのは、今回唯一の収穫だったかもしれない。

29話 夜桜見物……だったはず

「カレヴィ、お花見のお願い聞いてくれてありがとう」

「いや、おまえの願いならこのくらいささやかなものだ」

本当だったら、共同の間でカレヴィと晚餐の予定だったのだけれど、わたしは今、彼と一緒に桜の大木の下で雅やかに花見をしていた。

カレヴィの告白後にここでお花見出来ないかなあ？ って聞いてみたんだけど、言ってみるものだねえ。

桜の傍には魔法でいくつも明かりが灯され、なんとも幻想的な雰囲気が醸し出されていた。

そんな中で中央にテーブルセットが準備されて、わたしとカレヴィは一緒に晚餐を取っている。

「ハルカ、口を開ける」

「え……、は、恥ずかしいよ」

「それでは入らない。もつと口を開ける」

言われて仕方なく、わたしはあーんと口を開ける。

その中にカレヴィがフォークに刺したお肉を投入し、わたしはそれに食いついた。

その傍で見ていた侍女達が、「今のは意味深ですわーっ！」と身悶えていた。……いったい、なにを想像しているのやら。

おいしいお肉をもぐもぐしながら、わたしは周囲の浮かれ具合にちょっと呆れていた。

未だに信じられないことに、カレヴィが明らかにわたしに夢中なので、このお花見の間にも、これはきつと結婚早々に御子を授かりますわとか、どんな美しい姫君とも浮き名を流さなかった陛下がハルカ様をこんなに愛しておいでで素晴らしいです！ とか侍女達に

お祝いの言葉をいろいろもらった。

夜桜の下というのも手伝って祝賀ムードいっぱい、わたしはなんだかいたたまれなかった。……カレヴィは嬉しそうだったけど。

わたしがカレヴィのこと好きになっただけ、一緒にありがとって言うて素直に喜べるんだろうけどなあ。

それができないわたしは、曖昧に笑ってごまかすしかできない。

うーん、日本人の哀しい習性だ。

……けど、わたしもあーん返し(?)を一応した方がいいんだろ
うか。

こうやってカレヴィがわたしの希望を酌んで夜桜見物をさせてくれているんだから、ちょっとはわたしもサービスした方がいいのかもしれない。

わたしは一大決心をして、ステーキをカレヴィが食べやすい大きさに切ると、フォークに刺した。

「カ、カレヴィ」

「ん？　なんだハルカ」

震えるわたしに疑問を覚えたのか、不思議そうにカレヴィが見てくる。

わたしはそんな彼の前に肉を刺したフォークを差し出すと言った。

「……はい、あーん、して？」

その直後、わたしは恥ずかしさで火を噴きそうになるほど真っ赤になった。

カレヴィは瞳を見開いて固まってるし、よっぽどわたしのこの行動がおかしかったんだ。

「カ、カレヴィ」

似合わないのは分かったから、とりあえずこの差し出したお肉を

なんとかかしてほしい。そうしてもらわなきゃ、いまさら引つ込みがつかない。

「あ、ああ……」

あまりに自分に似合わないことをやってしまっただ涙目になっているところで、カレヴィが我に返ってようやくフォークに刺したお肉が回収された。

ああうつうつ、今の自分を思い返してみても鳥肌立っちゃたよ。わたし、寒すぎる。

「……まさかおまえがそこまでしてくれるとは思わなかったぞ」

「うつ、うつ……」

いたたまれなくてナイフとフォークを置いて俯いてると、いきなりカレヴィにぎゅむっと抱き寄せられた。

え、ええ!?

「真つ赤になつて、本当に可愛いなおまえは」

そう言つと、カレヴィは食事の席にも関わらず、わたしを膝の上に乗せ、更にキスマでしてくる。

「カ、カレヴィ、食事中、食事中!」

何度もされるキスの合間にわたしがそう叫ぶと、カレヴィは少し残念そうにわたしを元の席に戻した。

なんというか、カレヴィの萌えポイント(?)の沸点が低すぎる。わたしのあの寒い「あーん」でそこまで感激できるなんて、ある意味貴重だ。

「おまえのために用意した席だが、俺は早くおまえを可愛がりたくて仕方ないぞ」

は、発言が危険なんですけど、カレヴィさん!

案の定、周りにいた侍女達がきゃーっと歓声をあげた。

うつうつ、恥ずかしすぎる。

似合わないことをやってしまったわたしもだけど、カレヴィもある程度は自重してほしい。

その後。

恥ずかしさを紛らわすためお酒に逃げたわたしは、またも見事に酔っぱらってしまい、カレヴィにお姫様抱っこされて王宮まで戻った。でも、わたしが覚えてるのはそこまで。

翌朝、わたしはカレヴィと一緒にわたしの寝室で目覚めた。

けれど彼に「昨夜は楽しかったな」と言われても、それは夜桜見物のことなのか、それともアレのことなのか分からなくて、わたしはしばらく挙動不審になるのだった。

30話 献上品とその贈り主

「実は、本日ハルカ様に献上品がございまして」

昼からの礼儀作法が終わった後、ソフィアが非常に言いにくそうに言ってきた。

「へえ、どなたから？ 貴族の方？」

「いえ……、貴族の方ではいらっしやらないのですが、王宮とは縁の深い方ですわ」

ソフィアは、なんとなく歯切れが悪い。

どうしたんだろ、と首を傾げると、モニーカが意を決したように言ってきた。

「実は、その方がハルカ様に直接お会いしたいと申ししてきました。

身分的にそれは遠慮して頂くように申したのですが」

身分的に……ってことは、あまりわたしには会うのははばかられる人なのかな？ それで、貴族でもないよ。

「……でも、その方はわたしに直接会うことを諦めてないってことだよな？」

「は、はい……。あの、ハルカ様、差し出がましい口をきくようですが、その方とはお会いにならない方がよいかと思われまますわ」

「わたくしもそう思います」

イヴェンヌもモニーカに同意して頷いた。ソフィアもそれに賛同するように頷いている。

「そんなにわたしに会わせたくない人って、誰？」

はつきりしない三人にわたしは切り込んで聞いた。

「あの……、実は、高級娼館の主なのですわ。そのフレイヤ様がハルカ様にお目通りを願っているのです」

「ああ、例のあれね」

非常に言いづらそうなイヴェンヌの言葉に、わたしは納得してポンと手のひらを拳で叩いた。

カレヴィがわたしとの婚約前にあつちの方面でさんざんお世話になつてた所の主なら、彼女達がわたしに会わせたがらないのも納得だ。

……ふーん、でもおもしろそう。

わたし、そつち関係は元の世界の知識とカレヴィ経由でしか知らないし。

こちらでカレヴィの弱みを探っておくのもいいかもしれない。

わたしは悪魔のようなことを考えながら、内心ニヤニヤした。

あ、でも一番のお得意様が減っちゃって、ここまでこぼしに来たつてことも考えられるな。

……ま、いいか。その時はその時だ。

「いいよ、お通しして」

「ハルカ様!？」

三人が信じられないと言つように叫んだ。

「その人に興味があるんだ。だから、会ってみようと思う」

一応、献上品には魔術師による検分が行われる。だから、それ自体には問題はないだろうし。

「……かしこまりましたわ」

諦めたようにイヴェンヌが待機しているであろうフレイヤを呼びに行くために礼をして下がっていく。

心配そうにわたしを見てくるソフィアとモニーカには悪いけど、わたしは娼館の主に興味津々だった。

やがて、謁見用の椅子に座つたわたしの前に高級娼館「月華の館」の主、フレイヤが現れた。

わたしのとしては、恰幅のよい厚化粧の中年女性を想像していたんだけど、実際の彼女は四十代くらいの上品な感じの女性だった。

ちなみに、あまりいい顔をしない三人を納得させるために、念の

ため部屋には近衛兵士を入れてある。

うん、これなら滅多なことは起こらないだろう。

「ハルカ様におかれましては、ご拝謁をお許し願えまして、欣幸の至りでございます」

わたしに対して正式な礼をして丁寧な挨拶をしてくるこのフレイヤという人物、いったいどんな人なんだろう。

第一印象としてはかなりいい感じなんだけど。

「本日はこちらを献上させて頂きにありがとうございました。月光蓮花香でございます。どうかお納めくださいませ」

使用人と思われる男性がずいと出てきて、恭しくイヴェン又達が立ちはだかるわたしの前に、被せてある上等な布を外して、細長い繊細な細工のしてある綺麗な桃色の石の箱を差し出した。

……なにこれ？

「香を焚く香炉ですわ。少し焚いてお見せしたいのですが、よろしいでしょうか？」

わたしが頷くと、モニー力達が小さなテーブルを用意して、フレイヤはそこに同じ桃色の石の板にのせた香炉を乗せた。

もう一人の彼女の使用人が持ってきた細長い金の綺麗な入れものからからスティック型のお香と思われるものを取り出した。

あ、なんだか、向こうの世界の長い線香型のインド香みたいだ。

フレイヤの使用人がそれを香炉にセットすると、それに火をつけ蓋を閉める。

すると、やがて香炉の細工の隙間から僅かな煙と共に、爽やかな花の香りが立ちこめた。

「……まあ、よい香りですわ」

ソフィアが思わずといった様子で言ったけど、確かにいい香りだ。それにどこかで嗅いだような懐かしい香りも混ざっている。……

そうかベビーパウダーだ。

人によっては好き嫌いもあるかもしれないけれど、わたしはこの香りが気に入った。

「いい香りですね」

にっこり笑って言うと、フレイヤも上品に微笑み返してきた。

「蓮の花の香りを主に調合した香ですわ。ハルカ様がお気に召されたようで喜ばしい限りです。どうぞ、寝室等でお焚きくださいませ」

あー、直接には言っていないけど、カレヴィとのアレの時に焚けてことか。

「……カレヴィもこの香はよく焚いてたんですか？」

つい、わたしは単刀直入に聞いてみる。

するとフレイヤは少し面白そうな色を瞳に滲ませてわたしを見た。

「この香の元になったものは、焚いている時にお褒め頂きましたわ。

これは、ハルカ様に合わせて調合させて頂きました」

ふーん、なら寝室で焚いてもカレヴィも大丈夫そう。

「まことに結構なものを頂きました、ありがとうございます。ありがとうございます。ありがたくいただきますわ」

イヴェンヌに代行してもらってわたしはお礼を言う。

王妃になる予定のわたしは、貴族相手でも直接軽々しく礼なんて言っちゃいけないらしいんだよね。

「もったいないお言葉ですわ」

恭しくフレイヤが頭を下げる。

でも、さつきから興味深そうにわたしの体とか顔とかちらちら見てるんだよね。

……やっぱり、彼女の真の目的は王妃となるわたしがどんな人物が見に来たんだらう。

わたしのその考えを肯定するようにフレイヤは微笑んで言った。

「実は献上品をお贈りするというのは建前で、わたくし、ハルカ様がどういう方か是非拝見したかったのですわ」

王宮と専属契約しているとはいえ、王の婚約者であるわたしにこつもはつきり言うとは、フレイヤは肝の座り方が半端じゃない。

それとも、王宮専属の高級娼館の主ともなればやっぱり違うものなのだらうか。

……などと、わたしは妙な感心をしながら、フレイヤの次の出方を見守っていた。

はてさて、彼女の口からいったいどんな私に対する感想が出てくるんだらう？

31話 宝玉

「それで、実際に会ってみてどうでした？」

「ハルカ様」

フレイヤに訪ねたわたしを侍女三人が心配そうに見てくる。

「政略にも関わらず、陛下が熱烈に愛されている方ともっぱらの噂です。実際にハルカ様にお会いして納得いたしましたわ。とても素敵なお体をされていらっしやいますのね」

「え……？」

わたしはフレイヤの言葉に目を瞠った。

素敵なお体ってなに？

わたしはそんな風に言われるほどスタイルはよくない。ちょっとぽっちゃり体型だ。

ただ、胸だけは小学生の頃からやたらとあって、男子に牛とかよくからかわれていた。

それは千花が全部撃退してくれたけどね。

そういう理由で、わたしはブラも実際より小さいサイズを無理矢理つけて大きすぎる胸を誤魔化していた。

千花に締め付けは体によくはないよとは言われたけど、昔からのコンプレックスがそうそう直るわけもなく、今まで来てしまったんだけれど。

「フレイヤ様、無礼ですわ」

ソフィアが苦情を言ったけれど、肝心のフレイヤはあまり気にしたふうもなかった。

「ハルカ様は男性を虜にさせるお体をお持ちですわ。……もちろん陛下があなた様を溺愛されるのはそれ以外の要素もあるのでしょうか」

……まあ、確かにカレヴィに要約するとおまえはエロい体だとはさんざん言われたけど、フレイヤのその考えはなにかの間違いじゃ

ない？

わたしはついこの間まで喪女だったんだよ？

この世界に来てカレヴィみたいな物好きに会ったけどさ。

ひよっとしたらフレイヤのこれは、ただのお世辞かもしれないし、軽く流しておいた方がいいのかもしれない。

本気にするのも自意識過剰みたいで恥ずかしいし。

「そうなのですか？ わたしにはよく分かりませんが」

けれど、わたしの思惑とは裏腹にフレイヤは頷いた。

「はい、そうです。……ただ、そのお化粧はいけません。せつかくのお体の魅力を相殺してしまいます」

「まあ！」

フレイヤの言葉に、化粧担当の侍女三人が気色ばむ。

突然でてきて言いたいことを言うフレイヤに彼女達が文句を言いたいのは分かる。……でもここは少し落ち着いてほしい。

わたしは侍女達を目で制すると、フレイヤに尋ねた。

「化粧がいけないとは、どういうことですか？ わたしはこれですよと思うんですけど」

わたし自身は今のナチュラルメイクでいいと思うんだけどね。

たまに化粧を落とすと誰……？ ってレベルの人がいるけど、まさか顔が変わってしまうくらい化粧をしろとか言わないよね？

「無難すぎるのです。ハルカ様にはそのお体にあつた化粧をすべきですわ」

「お言葉ですが、厚化粧はごめんです」

皮膚呼吸できないくらい塗りたくったりするのはごめん被りたい。できれば化粧もあまりしたくないくらいだけど、いい大人がそういうわけにもいかないだろうから仕方なくわたしはそうしている。

「いえいえ、厚化粧などいたしませんよ。少し目と頬の周りに色を入れさせていただくだけですわ。……ハルカ様、お疑いならぜひわたしにお化粧直しをさせていただきます。もちろん侍女の方にもご覧になっていただきたいですわ」

そうまで言われて、わたしは断るのもどうかたと考え、結局は了承した。

そんな経緯で、わたしは支度用の大きな鏡の前に座って、フレイヤに化粧を直されている。

……というか、色を足されているというか。

フレイヤはブラウンのアイシャドーをわたしの瞼から鼻にかけてささっと塗ってから、ブラウンのアイラインを上瞼にかいた後、暗めの紫のシャドーをその上に重ねるように塗って眉の下にハイライトを入れていく。

そうすると目が大きく見えて、自分で言うのもなんだけど、とても魅力的になっただよに見えた。

「まあ」

侍女達三人も鏡に映ったわたしを見て、感嘆の溜息をついた。

そして、瞼が紫ですから赤系統の頬紅にしましょうかとフレイヤは言って、頬骨の上にチークを軽くのせた。

これは顔色を健康的かつ華やかに見せるためらしい。

「ハルカ様、出来ましたわ。わたしが想像した通り、とても素敵に仕上がりましたわ」

フレイヤが満足そうに鏡の中のわたしに微笑むと、侍女三人もなぜか頬を染めながら頷いた。

「まったくですわね」

と、イヴェン又は鏡のわたしを見て溜息をついた。

「ハルカ様、とてもお綺麗です」

ソフィアは頬を両手で覆ってわたしの変わりように感嘆している。「ハルカ様がこんなに素敵になられるなんて、わたし達はいつたいなにをやっていたんでしょう」

モニーカ、そんなこと言わないで。わたしは充分よくしてもらってるよ。

鏡の中のわたしは体の線も相まって、どこか艶やかな美人になっていた。でもけっして下品な感じではない。

「ハルカ様、いかがでしょうか」

「……驚きました。わたしでも変わるものですね」
「言うなれば、お色気美人って感じ？」

顔自体はわたしだつて分かるのに、喪女だつたわたしをここまで変えるフレイヤの技術は素直に凄いと思う。

「ハルカ様は素材は悪くないですよ。いえ、それどころか磨けば光る宝玉ですわ」

「え……」

フレイヤの明らかな賞賛に、そういう方面では褒められ慣れていないわたしは盛大に照れた。

「まあ、ハルカ様はともお可愛らしいのですね。そんなところも陛下に愛されるころなのでしょうね」

真っ赤になつたわたしを見て、フレイヤがくすくすと口元に手を当てて笑つた。

「そ、そんな……」

わたしはそのフレイヤの言葉にさらに真っ赤になるしかない。

わたし、そんなに可愛げのある女じゃないよ。

「ど、どうもありがとう。とても綺麗にしてもらつて、感謝します」
すっかり動転したわたしは、気安く礼を言うのはいけないということも忘れ果て、慌てて椅子から立ち上がった。

その時だつた。

「ハルカ！」

大きな音を立てて支度部屋のドアが開くと、カレヴィが慌てたように入ってきた。

「カレヴィ、どうしたの……？」

尋常でないカレヴィの様子に、わたしは驚いて彼に向き直つた。けれど、カレヴィはわたしを見て固まり、瞳を見開いたままだ。

……あれ、とても綺麗にしてもらつたと思つただけだ。

「まさか、ハルカか……？」

呆然とカレヴィが呟いたので、それまで舞い上がっていたわたしはちよつと不安に思ってしまった。

モニーカ達の評判はいいし、フレイヤは満足そうにしてるからおかしくはないと思うんだけどなあ……。

32話 理想の異性

「……なにか変だったかな？」

凝視してくるカレヴィにわたしは居心地の悪さを感じて、思い切っ
つて聞いてみた。

「い、いや、そんなことはないが……」

ようやくはつとしたカレヴィは、少し動揺したようにそう言った
けれど、うーん、なんだかはつきりしないなあ。

「それより、なぜフレイヤがここにいるんだ」

「ハルカ様にお会いするついでに、香を献上に参っただけですわ」
懇意にしていたつてのは聞いてたけど、二人とも結構親しげ。

「それがなぜハルカの化粧などしている」

あれ、カレヴィ見てないはずなのになんで分かったんだろ。
化粧の仕方がいつもと違うせいかな。

「ハルカ様はせっかくよい素材をお持ちなのに、そのままではも
つたいのうございましたから。その御身にふさわしい化粧をされて
いるハルカ様はお美しいでしょう？」

蠱惑的な笑みを浮かべて、フレイヤがわたしを手で示した。

「よけいなことを。ハルカはそのままでもよかったのだ。こんなこと
をしたら他の男の目につくだろう」

「まあ、まだ見ぬ恋敵に嫉妬でございますか？ 陛下」

くすくすとおかしそうにフレイヤが口に手を当てて笑うと、不機
嫌そうにカレヴィが「笑うな」と言った。

「……カレヴィは気に入らないの？ せっかく綺麗にしてもらった
のに」

地味なわたしでも美人に見えるようにしてもらったのに、肝心の
カレヴィの反応がこれだとなんだかしょんぼりしちゃう。

沈んだわたしに慌てたのか、カレヴィが勢い込んで言ってきた。

「違うぞ、ハルカ。今のおまえはとても美しい。俺も思わず見とれ

た」

「……………本当？」

それならいいんだけど、カレヴィ内心はわたしのこの化粧が嫌なんじゃないだろうか。

「ああ。俺はおまえが美しくなりすぎて他の男の目に留まるのが嫌なだけだ。俺はそのままのおまえで満足してるし、それ以上は望んでいない」

冴えないわたしがいいなんて、カレヴィ変わり者過ぎ。……………まあ、その言葉はちよつと嬉しいけどさ。

「まあまあ、陛下、殺し文句ですわね。ここまで愛されていらつしやるハルカ様はお幸せですね」

「……………そうですね」

確かにカレヴィはこれ以上ないくらいの待遇でわたしを婚約者として迎えてくれたし、わたしはものすごい幸せ者だ。

……………ただ、それに王妃の責務としてしかお礼を返すことが出来ないのが心苦しいけれど。

ちよつと困りながら愛想笑いをしてると、カレヴィが苦笑してわたしを抱き寄せた。

「おまえはよくやってる。だから、気に病むことはない」

「……………うん」

すらりとして見えるけど、意外と逞しいカレヴィの胸に顔を埋めてわたしは目を閉じた。

……………ああ、本当にカレヴィを好きになれればいいのに。

申し訳なさにちくちく痛む胸をぎゅつと押さえて、わたしはカレヴィのされるがままになっていた。

その様子を見ていたフレイヤが驚いたように尋ねてきた。

「まさか、陛下の片思いですか？」

うん、そのまさか。

カレヴィみたいな男前に愛されて、それもこんな地味なわたしが好きにならないなんてフレイヤも信じられないのだろう。瞳を見開

いてわたしを凝視している。

「ああ。だが俺はいつかハルカが想いを返してくれるように努力していくつもりだ」

「まあ」

フレイヤがさらにこぼれそうなくらい目を見開いた。

ああああ、居心地悪い。

なぜにカレヴィ、わたしみたいな地味女にベタばれなんだ。

もう誰が見ても恵まれすぎなほどの待遇だし、その上、カレヴィはわたしのために離宮まで建てるって言っし。

本当にカレヴィって、ものすごい物好きだ。

「こう申してはなんですが、ハルカ様は男殺しですね」

「は？」

「おい」

信じられないことを聞いた気がして、わたしはカレヴィの腕から出てフレイヤをまじまじと見つめた。

男殺しっていったいなんだ、それどころかわたしは全くの逆を行っていた喪女だぞ。

カレヴィもそれに同意なのか、なにを言っただという目でフレイヤを見つめている。

「それはあなたの勘違いでしょう。わたしは今まで異性にまったくモテませんでしたよ」

わたしがそう言うと、フレイヤは本当に驚いたようだった。

「ハルカ様、それは嘘でしょう？」

「本当です」

力強くわたしが頷くと、フレイヤは片手で顔を覆って溜息をついた。

「ハルカ様の世界の男性はどこがおかしいのですか？ それほどまでに魅力的なお体ですのに」

あ、フレイヤ、わたしが異世界人であることも知ってるんだ。

じゃあ、最強の女魔術師である千花繋がりにしても知ってるの

かな。

「どこかおかしいって……、普通だと思えますよ。わたしもモテる努力をしませんでしたし。……ただ、この大きすぎる胸はよくからかわれてましたけど」

「なんだと」

わたしの言葉に、なぜかいきなりカレヴィが気色ばんだ。

ど、どうしたの？

「それです。それが男性側のハルカ様に対する異性としての訴えだったのですわ」

「はあ？ ただのセクハラなだけじゃないですか？ それにこんなことは小学生……割と小さな頃から日常茶飯事でしたし。……ああ、そのせいか知らないおじさんに声をかけられるのもしょっちゅうでしたね」

「しょっちゅうって、それはおまえ危機感なさすぎだろう」

少し怒ったみたいにカレヴィが呆れた様子で言うてくる。

「うん、でもそれは全部千花が撃退してくれたから。千花はその頃からかつこよかったし」

「おまえはまた……」

途端におもしろくなさそうな顔になるカレヴィをおかしそうに見ながら、フレイヤが納得したように頷いた。

「そうですか、ティカ様が」

「うん、そう。千花はすごいんだよ。頭はいいし強いし優しいし綺麗だし」

あ、すっかりわたし王の婚約者らしくない、元の口調に戻ってるな。

「その上、最強の魔術師ですものね」

フレイヤはうんうんと頷きながらわたしの話を聞いてくれる。…

…うん、いい人だ。

「でしょう！？ 最初聞いたときはびっくりしたけど、でも千花ならそれもなんとなく納得できちゃうんだよね」

なんでも留学していたら思っていた一年間が、この世界で魔術を習っていた期間だったらいいけど、そんな短期間で最強とまで言われる千花はやっぱり並じゃない。

「ふふ、そうでしたか。では、もしティカ様が男性でしたらお好きになられてました？」

「……千花が？」

「なんだか変なことを聞く人だなあ。」

「おい」

不機嫌そうにカレヴィが声をかけてくるけれど、フレイヤは笑って受け流した。

「うわあ、一国の王に対してフレイヤってば強心臓ー。」

「ああ、でも聞かれたことに答えなきゃ。」

「そうだね、千花が異性だったら好きになってたかもね。たぶんかなり理想かも」

「そう言った途端、なぜか恥ずかしさがこみ上げてきてわたしは熱くなる頬を覆った。」

「なぜ赤くなるんだ、わたし。」

「ああ、ここに千花がいなくてよかった。せつかく大切な友情を築いているのに、変なやつだと思われちゃうよ。」

「まあ、ふふふ。やはりそうなのですか。ティカ様は大変魅力的ですからね」

「うん」

わたしが頷くと、フレイヤはおかしそうに口元に手を当ててカレヴィを見る。

「わたしもつられてカレヴィを見ると、苦虫を噛みつぶしたような変な顔をしていた。」

「……あれ、どうしたの？」

「陛下、前途多難ですわね」

まるで吹き出すのをこらえるような表情でフレイヤが言うと、カレヴィは不機嫌な表情のまま、わたしを抱き寄せた。

「……時間はいくらでもある。必ず俺の方を向かせてみせる」
そう言つと、カレヴィはわたしに何度も口づけた。

……あのー、人前なんですけど。

そんなことを言つても、カレヴィが聞くわけないって分かつては
いるけどね……。

33話 説得、そして……

「……それで結局、この化粧はこれからしてもいいのかな？」

いつまでもキスしてくるカレヴィの腕からやっと逃れて、わたしは聞いてみた。

「駄目だ」

「ええー、なんで？」

カレヴィだつて美しいって言うてくれたじゃない。まあ、お世辞かもしれないけど。

「さつき言つただろう。他の男の目に留まるから駄目だ」

「目に留まつたつて、王の婚約者にいちいち声なんかかける人いないつて！」

それもわたしだよ？

とてもそんな勇者がいるとは思えない。

「甘いぞ、ハルカ。王の婚約者と分かつていて手を出す大馬鹿者はいるものだ。過去にはそれで婚約破棄になった例も僅かにだがある」

「え、そうなんだ。王の婚約者に手を出すなんて随分な豪傑だね」
わたしは正直言つて驚いた。

権力の頂点にいる王の婚約者を奪うなんて、カレヴィがさつき言つたみたいによほどの大馬鹿者か、大物かのどっちかだと思う。

「……それで、手を出した人はどうなったの？」

「半年から一年程度の謹慎処分になった。なかには政務が滞るといふことで咎めなしという例もあるが」

「え、そんなに罰が甘いのか？」

よくて、鞭打ちとか国外追放とかだと思つてたから、カレヴィのこの言葉にはびっくりした。

「たまたまだろうが、それが侯爵や公爵の子息などだったんだ。いくら王とはいえ、身分の高い貴族をそうそう処分するわけにもいきまい。王妃になつていればこうはいかないがな」

「そうなんだ。婚約者と妃では随分違ってくるんだね」

女としては、やることやってるのになんか納得できないけど。

「……だから、ハルカは以前のもままでいい。惜しいが、ハルカはその化粧を落とせ」

「え、やだよ。王妃になるなら綺麗な方が国民受けもいいでしょ。

大体実際にわたしを口説く人に会ってもいないのに、カレヴィ気にし過ぎ」

「そうでございますわねえ。ハルカ様のおっしゃる通りですわ」

今まで楽しそうに傍観していたフレイヤが頷いて同意してくれた。

「いや、実際におまえに声をかけそうなやつがいるんだ。例えばリットンモア公爵家のアーネスとか」

「まあ、確かにあの公爵様ならハルカ様にお声をかけそうですわね」

フレイヤ……、いったいどっちの味方なの？ てつきり一緒にカレヴィを説得してくれると思ったのに。

でも、わたしのその気持ちを汲んだように、フレイヤは言うてくれた。

「けれど、せつかくお美しくなられる資質がおありなのに、その機会を奪われてしまいますのはハルカ様のおためにもなりませんわ。陛下はハルカ様が美しくないと劣等感にこの先ずっと苛まれてもよろしいんですの？」

「いや、それは……」

カレヴィはフレイヤの言葉にうるたえている。……よしよし、いい感じだ。

「カレヴィはわたしが国民から不細工な王妃っていうそしりを受けても平気なの？ わたしはそれも仕方ないと思ってたけど、化粧で綺麗になれるならその憂いもなくなると思ってたのに」

「ハルカ、おまえはけっして不細工などではないぞ。おまえは普通だ！」

「でも国民は多分そう見ないよ。カレヴィは男前だから、地味なわたしはきつと比べられて不細工って言われるよ」

「おまえが俺を男前と……っ」

……カレヴィ、わたしを説得してたんじゃないの？ なに感動してるんだ。

わたしとフレイヤが乾いた目でカレヴィを見ていたら、それに気づいた彼は咳払いをした。

「た、確かにそんな事態になったらおまえが気の毒ではあるが……」

「でしょ？ だからきちんとお化粧して、国民にお似合いのカップルだって分かってもらう必要があると思うんだ。カレヴィだってその方がいいと思うでしょ？」

「それは……、そうだが……」

カレヴィはすっかりさっきの勢いをなくしてる。よし、もう少しで説得できそうだぞ。

「そうでございますね。その方がハルカ様が国民に歓迎されますでしょうね」

フレイヤ、ナイスアシスト。

そこまで言われたら、カレヴィもわたしのこの化粧に反対できないだろう。

「く……っ、分かった。認める、認めればいいんだろう」

カレヴィが呻くようにそう言っと、頭をかきむしった。

……なんだか、すごく不本意そう。

そんなに、わたしが男の人に口説かれるかもしれないというのが嫌なのかなあ。

わたしはカレヴィに寄り添うと、その片腕にしがみついた。

「わたしはあなたの婚約者だよ？ 少しは信用してよ」

「ハルカ……」

サービス精神からの行動だったけれど、カレヴィはなんだか感動してくれたようだ。

ぎゅむつとわたしを抱きしめるとカレヴィはわたしの顔のあちこちにキスをした。

……ああ、またこのパターンかあ。

わたしがそう思っているうちにもカレヴィの口づけは激しくなっていく。

「やはり、ハルカ様は男殺しですわね」

いや、フレイヤ、その認識は間違ってるから。

単に、カレヴィの好みが変わってるっただけだと思っよ。

「ハルカ様……素敵です。陛下とお似合いですわ……」

事の次第を見守っていた侍女達がほうつと溜息をついて、やはりカレヴィの暴走を見守っている。

……いや、見てないで助けてよ。

わたしは情性でカレヴィのキスを受け続けていたけれど、その後危うく寝室に連れ込まれそうになり、大いに慌てたのであった。

……野獣め、昼間っからいい加減にしろー！

34話 小悪魔

その夜はフレイヤから貰った月光蓮華香を焚き、カレヴィの希望でわたしはフレイヤから習ったお化粧をしたまま事に及んだ。

その結果、カレヴィは大盛り上がりでわたしは大変だった。

「いつもと違って新鮮だったぞ」

とかなんとかカレヴィはすっきりした顔で言っただけど、わたしはぐったりだ。

どんなに疲れてても化粧は落とさなきゃいけないし、控えてた侍女を呼んでもよかったんだけど、閨の雰囲気のままそうするのはためらわれて、わたしは一人で洗面所に行って化粧を落とした。

「なんだ化粧を落としたのか」

幾分カレヴィはがっかりしていたみたいだけど、していた方がよかったのかな？

「カレヴィは普段のわたしじゃ嫌なの？」

「い、いや、そんなことはないぞハルカ」

……これで嫌だっけと思ったら口きいてやらないところだけど、カレヴィはどもりながらもわたしの機嫌を取りにかかってきた。

「化粧したまま寝ると、後でニキビとかできたりして大変なんだよ。

……そういうわけだから、今後化粧してでは程々にしてね」

「……そうか、それはすまなかった。おまえの希望通り化粧している時は程々にする」

うーん、素直だなあ。

最近は前ほど無理なことしなくなってきたし、いい傾向だ。

「ん、じゃあ、今日はもう寝よっか。わたし疲れちゃった」

「俺はまだ疲れてないぞ。それにハルカは化粧を落としたのだから、もう少し可愛がりたい」

「……っ」

素直と思ったのは訂正。

やっぱりカレヴィは野獣だった。

「……だめか？」

そうやって、少し寂しそうに聞かれると、ものすごく困るんですけど！

わたしはカレヴィに愛されてて、そしてこれ以上ない待遇の身の上だ。

なのに彼の愛に応えられないわたしは、こういうところでお返しをするぐらいしか思いつかない。

「わ、分かった。少しならいいよ」

もしかして流されてるのかもしれないけど、これだけよくして貰ってるんだもの、そのくらいはしなきゃ駄目だよね……？

「そうか」

カレヴィは嬉しそうに笑うと、早速わたしにのしかかってきた。

でも、今回も少しどころじゃ済まなかったわけだけど。

そんなことがあって、次にわたしが気がついたのは朝だった。

「……もつどこが少しなのよ……」

「すまない。おまえがあまりにも可愛すぎて我を忘れた」

もう恒例となってきた共同の朝食時のやりとり。

治療魔法をあまりかけられないわたしは、腰に湿布を貼って貰ってなんとか痛みをやり過ごしている。

「そこで思いとどまるのが人間でしょ。カレヴィってば野獣ーっ」

わたしがそう言うと、周りに控えていた侍女達が一斉に吹き出した。

「……野獣」

わたしの言葉にカレヴィはショックを受けたみたいだけど、これを野獣と言わなくてなんと言う。

「まあまあ、お二人とも仲のよろしいことで」

ゼシリアがにこやかに言ってくるけど、本当に仲が良いように見えるんだろっか？

カレヴィを見ると「そうか？」となんとなくにやけていて、満更でもなさそうだ。

「少し早いのですが、ハルカ様にお目通りを希望なさっておられる方がいらっしやいます」

ゼシリアの報告にカレヴィがうんざりというような顔をした。

「……またか。ハルカはまだこちらにきて間もないのだ。あまり今から疲れさせるのは良くない。帰ってもらえ」

それ、一番わたしを疲れさせているカレヴィが言うこと？ なんとなく納得できないんだけど。

でもカレヴィは眉をちよつと顰めていて、わたしのことを本気で心配してくれているみたいだ。

「……それが、リットンモア公爵家のアーネス様なのですが」

そこでカレヴィは飲んでいたコーヒーを気管に詰まらせたらしく思い切りむせていた。

わたしは慌てて立ち上がると、カレヴィの背中をさすった。

「だ、大丈夫？」

カレヴィはひとしきり咳こんだ後、なんとかそれも治まったようだ。

「ああ、大丈夫だ。ハルカすまない」

肩に手をかけて覗きこんだわたしに、カレヴィは口づけしてきた。……ちよつと、そこキスするところ？

わたしがちよつと首を捻りながら席に戻ると、カレヴィは「アーネスがハルカに会うなら俺も立ち会う」と言った。

まあ、カレヴィやフレイヤが言うところによると、女癖の悪い人みたいだしその方がいいんだろっか。

それに随分と偉い人みたいだし、粗相のないようにカレヴィに付

いて貰った方が助かるかもしれない。

「うん、お願い」

わたしが頷くと、カレヴィは終わった食事を片づけさせ、リットンモア公爵を受け入れる準備をさせた。

「ねえ、その公爵様はおいくつなの？」

「俺と同じ年だ」

え、ということは二十四歳か。

「……いいか、ハルカ。絶対に奴に見とれるな。口車に乗るな。惚れるな」

がしつと肩を掴まれて真剣に訴えられたけど、その内容はなんだ。

「……ふうん、格好いいんだ」

カレヴィの言葉から総合して答えを導き出したわたしに、すかさず彼から「絶対に惚れるな！」とビシツと指を指されて言われた。

「……いや、そんなの会ってみないと分からないし」

なんとなく必死なカレヴィがおかしくてつい言ってみる。

「会うな！」

「……冗談だよ。カレヴィ、嫉妬も程々にしないと嫌いになっちゃうからね？」

「く……っ、分かった、認める！ ハルカ、おまえは悪魔か！」

えー、カレヴィの好意につけ込んでるのは本当だけど、悪魔はな
いんじゃない？

だけど、やっぱりこの嫌いになる攻撃は効果てきめんだ。

そんなことを思っていると、モニーカが言ってきた。

「まあ、陛下。それをおっしゃるのならハルカ様は『小悪魔』ですわ」

すると、ソフィアもちよつと興奮したように言ってきた。

「まあ、陛下のお心をこれほどまでに乱されるハルカ様にぴったり
の表現ですわ」

「まああ、本当ですわね！」

イヴェンも頬を染めながらそれに同意した。

……いや、それはわたしにもっとも遠い表現じゃないの？
わたしはこの間まで喪女で……、と思ったけど、段々自信がなくなってきた。

わたしがカレヴィを振り回しているのは本当だからだ。

「そうか、小悪魔か。……ぴったりだな」

だから、わたしを見下ろしながらカレヴィが言ったことにも反論はしなかった。

いや、言いたいことは山ほどあったけどね。

35話 公爵の宣言

目の前に現れたのは、金色から下の方へ次第に銀に変わっていく豪華な髪を背中の中程まで延ばした男性だった。

瞳の色は青みがかった紫。

繊細かつ優美なんだけど、どこか男性的なところも持ち合わせている顔立ち。はっきり言って超美形。

すらりとして見えるけど、鍛えているのがなんとなく窺える体つきをしている。

……っていうか、全身から立ち上るような色気が凄い。

なるほど、ゴージャスっていうのはこういう人のことを言うんだなーとわたしはしみじみ思った。

漫画描きからしたら、ぜひデッサンさせてくださいと頼みたい人種であることは間違いない。

「ハルカ、見とれるな」

隣に座ったカレヴィがこっそり声をかけてきた。

いや、別に見とれてた訳じゃないけど。

単に人間観察をね……、と思つてたら、あちらもこちらを観察しているようだった。

ふうん、興味があるのはお互い様ってことだね。

「お初にお目にかかります、ハルカ嬢。アーネス・クレイル・レグ・リットンモアと申します」

恭しく手に口づけられて、貴婦人への礼を取られる。

「ハルカ・タダノです。よろしく願います、リットンモア公爵様」

この挨拶、普通すぎたかな？

でも目の前の公爵様は「はい」とにこやかに微笑んでいるので問題ないようだ。

「別によろしくなくていい」
隣に座っているカレヴィがむすつとして言った。……ちよつと態度悪いよ。

わたしがカレヴィにそう言おうとした途端、目の前の公爵様が口を開いた。

「おやおや、カレヴィは噂に違わず随分とハルカ嬢にご執心のようだ。こんな普通の挨拶でご機嫌斜めとは」

え、王であるカレヴィを呼び捨て？
それも毒舌付きで。

わたしが思わず瞳を見開くと、公爵様はわたしの戸惑いに気づいたらしく、ああ、と言った。

「彼とは母親同士が姉妹なんですよ。歳も同じですし、わたしはカレヴィの友人なのです」

「あ、そうなのですか」
わたしが思わず息をついてにつきりすると、目の前の公爵様もにつきりする。

……うーん、目に眩しいぞ。

彼のこの笑顔を目にしたら、ご婦人方がさぞかし騒ぐんだろつな
あ。

「ハルカに色目を使うな、アーネス」

「……ちよつと、カレヴィなんなの？ 普通に話してるだけでしょ」
わたしはカレヴィの嫉妬深さに段々いらいらしてきた。カレヴィ

がこんな調子じゃ、異性には誰とも話せないよ。

「おまえが無邪気に笑いかけたりすると、こいつが調子に乗る。釘を刺しておいてちよつとどよくらいだ」

「あのねえ、さっきも言ったけど本当に嫌いになっちゃっやうよ？ わ
たし、嫉妬深い人嫌い」

「ハ、ハルカ……ッ」

いくらかうんざりして言うと、カレヴィはショックを受けたようだ。ちよつと大袈裟なくらい動揺している。

けど、カレヴィと一緒に会ったのは実は失敗だったかも。

いちいちこの公爵様に突っかかっているようじゃ、まともな会話が出来るとは思えない。

そう思ってたし、カレヴィを目で制していると、やがてくすくすという笑い声が聞こえてきた。

「本当にカレヴィはあなたに骨抜きなんですね。夜の習いからそうらしいですが、以前の彼からは想像もつきませんよ」

他人、それも男性から「夜の習い」のことを口に出されて、わたしは思わず赤面する。

いや別に赤くなることもないんだけど、侍女以外でこのことを言われたのは初めてだったんで妙に恥ずかしかったんだ。

「おや、女性個人には興味のなかったカレヴィを落とした方にしては随分と可愛らしい」

「おい、アーネス」

さらに真っ赤になったわたしをカレヴィが横目で見て、公爵様に文句を付けようとする。……が、この公爵様の言葉はここで止まらなかった。

「……本当に。昨夜あんな艶めかしい声でお啼きになっていた方と同一人物とは思えませんよ」

「え……」

おかしそうに笑う目の前の公爵様にわたしは瞳を見開くしかなかった。

まさかこの人、昨日の夜の習いのあんなことやこんなことまで聞いてたの？

控えの侍女や近衛兵士は仕方ないにしても、いくらなんでもやりすぎじゃない？

全身真っ赤になる思いで、わたしは公爵を睨みつけた。

こんなこと言ってくる人に、もう様付けなんかいるもんか！

「おやおや、そんな可愛らしい顔で睨んでも怖くありませんよ、ハ

ル力嬢」

憎たらしいほどにこやかに公爵は笑うと、再びわたしの手を取った。

……ちよつとなにする気？ 挨拶ならさつき済んだでしょ？

わたしはとつさに手を引っ込めようとすると、公爵にがっかり掴まれてて無理だった。……ちよ、ちよつと！

公爵がふつと笑ってわたしの手に再び口づけたかと思うと、指と指の間の柔らかい部分をちろりと舐めた。

「ひゃんんっ」

わたしは思わず変な声を出して、恥ずかしいほどびくりと反応してしまった。

ちよつと、なにをするのーっ!？

思わず涙目になって公爵を睨みただけれど、相変わらず目の前の男はにこやかに笑っている。

「ハル力嬢はとても敏感なのですね。正直ここまでとは思いませんでした」

……わたしもこんなに公然とセクハラされるとは思いもしなかったよ！

と叫びたいけど、肝心のわたしは真っ赤になったまま、あ、とかう、とか呻くだけ。

「おい、アーネス。ハルカの手を離せ。よくも俺の前でそんなことを」

忌々しそうにカレヴィが公爵の手をわたしから振り払ってくれた。

うう、カレヴィごめん。嫉妬深い人嫌いとか言っちゃって。カレヴィの言うことは正しかったよ。

わたしは速攻でカレヴィの後ろに回り込んでセクハラ公爵から身を隠した。

「……まあ、冗談はこれくらいにしておいて」

「こ、この心臓に悪いやりとりが冗談！」

「この公爵、ふざけすぎてる！」

「あ、あなたねえ……っ」

ふるふると体を震わせて抗議しようとしたわたしは、公爵に「あ、夜の習いを外で聞いていたのは本当ですよ」と言われ、再び真っ赤になって口をぱくぱくするしかなかった。

「おい、やりすぎだろうアーネス。ふざけるのもいい加減にしろ」
カレヴィはわたしを背にかばって公爵に猛抗議する。うう、すっかり忘れてたけどカレヴィって頼もしかったんだね。

「……ふざけているのはカレヴィ、君もだろう。君はこの女性に溺れすぎてる。このままだと政務にも滞りが出てくるぞ」

え、とカレヴィを見ると凶星だったらしく、彼は苦々しく顔をしかめている。

「婚約期間中なんだ。この期間くらい見逃せ」

「この期間中で済めばいいけどね。それに、まだ婚礼も挙げていないうちから婚約者のために離宮建築なんて聞いたこともない。カレヴィ、君はもう少し自重すべきだ」

そ、それは確かに自重すべきだよ、うん。わたしにそんなお金かけないでほしい。

「カ、カレヴィ、わたし離宮なんていいよ」

思わずカレヴィにしがみついてしまいなから、わたしは彼に懇願する。

「なにを言う。ハルカ、俺は約束しただろう」

「わたしはそんな贅沢したいわけじゃないよ。今のままで充分良くして貰ってるし」

「それでは俺が納得しないと云っただろう。おまえは物を欲しがらなすぎる」

「え、でも貰ったじゃない。高そうなストールとか」

普段の衣装とかでも結構使っているみたいだし、婚礼でも相当お

金がかかるんだから、これ以上の散財は正直やめて貰いたい。

「……だが、おまえが実際に欲しかったのは腕力バーだ」

「……腕力バー？」

公爵はカレヴィの言葉に瞳を見開くと、次には体を折って大爆笑した。

「……ちょっと笑い過ぎじゃない？」

腕力バーのどこが悪いんだ。

「な、なるほど、ハルカ嬢に物欲がないのはよく分かったよ」

「分かったのならこれで引け、アーネス」

「……いや、でも引けないね。カレヴィが離宮を今から建てる気にいるのは本当だし。彼女に溺れすぎているのも事実だしね」

ようやく笑いを収めた公爵が真面目な顔になる。

そうすると、緊迫した空気がこの場に流れた。

公爵はその中で溜息を一つ付くと、カレヴィを真っ直ぐに見据えて言った。

「カレヴィ、君がこのまま政務をおろそかにするなら、わたしは彼女を君から奪うよ」

36話 言葉責め

あれからカレヴィはリットンモア公爵に半ば脅されるようにして執務に入ったけれど、テーブルに座ってコーヒーを飲んでいるわたしの目の前にはなぜかその公爵が居座っていた。

いや、一回追い出したんだよ？

だけど、公爵はうまく侍女を懐柔して（たらし込んで）再び私の前に現れるというしたたかさを見せた。

……わたしにこれ以上なんの用があるっての？

カレヴィはきちんと執務に入ったからもうわたしには用はないでしょ。

「ハルカ嬢の世界の菓子はおいしいですね。甘い菓子しか知らないわたしには驚きですよ」

どこから貰ってきたのか、公爵はわたしが大事に取っておいたポテトチップスの袋を抱えてそれを勝手に食べていた。

……わたしが楽しみにしていたコンソメ味！

こんなことになると分かってたら、もっと買っておいたのに。

「いいですから、その袋返してもらえます？ わたしも食べたいんですけど」

だいたい袋抱え込んで独り占めって、大貴族のくせして意地汚すぎる。

すると、公爵はわたしの傍に寄ってきて摘んだポテチを目の前に差し出した。

「はい、ハルカ嬢」

なに、差し出されたこれを食べると？

つまりこれは「はい、あーん」だよな？

そんなカレヴィが見たら激怒しそうなこと、できるわけないよ。

わたし達のその様子をモニター力達がはらしながら見守ってい

る。

「……結構です。その袋さえ返していただけたら、大皿に盛って自分で取りますから」

「いやいや、遠慮せずに」

そう言うと、公爵はわたしの口に無理矢理ポテチを当ててきた。

……ちよつと！

わたしは唇を引き結んでポテチを拒否。

「ハルカ嬢は結構強情ですね。これを食べたら返して差し上げますよ」

甘つたるい笑顔と共に言われたけど、無視。

ああ、でもさつきからポテチのいい匂いがしてたまらない。ポテチの誘惑、恐るべし。

それでもわたしは頑張った。

「……仕方ないですね。それではこれはわたしが食べるということ」

そう言うと、公爵はさつきまでわたしの口にあてていたポテチに意味ありげにキスすると、それをにこやかに食べた。

「これでハルカ嬢と間接的に口づけたことになりましたね」

……つて、間接キスカよ！

わたしは突然柄が悪くなりながら、公爵のあまりの気障さに鳥肌を立てていた。

「……わたしは間接キスごときでどうこう言うほど初じゃありませんよ」

いくら喪女だったといっても、それくらいの耐性はある。

こちらの純粹培養の姫君とかだったら真っ赤になってるかもしれないけどね。

わたしがすげなく返すと、公爵は眉を上げて元のテーブル席に戻っていった。……しっかりポテチの袋も持って。

ポテチに未練はあるけれど、仕方ない諦めるか。

わたしは溜息をつく、皿に盛られたチョコを口にした。

すると、口いっぱい高級チョコレートの風味が広がる。ああ、おいしい。

ポテチは公爵に奪われたけれど、ここのチョコもおいしいからまあいいか。

ポテチはまた向こうに行った時に多めに買っておけばいいし。

そんなことを思いながらコーヒーを飲んでいたら、公爵がまじまじとわたしを見てきた。

「……なんですか？」

「いや、ハルカ嬢はコーヒーにミルクとか砂糖を入れなくても平気なんですね。大抵の女性はその苦みが苦手なんですが」

……ああ、そういうことね。

「いつもは入れますけど、今回はカロリーの高いもの取ってますから」

チョコとか、食べる予定だったポテチとかね。

油断していると太るから、この後庭園へ散歩に出る予定だ。

「カロリー？」

公爵が不思議そうにわたしを見てくる。

あ、そうか。ここにはない単位だからか。

「熱量の単位です。えーと、力の源の単位の一つというか」

う、この辺りの説明はちょっと怪しいな。これで公爵が分かってくれるといいけど。

「ああ、そういうことか。大体分かりました」

どうやら公爵が理解してくれたらしいのでわたしは胸を撫で下ろした。

「理解していただけでよかったです」

ほっとした反動でわたしはうつかりポテチの恨みも忘れて公爵に笑いかけてしまった。

すると公爵は少し瞳を見開いてわたしを見た。

そして、色気のある笑顔で言ってくる。

「……ハルカ嬢は、そんな顔をするとても愛らしいのだね。とて

もよい笑顔だ」

「え、あ……？」

愛らしいなんて言われたことのないわたしは、思わずかっと赤くなってしまうた。

いや、お世辞だろうから照れることはないんだろっけど、さすがに高級娼館の主のフレイヤが認める女たらしなことはある。

なんとというか、この公爵こそぞというところの褒め方が凄くうまいんだ。

「あ、ありがとうございます？」

うっ、褒められ慣れてないと、こんな時にうまく流せなくてつらいなあ。

こっちに来てからカレヴィに可愛いか言われるようになって、少しは耐性が付いたと思ったんだけど。

よく思い返してみると、カレヴィ割とあっさり言ってくるんだよね。

それでついついわたしも流しちゃってるんだ。

よし、今度からカレヴィに熱烈に言っつて貰って練習しよう。

……もちろん、夜じゃない時にね。

そうじゃないと別の意味でカレヴィ盛り上がりそうだから。

わたしがそうなった時を想像して溜息を付いていたら、ふいに近くに人の気配を感じた。

このフェロモン溢れる気配は公爵に間違いない。

「……なんですか」

「いや、赤くなったかと思ったら考え込んでいるから、どうしたのかと思って」

「いえ、少し言葉責めについて考えていたんです」

そんなことをついつかり口にしてしまったのはまずかった。

「ふうん？」

公爵はわたしの隣の席に座ると、わたしの両手を取った。

……ちよっと、塩味ならまだともかく、コンソメ味のポテチを食

べていた手で……と思ったけど、公爵はちゃんとおしぼりで綺麗に拭いていたようだ。

「ハルカ嬢はカレヴィではご不満かな？ なんなら、わたしが直にして差し上げてよいいが」

いやいや、夜のカレヴィの方は充分恥ずかしいですよ……って、なんでわたしの手を撫でてるんだあーっ。

絶妙なその感覚に、背中がぞくぞくして思わず身を振ると、公爵は目を細めて笑った。

「おや、ハルカ嬢はこんなことでそんなふうになるんですか？ カレヴィという婚約者がいるというのに他の男に手を撫でられたくらいではしたくない方だ」

耳元でぞくぞくくるような声で囁かれながら手を撫でられて、わたしはみっともなくそれに反応してしまう。

やばい、こいつはやばい！

今まで会ったこともない人種だ！

なんとか公爵から距離を取ろうにも、「ふふ、逃がしませんよ？ 可愛い人」などという恐ろしいことを言っつて、公爵はわたしを離さない。

そのうちに公爵は囁きと共に耳に息まで吹きかけてきて、わたしは飛び上がってしまった。

ちよっ、いやだあああっ！

というか、侍女の誰でもいいから見てないで助けてよーっ！

そのわたしの祈りが通じたのか、ゼシリアがこの公爵のおふざけを止めてくれた。

「いい加減になさいませ、アーネス様。あまりにお戯れがすぎますと、わたくしは陛下にこのことをご報告しなければなりません」

「……それは困るね」

そこでようやくわたしは公爵から解放されたんだけど、今まで翻弄してくれたお礼に彼の顎をグーで殴っておいた。

「……っっ」

そして公爵が怯んだその隙に、わたしは脱兎のごとく自分の居室から飛び出す。

「あ！ お待ちください、ハルカ様！」

イヴェン又達の叫びが後から聞こえてきたけれど、わたしは待たなかった。

だって、恥ずかしくて仕方なかったんだよ。

だからちよっと放っておいてほしい。

しばらくすれば立ち直ると思うから。……多分。

37話 モテ期到来

「ハルカ様、お待ちください！」

後ろから近衛兵士の声が追いかけてくるけど、わたしは止まらなかつた。

全速力で廊下を駆け、最初の角を曲がろうとしたところで誰かにぶつかってしまった。

「あっ！」

「うわっ」

結局わたしはその人物に抱きつく形で止まった。

「ご、ごめんなさいっ」

「……あ、れ……？」

慌ててその人から離れようとして、わたしはあることに気がついた。

「……なにをやってるんですか、あなたは。仮にも王の婚約者だというのに慎みのない」

色白な頬を染めながらわたしを怒る銀髪のその人は、見た目十代後半でカレヴィに似ていた。

「あ、あなた、ひよっとしてカレヴィの……」

「……弟のシルヴィイです。それより、廊下を走るなど淑女としてはもつてのほかですよ」

「ご、ごめんなさい、シルヴィイ君」

わたしは頭を下げて初めて会うシルヴィイ君に謝った。

カレヴィには弟をそのうち紹介すると言われてただけで、こんな出会いは不意打ちすぎてわたしはついうろたえてしまった。

……でも、王族とかそれに近い人が住んでるフロアなんだから、いつ会ってもおかしくなかったんだよね。わたし、全く不用心だ。

「……シルヴィイ君はやめてください。シルヴィイでいいです」

「あ……、うん。こんな形でなんだけど、よろしくね、シルヴィイ」

「はい」

領きつつも、まだ若干機嫌悪そうなシルヴィにわたしはちょっと小さくなってしまった。

ああ、兄王の婚約者がこんながさつな女だと分かって不満なのかなあ。

「シルヴィ、そんな態度じゃハルカ様に失礼だろう」

見かねたのかシルヴィと一緒にいた同じぐらいの少年というか金髪青年が咎めるように言った。

……あれ、この人も見たことのあるような顔してる。

「あの……、どなたですか？」

「……ああ、失礼しました。僕はリットンモア公爵家のイアスと申します。以後お見知り置きをお願いいたします。僕もイアスとお呼びください」

淑女への手の甲への口づけを受けながらわたしは思わず言ってしまった。

「リットンモア……あ、あの公爵の？」

「弟です。兄にはもうお会いになったんですね。兄はハルカ様にとっても興味があるようでしたから」

感じよく微笑みながらイアスが言うのをわたしは愛想笑いで受け止めていた。

……興味ねえ。

あれって、そうなんだろうか。

どちらかというと、政務を邪魔する女に嫌がらせをしにきたようにしか見えないんだけど。

それを彼の弟にそのまま言うわけにもいかないのです、わたしは適当にお茶を濁して言った。

「……公爵の場合、ただ毛色の変った女が珍しいだけだと思うんだけど」

「それはあるでしょうね。異世界出身で最強の魔術師の友人、おま

けに国王を誘惑する女ですからね」

途中まではともかく、最後のシルヴィの揶揄するような言葉にわたしは思わずむっとしてしまふ。

「シルヴィ、言い過ぎだ」

見かねたようにイアスがシルヴィを諫める。

「わたし、カレヴィを誘惑なんてしてない」

それに、どつちかって言うത്それは逆なんだけど。

盛んに好きだ、愛してるって言うてくるのはカレヴィだし。

でもシルヴィはわたしに敵愾心を露わにしてるし、言っても信じてもらえそうにない雰囲気だ。

「兄王に政務を疎かにさせたり、婚礼前から莫大な金額を使わせた
りすれば充分ですよ」

「それは……」

それを言われると、わたしは黙るしかない。

確かに傍目にはわたしがカレヴィをたぶらかしてるように見える
だろう。

「シルヴィ、ハルカ嬢にはそんな意思是全くないよ。今回の件は完
全にカレヴィの暴走だ」

いつの間にかわたしを追いかけていたのか、リットンモア公爵が不
意に現れた。

あ、わたし思わず彼を殴っちゃったんだっけ。

……まさか、わたしに仕返しをしに追いかけてきたとかなないよね。
殴られても仕方ないようなセクハラしたのはあっちなんだし。

思わずひきつった顔で公爵を見ると、彼はにっこりと笑って言っ
た。

「女性に拳で殴られたのは衝撃でしたよ。……まあ、このお礼は後
でしましょうか、ハルカ嬢」

ひいっ、完全に根に持たれてるよ！

わたしはムンクの叫びよろしく両頬を挟んで声にならない声を上

げる。

「……殴られた？ ひよつとして、兄の婚約者にもう手を出したのか、アーネス」

呆れたようにシルヴィが公爵を見たけれど、肝心の彼は肩を竦めてなんでもないことのように言った。

「ちよつとハルカ嬢に手を撫でさせてもらっただけだよ。……それに、あんな無防備な発言をされたらつい手を出したくもなるよ」

「……あなたは王の婚約者だというのに、誰彼構わず誘っているのか」

ちよつ、シルヴィに軽蔑したように見られたよ！ それ、もの凄い誤解だつて！

「誘つてないっ」

わたしは声を大にして主張したけど、まだシルヴィは胡散臭そうにわたしを見る。

「おまけに、その時のハルカ嬢の反応がまた可愛らしくて……」
「いよいよシルヴィのわたしを見る目が蔑んでくる。」

「ちよおつとおおー！」

わたしは恥ずかしさも手伝って涙目になって叫んだ。

「そんな可愛い顔で見ないでください。思わず抱きしめたくなくなってしまっじゃないですか」

そう言いながら公爵の手が伸びてきて、わたしは思わず後ろに飛びすさつてしまった。

すると、わたしは誰かにぶつかって抱き止められた。

「兄上、ハルカ様をからかわれるのはそれくらいにして差し上げてください。ハルカ様が引いてますよ」

あ、ぶつかつたのイアスだったんだ。

「ご、ごめんね、イアス」

イアスの腕から出てわたしが謝ると、彼は首を横に振った。

「いいえ。今のは兄が悪いですし、ハルカ様が謝られる必要はありません」

「ハルカ嬢に飛び込まれて、おまえは役得だしな」

「な、なにを言っているんですか、兄上！」

真つ赤な顔で突然イアスが公爵に反論したのでわたしはびっくりした。

シルヴィも大袈裟なくらいの反応を返したイアスを驚いたように見ている。

「イアス、その反応はなんだ。まさかこの女のことが好きなのか」

「それは……」

イアスに赤い顔で見られて、わたしもついつらられて赤くなる。

「しょ、初対面だし、そんなことがあるわけないでしょう？」

うう、いつたいなんだこれ。

喪女だったわたしには分不相応すぎる話題だ。

やつとのことですう言ったのに、公爵は笑って簡単にそれを否定してくれた。

「それはハルカ嬢が知らないだけだよ。イアスは結構前からハルカ嬢のことを気にしていたけれどね」

「兄上っ！」

更に真つ赤になったイアスが公爵に叫ぶ。

それをかわすように、実に楽しそうに公爵は笑った。

わたしはといえば、シルヴィと同じようにただ呆然とするしかない。

なんなの、この展開。

わたしはイアスと会ったのはこれが初めてだし、いつたいなにがなんだか。

それにイアスはどこでわたしを見たんだ。

あ……、それに公爵は以前からって言ってたけど、イアス、わたしの普通顔も見てたってことだよな？

それでこの反応ってなに？

もしかして、イアスってカレヴィ以上の物好き？

いきなりのモテ期到来にわたしは呆然としながらイアスを見る。
すると、彼は焦ったように早口で言ってきた。

「こ、これは僕が勝手にあなたを想っているだけです、ハルカ様はどうかお気になさらないください！」

こ、これって、完全に告白っていうやつだよ……？

気にするなって言われても、やっぱり無理。イアスを意識しちゃって、自然と顔が熱くなっちゃうよ。

「う、うん、ごめんね。突然のことで驚いたけど、わたしを好きになっけてくれてありがとう……」

う、言いながら無茶苦茶恥ずかしくなってきた。

わたしはこの間まで喪女だったんだよ、こんな展開に慣れなくっても仕方ない。

そう思いながら、わたしは熱くなった両頬を押さえて俯いた。

38話 一番良い方法

「は、はい……」

そう言うイアスの顔は、わたしが俯いてるため見えないけど、たぶん彼も赤くなってるんだろうなあと予想。

なんだかお見合いのような空気の中、公爵はくすくす笑って、意味ありげにわたしを見た。

「ハル力嬢は本当に可愛らしい。……カレヴィやわたしと三つも歳が上とはとても思えないな」

……だから、可愛いなんて言われ慣れてないんだからやめてほしい。

そう言おうとして、わたしははた、と気がついた。

今、公爵わたしの歳をさりげなくばらしたよね？

それって、わたしを好きだって言ってたイアスにはショックじゃないんだろうか。

と想ってイアスを見たら、特に驚いている様子はない。

あれ……？

「ひよっとして、わたしの本当の年齢を知ってたの？」

恥ずかしかつたのも忘れてした問いに、イアスは真面目な顔で頷いた。

「はい、兄から聞きました。ティカ様と同年だそうですね」

それでわたしのこと好きって、イアスって物好きって言うよりも変人……？

いくらでも可愛い女の子が選り取りみどりそうなのに、歳がたぶん十は離れた冴えないわたしを好きになるって、どう考えても普通じゃない。

わたしがイアスに対して失礼なことを考えていると、公爵がたし

なめるように言った。

「イアス、あまり女性の歳のことを言うものじゃないよ」
いや、事の発端は公爵、あなただから。

「アーネスが最初に言い出したんだろうが」
呆れたように腰に手を当ててシルヴィが言う。

「ああ、そうだったね」
のほほんとそんなことを言っている公爵にわたしは呆れかえって
しまう。

「絶対わざとでしょ、公爵」

「公爵はよそよそしいのでやめてください。アーネスでいいですよ」
まあ、特に親しくする気もないけど、本人がそう言っているんだ
し、わたしは頷いて了承した。

「アーネス、ひよつとしてわたしの歳のこと周りに言って回ってる
の？ いろいろと都合が悪いから、できればやめてほしいんだけど」
本当の歳が知れたら、夜の習いの前に身が清らかだったか周りに
疑われかねないし、ちよつとまづい。

でもまあ、今となつてはカレヴィの習いを受けた身でもあるし、
それなりの言い訳もできるだろうけど。

「カレヴィのごく周辺しか知らせてないから大丈夫だよ。ハル力嬢
は安心してほしい」

……まあ、その範囲だったらずくはないだろうけど。そんなこ
と言うなら、最初からばらすなつての。

「一応、二十歳つてことになってるから、その辺りは本当に気をつ
けてね。カレヴィにもそんな歳の女を王妃にするのかって追及が行
くかも知れないし」

わたしが真剣に言うのと、アーネスはその眉を上げた。

「そんなことは、カレヴィには痛くも痒くもないよ。むしろそうだ
な、君がカレヴィの婚約者でなくなるの方が痛いかもしれぬ」
「え……、やっぱり、王妃にするにしては歳が行きすぎてるのがま

「ずくて？」

年齢詐称は確かにいけないけれど、当のカレヴィがそんなに気にしている訳じゃなかったから、わたしもそのことはあまり気にならなかったんだよね。

元々、この婚約には政略的な要素が強かったし。

「いや、カレヴィが君に溺れすぎているのがまずいんだ。このままの調子で行くと、元老院から女に溺れて政務を疎かにした無能な王という烙印を押されてしまう可能性が高い」

「元老院……？」

なんか元の世界でも聞いた単語だな。

「頭が固くて、いろいろと難癖をつけたがる年寄り集団だ。……奴らの地位が無駄に高いのが厄介だな」

それまで黙っていたシルヴィが鼻の頭に皺を寄せて言った。

「うわ、本当に嫌そう。よっぽどその元老院での嫌ってるんだな。」

「その厄介な集団に早くも目を付けられてしまったのが、まずかったかな。今日辺り、カレヴィのところに元老院からその抗議書が回ってくると思う」

「え……」

わたしは愕然として、目の前のアーネスの顔をまじまじと見つめてしまった。

だから、アーネスはカレヴィにわたしを奪うとか、挑発的なことを言ったの……？

「婚約期間中の執務の滞りはある程度目を瞑られるけれど、今回の場合は婚約期間中に離宮建築の為に巨額が動いてしまったのが痛かったな」

アーネスから聞くことは、初めてのことばかりで、わたしはうろたえるしかない。

事態がそんな大事になってるなんて知らなくて、わたしは思わず震えてしまった。

「イアスが心配そうに「ハルカ様」と声をかけてきたけど、わたし

はアーネスから目を離せなかった。

「そ、それ、放っておいたらどうなるの……?」

「カレヴィが黙って抗議書を受けるとはならないだろうし、下手したら彼は元老院に王座から引きずり降ろされる可能性がある」

「う、うそ……」

わたしと婚約したせいで、カレヴィがそんなことになるだなんて、信じられない。

そんなに元老院の意見は王の地位も危うくさせるほど強力なんだろうか。

「嘘じゃない。あなたが現れたせいで兄王の立場が悪くなったんだ」
呆然とするわたしをシルヴィが睨んで責めてくる。

そうか、そういう経緯があるなら、彼はわたしに敵意を持っているんだ。

「シルヴィツ」

イアスが諫めるように彼の名を呼んだけど、シルヴィはそれに反応しなかった。

確かに彼の言葉は真つ当だ。わたしは彼に詰られても文句は言えない。

いくらでもわたしはカレヴィを説得できる立場にいたのに、今までそれをほとんどしてこなかったんだから。

「……まあ、彼が今までこれ以上なくらいに政務に励んでいたのを知っているだけに、わたしはそんなことには絶対させないけれどね」

アーネスが言うように、確かにカレヴィは今まで良い王様だったんだろう。

わたしに会うまでは執務に明け暮れてたっていうし、自分の結婚は政略でいって割り切ってたくらいなんだから。

「……わたし、どうしたらいいかな? わたし、カレヴィの邪魔になりにたくないよ」

今までの破格的な待遇を考えると、本当にわたしの存在自体がカレヴィに悪いとしか思えない。

継るような気持ちでアーネスを見ると、彼は少し溜息をついた。

「君には欲なんてないのに、本当に君は人がいいね。……カレヴィが君にそこまで入れ込むのも少し分かる気がする」

「……そんなことないよ」

そんなにいい人だったら、きつともつと彼の立場を考えてた。

カレヴィに申し訳なくて、泣きそうになるのを心の中で叱咤しながら、わたしはアーネスの次の言葉を待つ。

……多分、彼がこのことに対して一番いい解決方法を持っていると思うから。

皆の視線を受けたアーネスは顎に手を当てて少し考え込むと、やがて言った。

「さっきも少し触れたけれど、一番良い解決策はある。……君がカレヴィの婚約者を辞退することだ」

39話 花嫁争奪戦

わたしがカレヴィとの婚約を辞退する……？

わたしは半ば呆然としながら、目の前のアーネスを見た。

彼はふざけた様子もなく、真剣な表情をしている。

「でも、そうしたらこの国と千花との繋がりがなくなっちゃうよ。一応、政略のための結婚だし」

そう。

カレヴィが最初なんとも思っていないわたしとの結婚に乗り気だったのは、そういう理由があったからだ。

わたしは過去にも比類無き最強の魔術師である千花のたぶん一番の友人だ。

そのため、わたしの政治的利用価値はかなり高い。

自分で言うのもなんだけど、それをみすみすこの国が見逃すとは思えない。

「その点なら大丈夫だ。君がこの国の有力貴族なりと婚礼を挙げれば、国益は充分にある」

「……そうなの？」

なんだ、結婚するのは王様以外でも大丈夫なの？

よく分からなかったけれど、そういうものなんだろうか。

「ああ。それなら、兄に次ぐ地位の俺があなたの相手としては一番いい」

「えっ!？」

いきなりシルヴィがそんなことを言い出したのでわたしはびっくりして聞き返してしまった。

「……なんですか、その反応は。俺じゃ不満ですか？」

どうやらわたしの態度が彼の機嫌を悪くさせてしまったらしく、

眉を顰めてシルヴィが尋ねてきた。

「う、ううん、そうじゃないけどー……」

「けど、なんですか」

言いよどむわたしはシルヴィにすかさずつつこまれる。

う、シルヴィに睨まれてるよ。

……仕方ない、正直に言ってしまうおう。

「だってシルヴィ、わたしのこと嫌いでしょ？ それにわたしよりだいぶ年下そうだし。……そんな女と結婚するの嫌じゃない？」

わたしがそう言ったら、シルヴィがちょっと驚いたように瞳を見開いた。

「……別に嫌ってませんよ」

「嘘。わたしのこと、カレヴィを誘惑する女って言ってたじゃない」
あれはどう考えたってわたしのことを嫌っているようにしか取れないぞ。

「それは……」

わたしがむっとしてシルヴィを見ると、彼は少しばかりうるたえていた。

「まあ、ハルカ嬢、そんなにシルヴィを苛めないでくれないかな」

「ええ？ どっちかって言うと、苛められたのはわたしの方でしょ？」

なんで、わたしが苛めたことになるんだ。

アーネスに窘められるように言われて、わたしはまたむっとする。

「……申し訳なかった。俺が言い過ぎました」

プライドが高いとばかり思っていたシルヴィが謝ってきたのでわたしはびっくりして彼をまじまじと見てしまった。

シルヴィはわたしから目を逸らすようにそっぽを向いてたけど、その頬は赤く染まっていた。

あれ……、ひょっとしてシルヴィって、ツンデレ？

わたしがそう思っただけでシルヴィをじつと見つめていると、彼はその視線に耐えきれなかったようで赤い顔で叫ぶように言った。

「なんですか、そんなにじろじろ人の顔を見ないでください！」

「あ、ごめんごめん」

わたしはにへら、と変な笑いを返すと、内心で身悶えた。

うおお、ツンデレ萌ええ〜！

シルヴィの頭を今凄くグリグリしたいけど、実際やったら怒られるだろうから我慢我慢。

わたしが両手の拳を握ってふるふる震えていると、イアスはわたしが怖がっていると勘違いしたらしく、すまなそうに謝ってきた。

「すみません、シルヴィに悪気はないんです。ただ、少し感情表現が不器用なだけで」

「あ、うん、分かっているよ。シルヴィはただツンデレなだけだよね」
わたしがそういうと三人はそれぞれ顔を見合わせた。

……あれ、ツンデレってここにはない言葉？

似た表現があれば、大体は千花の言語魔法でなんとか通じるんだけど。

「……俺が、ツンデレだと？」

シルヴィがさっきのわたしみたいにふるふる震えて言った。

ひよつとして、こっちの世界ではツンデレってまずい意味の言葉なのかな？

急に不安になったわたしは、別にまずい意味で言ったんじゃないよって三人に説明してみる。

「うん、ツンツンデレデレのツンデレ。こっちにはツンデレって言葉はないの？」

「いや、ありますよ。なんでもティカ様が広めた言葉だそうです」

「へえ、そうなんだ。千花が」

イアスがそう言うてくれたので、わたしはほっとした。
言うっちゃいけないような言葉じゃなくて本当に良かった。

けど、なんだって千花はそんなピンポイントな言葉を広めたんだ
ろ。

そう思っで首を捻っていると、アーネスがおかしそうにくすくす
笑いながら言った。

「なるほど、シルヴィはツンデレか。ハルカ嬢はうまいことを言う
ね」

「俺はツンデレなんてものじゃない！ それにいつ俺がデレデレし
たっというんです」

相変わらず赤い顔でシルヴィはわたしに詰め寄ってくる。

「あー、うん。デレデレはしてないけど、ツンツンしてるのに照れ
屋なところがツンデレ属性かなーと」

うん、こういうタイプはいずれ好きな娘にデレデレしちゃうんだ
よ、きつと。

「シルヴィにツンデレなんて言ったのは、たぶんハルカ嬢くらいだ
ね」

おもしろそうにアーネスがわたしとシルヴィをそれぞれ見て笑っ
た。

まあ、確かに王弟殿下にツンデレなんていう人はまずいないか。

「うん、でもシルヴィがツンデレ属性なのはいいね。弟にしたい」
そう言ったら、シルヴィにあからさまにむっとされた。

「……俺は、あなたに結婚の話をしていたのに、弟とはなんですか」

「あ、そうか。そうだよね」
思わずツンデレ萌えして話が逸れちゃったよ。

でも、カレヴィと結婚していれば義弟になるはずだったのに実に
もつたいない。

けれど結婚するにしても歳が離れすぎてるし、元の世界だったら
これって犯罪じゃない？

それにこんな大事なことを勝手に決めちゃうのも、わたしを好きでいてくれるカレヴィに悪いし、正直わたしの頭の中はぐちゃぐちゃだ。

……他力本願だけど、誰かうまいことを話をまとめてくれないかなあ。

ああ、こうなってくると、千花にも話をしなきゃいけないんだ。

わたしがそんなことを考えていると、ふいにアーネスが言った。

「確かにシルヴィイとは歳が離れているし、ハルカ嬢がいきなり男として見るのは難しいかもしれない。それならわたしもこの争奪戦に参戦しようかな」

はい？ 争奪戦ってなんのこと？

ぐるぐる回る頭でわたしがアーネスを見ると、ふっと甘く微笑まされた。

が、枯れているわたしはそれくらいじゃびくともしない。

「兄上、ずるいですよ。それなら僕も参戦します。……歳は離れているかもしれませんが、ハルカ様に男として見てもらおうように僕は努力しますよ」

冷静そうないアスが少しむきになって言うのを聞いてわたしはやつと気がついた。

えええ、争奪戦って、花嫁争奪戦　つまり三人でわたしを奪い合うってことだよな？

カレヴィが知らないところでいきなりこんな話になっちゃって、なんかまずくない？

40話 泥沼

「ちょ、ちょっと待ってよ。そんなの、カレヴィに悪いよ」

わたしは勝手に盛り上がる三人を慌てて制止した。

自分で言うのも恥ずかしいけれど、わたしはカレヴィに溺愛レベルで好かれているし、そんな彼を無視する形でこんな重要な話を進めるのはとてもまずい。

「わたしはカレヴィにいろいろお世話になってるの。彼との婚約はまずいから後釜見つけてきた、みたいなのは嫌だよ」

それに、こんなこといったいどんな顔してカレヴィに言ったらいいわけ？

これじゃ、カレヴィが可哀想すぎるよ。

「だが、このままではカレヴィが退位することになる。君はそれでもいいのかい？」

「それは……」

そう言われてしまうと、わたしはなにとも言えなくなってしまふ。

なんかわたしって凄く疫病神だ。

わたしが胸元をぎゅっと掴んで下を向いていると、ふいに聞きなれた声がした。

「……黙って聞いていれば、まったく勝手なことを」

カレヴィ！

わたしがただ驚愕に瞳を見開いて彼を見つめっていると、カレヴィはわたしを抱き寄せてきた。

「ハルカ、おまえもおまえだ。あんな言葉に惑わされるやつがあるか」

「うん、ごめんなさい。でも……、カレヴィ執務はどうしたの？」

わたしがそう言つと、彼は一瞬しまったという顔をした。

「……抜けてきた。おまえが部屋を飛び出した後をアーネスが追いかけていったということを聞いてな」

「カレヴィ駄目じゃない。仕事しなきゃ」

だから元老院に政務を疎かにしているなんて言われちゃうんだよ。むうつとわたしが軽く睨むと、カレヴィはひきつった笑いを浮かべた。

「だが、俺がここに来てよかつただろう。そうでなければ間違ひなくおまえはこの三人に流されていたぞ」

う、それを言われちゃうと当たり前すぎているだけになにも言えない。

「けれど、元老院からハルカ嬢との婚約を解消するようにと文面が行つただろう？ カレヴィ」

今まで聞いたこともないような冷ややかな声でアーネスがそう言う、カレヴィの体が少し強ばった。

「……ああ」

こつやつてカレヴィが肯定するつてことは、わたしの存在が彼の居場所を脅かしているつていうのは本当なんだ。

「カレヴィ。わたし、あなたの荷物になりたくないよ。わたしだったら婚約解消してもいいから」

「ハルカ、黙れ。俺はそんなことは認めない」

カレヴィが怖い顔で言ってくるけど、わたしは黙らなかつた。

「駄目だよ。このままだと、あなたが今まで積み上げてきたもの全部駄目になっちゃうよ。わたし……んうっ」

そこまで言つたところで、わたしはカレヴィに無理矢理唇で口を塞がれた。

そしてわたしは三人の前でさんざん唇を貪られ、息も絶え絶えになる。

本当にこんなことやってる場合じゃないのに、とわたしは恥ずか

しさも手伝って涙目になってしまっ。

やっとカレヴィのキスから解放された時には、わたしはまともに立っていられなくなってしまっていた。

その場にくずおれそうになるわたしを無理矢理奪う形でシルヴィが受け止める。

「あ……」

なにか言おうとしても頭の奥が痺れていて、言葉が出てこない。

「シルヴィ、なにをする。ハルカを離せ」

ぐったりとシルヴィに寄りかかるわたしを見てカレヴィが顔をしかめたけれど、これはわたしの意思じゃなくてあくまでもカレヴィがキスしたせいなんだから誤解しないでよね！

「嫌です。このままだとあなたはこの人を寝室へ連れこんでよからぬことをするつもりでしょう？」

シルヴィのその言葉に、わたしは思わず目が点になる。

「……いやいや、いくらカレヴィでもそこまでは……」と思っていたら、当の本人が黙り込んだ。

なに、カレヴィ本当にこんな昼間っからやるつもりだったの？

やっぱりカレヴィは野獣だ。

わたしが冷たい目で睨むと、カレヴィが焦ったように言った。

「ハルカ、そんな蔑んだような目で俺を見るな」

「……いや、いくらなんでもそこまでは思っていないけど。」

そう言おうとしたら、目の前にアーネスが割り込んできた。

「元老院から注意が行っているにも関わらず執務をさぼろうとするなんて、カレヴィいい度胸だね」

「おおかたハルカ様に八つ当たりをするつもりだったのでしょうか？」

陛下、最低ですね」

うわあ、いい人そうだったイアスまでカレヴィ相手に毒舌を振るってる。

伊達にアーネスの弟やってないってことかあ。

わたしはびっくりしながらカレヴィが三人の反撃を受けるのを見ていた。

と、止めるべきなのかな、これって。

でもカレヴィはわたしを寢室に連れこむ気満々だったらしいし、どっちに味方するのかちょっと考えてしまっ。

だけどカレヴィの気持ちを考えたら、確かに可哀想だし、わたしは本当にどうしたらいいんだろう。。

そんなことを考えてシルヴィの腕の中でおろおろしていたら、涼やかな声が辺りに響いた。

「一体なにをしているのです、カレヴィ王。それに皆様方」

「千花！」

凜として立つその姿は明らかに周囲とは隔絶された特別な存在で、相変わらず美女然とした千花の登場に、わたしは心の底から喜んだ。

うん、やっぱりこういう時に一番頼りになるのは千花だよね！

41話 劇薬

それから、わたし達はちよつとしたやりとりの後、とりあえず会議をする大部屋みたいなところに移動することになった。

そこには中央に重厚で大きなテーブルがドンと置いてあった。

ちなみにカレヴィのやるべき執務は、宰相の今マウリスが励んでいるということだ。さすがに決裁はさせないみたいだけど。

「結論から言います。カレヴィ王はここはひとまず引いておいて、はるかとの婚約解消をした方がいいです」

千花がはつきりとそう言ったことで、カレヴィ以外の三人の男性はそら見るといったような顔でカレヴィを見た。

けれど、カレヴィは惘然として、どう見ても納得していない。

「……ハルカはそれでいいのか」

「う、うーん。この場合、仕方ないと思う。わたしはカレヴィに退位してほしくないし」

「……そうか」

それを聞いて、一気に顔色が暗くなるカレヴィにわたしは慌てていった。

「で、でもね！ 婚約者ではなくなるけど、王妃候補になることはできると思うんだ。……その間にカレヴィは政務に励んで元老院を見返してやればいいんだよ！」

わたしが必死になって言うと、それに千花が頷いてうまくフォロイを入れてくれた。

「そうすれば、ハルカが王の障害と言われることはなくなりますね。

……ああ、それから離宮建築の件は既にマウリス殿に言って着工を中止してあります」

千花、仕事が素早すぎる。

内心で惚れ惚れしていると、カレヴィは「そうか」と頷いた。

さすがにこうなつては、離宮には手を着けられないと諦めたのだらう。

「ハルカは王妃候補になつてしまふのか……。しかし、しばらくは王妃の間に留まるのだらう?」

「それでは、元老院の意を疎かにしたと受け取られかねない。ハルカ嬢はなるべく早く居室を移動した方がいい」

「そうか……」

アーネスがはつきりとそう言ったことで、カレヴィが目に見えてしょんぼりしている。

あああ、慰めたいけど、こういう場合は止めておいた方が賢明なんだろうな。

「じゃ、じゃあ今日一日だけわたし、カレヴィと過ごすことにする。

……それくらいならいいでしょ?」

わたしが周りを見回すと、みんなも仕方なさそうに頷いてくれた。

「まあ、今日一日くらいなら」

「仕方ないですね」

もしかして反対を受けるかもしれないと思つていたから、これは本当によかった。

わたしはみんなの同意を受けられたことでほっとする。

さすがに、元老院に反対を受けたからいきなり態度を翻すような真似はしたくないし、それじゃあまりにもカレヴィが可哀想だしね。

「そうだね、それで別れを惜しむといいよ」

「別れじゃない!」

アーネスにからかわれて、カレヴィが憤慨して椅子から立ち上がった。

ああもう、こんな分かりやすい挑発に引つかかっちゃって。

してやったりと、くすくすとアーネスがおかしそうに笑っている。

「これで、カレヴィが我慢とか覚えてくれれば、いつか頭の固い元

老院もわたしとの仲を認めてくれるよ。……わたしが言うのもなんだが変だけど、カレヴィ頑張ってるね」

「……ああ」

わたしはなるべく力付けるように言っただけなんだけど、対するカレヴィは寂しそうな顔で微笑んだ。

確かにすごく残酷なことを言ってるような気がするけど仕方ない。わたしは今現在カレヴィに恋愛感情はないし、これくらいしか言えないよ。……ごめんね。

「……それにしても、俺はそんなに辛抱が足りないか？」

カレヴィのこの言葉に周りの人間は思わず苦笑した。

なに、カレヴィ自分で自覚ないの？

なら、わたしがここで引導を渡しよう。

「はつきり言っただけ、まったくない」

わたしの言葉に少しの間、落ち込んでいたカレヴィだけど、事が決まったことで覚悟が決まったらしく、結局は婚約解消を受け入れた。……ただ、わたしを王妃候補とすることは条件に入れていたけどね。

そこで一応会議はお開きとなってみんな退席していったんだけど、わたしは千花に呼び止められて、なにかと思っただら一応避妊薬を飲んでおくように言われた。

……なんでも、やけになったカレヴィが既成事実を作ること無理矢理わたしを王妃にかつぎあげることも考えられるからだそうだ。……でも、この期間中はカレヴィ避妊薬飲んでるって言ってたけど」

「普通のは効力は一日だけで、今日飲まなければいつでもできるよ。」

用心にこしたことはないから」

いくらカレヴィでもそんなことしないって！ と笑い飛ばそうとしたけれど、衣装採寸の時の暴走例があるからわたしは千花の言葉に素直に従っておくことにした。

わたしが今カレヴィの子供を妊娠しちゃったりしたら、それこそ元老院を刺激しかねないからだ。

「はるか、飲んで。それは三日くらいは効いている強力なやつだから」

千花がどこからか出してきた薬の包みを開けて、それを水で流し込む。

……これでひとまずカレヴィが暴走しても彼の子供ができることはない。

わたしはほつとして、薬の包みとグラスを千花に返すと、出してきた時と同じように千花はまたそれをどこかへとしまった。

「ごめんね、はるか。カレヴィ王はもうちょっと冷静な人だと思っただけ」

千花がすまなそうに謝ってくるのをわたしは体の前で両手を振って否定した。

「うっん、千花が謝ることはないよ。カレヴィが実はああいう人で楽しかったことも事実だし」

「そう……？」

千花はまだすまなそうにわたしを見てくるけど、本当に気にしないでほしいな。

こんな事態になったのは千花の想像外の出来事だろうし。

「おい、ハルカ。そろそろいいか？」

女同士の話があるからと言って扉の前で待たせていたカレヴィが待ちくたびれたように顔を出した。

「あ、うん、ごめん。話はすんだから」
心配そうな千花の視線を受けながら、わたしはカレヴィに返事をする。

とりあえずは、今日でカレヴィの婚約者という立場は終わりなんだ。

できるだけ、今日は彼の期待に添えるようにしよう。

わたしはこんな事態になったことへの申し訳なさに少し胸が痛んだ。

もしかしたら、カレヴィとずっと穏やかに過ごすことができないやりようがあったかもしれない。

でも、実際はそうはならなかった。

こんなことになった原因の恋という感情はわたしはまだ知らない。でもこれはとんでもない劇薬なのかもしれないのかもしれないな、と感じながらわたしはカレヴィの方へと歩きだした。

42話 選択肢

結局、本日のカレヴィは昼食から自由放免ということで、この後は四六時中わたしと一緒にいることになった。

わたしに求婚を申し出たシルヴィやアーネス、そしてイアスは「今日ばかりは退散しますよ」と言っていて、居室までは付いてこなかった。

千花も「明日様子を見に来るから」と心配そうに帰っていった。

まあ、それは当然のことかもしれないけれど、わたしとしては彼らにいてもらった方が良かったかもしれない。

なにせカレヴィはわたしから離れたがらないから、悪いけど鬱陶しくてしょうがない。

「ほら、ハルカ。食べる」

食事を皿に取ってくれるのはいつものことだけれど、食べさせるのはさすがにやりすぎだと思う。

でもそれも今日一日だけのことだし、どことなく寂しそうなカレヴィを見ていると嫌とは言えなくて、わたしは流されるままカレヴィに食べさせられていた。

「……ハルカは俺に食べさせてくれないのか？」

うっ。

期待に満ちた目で見られて、わたしは思わず変な汗を流してしま

う。
そ、それは、わたしにまた「はい、あーん」をやれってことだよ
ね？

正直恥ずかしいのでやりたくはなかったけど、さっきカレヴィに
食べさせてもらった手前、断るわけにもいかない。

こ、こんなのは今回だけだからね！
晚餐は絶対に断るんだから！

わたしはそう心に決めると、切った鶏肉をフォークに刺し、カレヴィに食べさせた。

「……そんなに嫌そうな顔をするな。分かった、もうさせない」
う、そんなに顔に出たのかな……？

確かにもの凄く恥ずかしくはあったんだけど。

「ご、ごめんね」

嫌だという気持ちをカレヴィに気づかれたのがすまなくて、わたしは謝った。

「謝らなくていい。おまえがこういうことが苦手だということを知っていて無理にさせた俺が悪かった」

「カレヴィ、ごめん。ごめんね」

カレヴィのこんなわがままは今日で最後だっていうのに、自分が恥ずかしいからって理由だけで嫌がるなんて、わたし最低だ。

「だから、謝るな。おまえにそんなすまなそうな顔をされると俺がどうしていいか分からなくなる」

苦笑うカレヴィの顔を見て、わたしは俯いてしまう。

ああ、でもこんなんじゃない駄目だ。

カレヴィと一緒に過ごす最後の日なんだからせめて楽しく昼食を取らなくちゃ。

わたしは顔を上げると、さっきの失礼なアーネスの所行についてカレヴィに告げ口してやった。もちろん、その後のわたしの手を撫で撫ではなしの方向で。

「アーネスって酷いんだよ、カレヴィと食べようと思ってたコンソメ味のポテトチップス、勝手にどこからか持ってきて一人で食べちゃったの。わたしも食べたかったのに！」

わたしが憤慨して言うと、カレヴィがちょっと笑って「そうか」と言った。

「今度買ってきた時は一緒に食べようよ。あ、執務に支障のない時間にだけだ」

「そうだな。俺ももつとおまえの世界の菓子を味わってみたい」

カレヴィが嬉しそうに頷いたので、わたしも嬉しくなっただけに笑った。

ああ、だけど今度向こうに買いに行くときは荷物が大変そうだなあ。

シルヴィとかアーネスとかイアスとかにもお菓子振る舞わないといけないだろうし。

「おまえの向こうでの買い物が大変そうだな」

「そうなのっ。お茶菓子出す人数が増えたから……」
いけない。

そこでわたしは自分の失言に気がついて、両手で口を覆った。

それに対してカレヴィはちょっと苦笑しただけだったけれど、内心はどうなんだろう……？

そう思っただけカレヴィを窺っていると、ふいに彼が言った。

「俺も、あいつらと同じくおまえの求婚者という立場になるのだな」

わたしはカレヴィに言われて、初めてその事実気がついた。

「で、でもわたしはカレヴィの妃候補でしょ？」

わたしが慌ててそう言うと、カレヴィはちょっと肩を竦めた。

「あいつらにとってもそうさ。シルヴィにとってもおまえは妃候補だし、アーネスやイアスには正妻候補だ」

「え……」

信じられないことを聞いて、わたしは思わず目の前のカレヴィの顔をまじまじと見てしまった。

「わたし、もう清らかじゃないのに正妻候補なの？」

てっきりもう身が清らかじゃないから、愛人とかそんな感じにな

るとばかり思ってたんだけど。

「ああ。王の婚約者だった者を虐げるような地位に据える者などいないぞ。その点だけはおまえは安心していい」

「そうなんだ……」

とりあえず、誰の者になってもわたしの安定が脅かされることはないってことか。

これって、千花との繋ぎもあるし、どこでも安心して趣味の漫画が描けるってことだよな。

だけど、それでもわたしはカレヴィのところに戻るけどな。

こうなった最初っからそのつもりだったし。

「……元老院の嚴重注意が解けるのはいつくらいになるの？」

これが分かれば、わたしは一安心なんだけど。

「さあ、いつになるか分からないな。運が良くて一月後か、さもなくば一年か……。もしかしたら、解かれないままかもしれないな」

「えええ？」

カレヴィの無情とも思える答えに、わたしは両頬を覆って情けない声を上げてしまう。

だって、嚴重注意が解かれないままってなんなんだ。

そんなことになったら、わたし心だけじゃなく、身まで枯れちゃうじゃないよ。

「そんなんだったら、わたし、子供産めなくなっちゃうよ」

「だから、おまえの婿候補が他に三人もいる。俺に遠慮することもない、おまえは安心して好きな相手を選べばいい」

さっきまでわたしにベタベタしていたカレヴィとも思えない言葉に、わたしは思わず息を飲んでまじまじと見つめてしまう。

対する彼はわたしと目を合わさない。

好きな相手って……、無理だよ。

初めての相手のカレヴィですらそういつ感情を持たなかったのに、
そんなの無理に決まってるじゃない！

43話 慟哭

「……なに言ってるの？ カレヴィ」

カレヴィの信じられない言葉にわたしは思わず席を立つ。

「……ハルカ、食事中だ。座れ」

「でも！」

納得できないわたしはもちろん座るつもりなんてなかった。

「座れ」

有無を言わせない迫力で、カレヴィはわたしを無理矢理座らせた。こんな時に王様らしい威厳を見せるなんて反則だ。

「わたしは、あなたの妃になるためにここにいるんだよ。それなのに、簡単に他の人に鞍替えするみたいなことできないよ」

「すまない、ハルカ」

さっきの気迫とは一転して、急に下手に出たカレヴィにわたしはむかっとしてしまった。

さっきはさすが王様でちょっとかっこいいと思ったのに。

「謝ってもらっても困るよ。わたしだって一応覚悟つてものをもつてあなたに身を委ねたんだよ。わたしのその気持ちはどうなるの？」

わたしがそう責めると、カレヴィの顔が歪んだ。そして、わたしに頭を下げ謝ってくる。

「すまない」

「すまない、すまないって、王なら王らしく、元老院なんか黙らすくらいしたらどうなの？ それくらいしたら、いくらわたしだってカレヴィを好きになるよ！」

「……無茶を言っつな。それに、そんな不確定なことも言っつな」
「う……」

確かに、カレヴィが元老院をどうにかしたとしても、わたしが彼を好きになるかは分からない。むしろ今と同じ可能性の方が大きい。

わたしが俯いて唇を噛んでいると、ポンと頭にカレヴィの手が乗った。

「おまえがおれのために操を立てようとしてくれているのは嬉しく思う。だが、国のためにはこれが一番いいんだ」

「……そう」

カレヴィは王様だから一番にザクトアリアを優先するのは分かる分かるけど……。

わたしはカレヴィの手を振り払うと、再び立ち上がった。わたしを気遣ってくれているであろうカレヴィに対して態度悪いけど、構ってなんてられなかった。

「ハルカ、食事中だぞ」

カレヴィがわたしの非礼に顔をしかめて見上げてくる。

「いらぬ。わたし、自分の部屋に戻る」

視界の端にカレヴィが傷ついたような顔が映ったけれど、もう知らない。

わたしはいつもカレヴィと一緒に食事を取っていた共同の間から走り去ると、一気に自分の寝室のベッドに沈み込んだ。

「カレヴィの馬鹿あつ！」

今まで我慢していた涙を流しながら、ここにいないカレヴィに悪態をつく。

ひどい、酷いよカレヴィ。

離宮建築やら、執務やらに対してあまり強く言わなかったわたしも悪いけど、こんな事態になったのはそもそもカレヴィのせいなのに。

わたしは王妃になる覚悟だっと思っていたし、その勉強もしていた

んだよ。それを……、彼は全部ぶち壊したんだ。

「カレヴィのばか、あほ、まぬけ！」

ぼすぼすとわたしは感情のままに羽枕を殴り続ける。

すまないけれど少し待っていてくれって言うてくれれば、わたし待ったのに。

わたし、そう言うてくれるの待っていたのに。

「ハルカ」

ふいにカレヴィの声とともに、肩に手を置かれて、わたしはびっくりしてしまった。

……お願いだから、放っておいてほしかったのに。

「なにしに来たの？ もう話は終わったでしょ」

わたしはいきなり現れたカレヴィを睨みながら泣いていた。

ただし口元は笑っていて、自分で想像してもなかなか壮絶な笑顔になっていたと思う。

案の定、それを目にしたカレヴィはわたしの肩に置いた手を引き、息を飲んでいった。

「……俺はおまえのことが心配で……」

「心配？ 今更なんなの。わたしは明日この部屋を出て行って、この国と自分に有利になりそうな人を捜すから」

なんだ、こう言うつと婚活と変わらないな。

そう思うとなんだかおかしくて、わたしはくすくす笑った。

「ハルカ、俺は……」

「カレヴィはもうごちゃごちゃ言わないで。あなたは自分からわたしの相手をおりたんだから。もうわたしはわたしで、勝手にやるから」

だからもう出て行ってほしい。
わたしは寢室のドアに視線をやって、無言でカレヴィの退室を促したけれど、彼は出ていかなかった。

「ハルカ、俺は」

カレヴィは苦しそうに顔を歪めて、わたしの肩を掴んでくる。

お願いだからなにも言わないでほしい。

今はもうなにも考えたくなかった。

「俺はおまえを愛してる」

カレヴィに痛いほど抱きしめられたけど、浮かんだのは虚しさだけ。

「だけど、最初から諦めちゃうんでしょ。……だったら、もういい。」

「今更そんな言葉言っただうなるの？ 結局わたしのことを見捨てるくせに」

そう言っただけ、それがことの外しっくりすることに気がついた。

そうか、わたしはカレヴィに見捨てられたんだ。

「見捨ててなどいない！ ハルカ、信じてくれ」

そう、口ではそうとでも言えるよね。

完全に心を閉ざしたわたしは彼に冷たく言った。

「言いたいことは分かったよ。……でももう出て行って。わたしは

明日から忙しくなるんだから」

「ハルカ……ッ、なぜ分からない！」

「……なぜ？ わたしの方が分からないよ。」

要はわたしはいいように利用されたってことですよ。

無理矢理カレヴィに口づけられて、わたしはそれに抗おうと、必死に彼の胸板を叩いた。

それでやっと彼の腕から解放されて肩で息をする。

「ハルカ、好きだ」

こんな告白、聞きたくないよ。

わたしを選ばないくせにそんな勝手なこと言わないで！

「そんな言葉、聞きたくない。カレヴィ、もう出ていってよ。わたしはあなたの望み通り、明日から有力貴族の人と楽しくやるから」

ああ、今のはもの凄く感じ悪いな。

言っただけでもそう感じたし、カレヴィの顔色が変わったこと
でまずいなとも思った。

でも、止められなかった。

「カレヴィはザクトアリアのことだけ考えて、こんなつまらない女より王妃にふさわしい綺麗な姫を見つければいいんだよ！」

44話 はるかを選択

「なんだと……?」

「あ……っ」

カレヴィの形相がみるみる険しくなっていくのを見て、わたしは言い過ぎたことに気がついた。

当てつけみたいに綺麗な姫を後釜にしるとか、自分の口から出たとは思えないほど酷い言葉だ。

「あ……、姫のそこは忘れてっ。こんなゴタゴタの後に選ばれる姫が可哀想だし!」

いくらなんでも、これは人の一生にかかわることだし、カレヴィが万が一その気になっちゃったりしたらまずい。

わたしは慌てて顔の前で手のひらを振ってそれを否定した。

その両手首をカレヴィに掴まれて、わたしはそのままベッドに押し倒された。

少し長めのカレヴィの髪がわたしの頬にかかって少しこそばゆい。

ちょ、ちよつと待って、これって……っ。

「……それは嫉妬か?」

「え……?」

思ってもみなかったことを言われて、わたしは瞳を見開いた。

わたしは彼と少しの間見つめあっていたけれど、やがてカレヴィはくつと笑った。

「そんな訳はないな。おまえは俺のことなどなんとも思っていないしな」

「そんな……っ」

なんとも思っていないことなんてないよ。

少なくとも今回のことはショックだったし。

「だからおまえは俺以外の男とよろしくやるなんて残酷な言葉が吐けるんだ」

途端、カレヴィの端正な顔が苦しそうに歪む。

「う、ごめんなさい。わたし、言い過ぎ……っ」

謝罪の言葉はカレヴィに口付けされて止められた。

「もう、遅い。俺はこれ以上なくらいにおまえに怒っている」

その冷たい表情に、普段はわたしに甘いはずのカレヴィの怒りの片鱗を見てわたしは愕然とした。

……でも、カレヴィだつて酷いじゃない！

「離して……っ！」

わたしは両手を頭の上にとめられて、カレヴィに押さえつけられているため、まともに身動きできない。

こんなの卑怯だ。

好きな相手を選べつていったくせに、カレヴィはこうやってわたしを束縛する。

「おまえは、俺が他の男におまえを渡したいなどと本気で思っているのか」

そう言いながら、カレヴィがわたしの衣装を引き裂く。

「カレヴィ、やめてっ。こんなのやだ！」

カレヴィはわたしを抱く気だ。

わたしから手を引こうとしているのに、こんな扱ってないよ。

こんなの……、まるでわたしの体だけ惜しまれてるみたいで嫌だ！

「おまえの大抵の願いなら叶えただろうが、これだけは聞けないな」

そう言うカレヴィはわたしから衣装を引き剥がすと、わたしを滅茶苦茶に抱いた。

あれから、カレヴィの逆鱗に触れたらしいわたしは、どんなに泣いて懇願しても許してもらえなかった。

カレヴィは本当にわたしを壊す気なんじゃないかと思えて、わたしは初めて彼が本気で怖いと思った。

カレヴィはやるうと思えばこんなに非情になれるんだって今更ながら思い知らされた。

だからわたしを今、物みたいに扱えるんだ……。

そして何回目かに気を失ったところであろうやくわたしは彼から解放された。

遠くなっていく意識の中で浮かぶのは一つだけ。

……ひどい、ひどいよ……カレヴィ……。

ほの明るい部屋の中で、はっと気づけば時間はもう夜中だった。

「う……っ」

カレヴィに滅茶苦茶にされたせいで、腰といわず、全身が痛い。

これは侍女の誰かを呼んで、処置してもらわないといけないレベルだ。

……でも、寝てれば問題ないか。

あんまりモニターカ達の手を煩わせるのも嫌だし。

だれかがいつの間にか着替えさせたのか、わたしは寝間着を着てたし、このまま寝ちゃおう。……そうしよう。

そう思って、シーツを引きかぶって息をついていると、ふいに聞きなれた声があった。

「あ、はるか気がついた？」

あ、千花だ。

そう思った途端に、涙がボロボロと頬を転がり落ちた。

「はるか……」

「千花、痛いよ。治してよ……っ」

綺麗な眉を寄せる千花にわたしは子供のように訴えた。

「うん、分かった……」

千花がいつかやってみたみたいに、わたしに軽く触れた途端、全身の

痛みと倦怠感がなくなった。

「体の痛みはこれで取れたと思うけど……、問題は心の方だね。

……本当にごめんね、はるか。わたしが余計なことしなければこんな目に遭わずにすんだのに」

千花がわたしの傍に縋りついて、すまなそうに謝ってくる。

……でも、ことの発端の千花には不思議と憎しみとかは湧かなかつた。

「……千花は悪くないよ」

「でも……」

千花はカレヴィと結婚について、本当に申し訳ないと思っているらしく、なおも食いついてきた。

だから、もう一度言う。

「千花は悪くない」

「はるか……」

大きな瞳に涙を浮かべて千花はありがとうと言った。

ううん、わたしの方がありがとうだよ。いつもお世話になってるし。

「……でも、ちょっと疲れちゃったかな。向こうで少しゆっくりしたい」

わたしがベッドに横になったままそう言つと、千花が全て分かってるかのよに頷いた。

「うん、そうだね。それがいいよ。向こうでゆっくりと温泉に浸かりにでも行こうか」

「うん、行きたい」

千花に向こうに行く、と言われて、わたしはなぜか凄く泣きたくなってしまった。

「温泉、行きたい……な」

涙が頬を伝う。

それを心配そうに見る青い瞳も、拭う浅黒い指も今はない。

そしてこれからも。

心配そうな千花の視線を受けながら、再び盛り上がってきた涙を無理矢理擦ると、わたしは空元気だけど、ベッドから飛び起きた。

「ね、温泉どこにする？ 楽しみだなあ」

ごめんね、カレヴィ。

わたしは今だけここから逃げる。

失って気づいた初めての恋は、今のわたしには苦しすぎるんだ。だから今だけは無性にあの世界に帰りたい。

あなたは怒るかな。

きっと、怒るよね。役目を放棄したって。

でも、この傷が癒えて再びあなたに会った時、苦しくて仕方なかったんだって言ったらあなたは許してくれるかなあ……。

45話 温泉にて

千花に連れられて元の世界に戻ってきたわたしは温泉に休息しに来ていた。

ちょっと小さめだけど、綺麗な宿でお風呂も素敵だったし、わたしは大満足だった。

「このアワビおいしいーい！ こんなおいしいもの初めて！」
それで今現在、わたしは贅沢にも黒アワビのバター焼きなんかを頂いている。

うーん、肉厚なのに柔らかくて、なんとも言えないうまみが絶品。「そう、はるかが気に入ってくれてよかった」

わたしの向かいには、浴衣姿の千花がにこにこしながらビールを飲んでいる。

ちなみにわたしは、アワビの肝を千花に食べてもらっちゃった。
千花は「おいしいのに、もったいない」って言うけど、見た目グロテスクなんだもん、ごめんね。

わたしもアワビをつまみにビールを一口。
あまりビールは好きじゃないけど、なぜかこういう時はおいしく感じるから不思議だ。

あー、お刺身はおいしいし、こんなの絶対ザクトアリアじゃ味わえないね！ 向こうの人からしたらゲテモノ食いに見えるだろうし。王様のカレヴィなんか、きつと引いちやうと思う。

そこまで考えた途端、わたしを熱っぽく見つめる彼の瞳を思い出して泣きそうになってしまい、わたしは慌てて俯いた。

失恋の痛みはそんなに簡単に癒えるわけじゃない。

その気持ちを紛らわすようにグラスをあおる。

無理矢理飲んだビールはことの外苦かった。

「はあ……」

草木も眠る丑三つ時。

わたしは誰もいない露天風呂に一人で入りに来ていた。

隣の布団の千花がよく眠っていたのは、考えごともしたかったのでちょうどよかった。

もし、千花がわたしがいないことに気がついて、彼女はわたしの魔力を辿れるし、問題ないだろう。

さすがにこの時間だと、お風呂に入ってる酔狂な人はいなかった…… 大きなお風呂を独り占めできる穴場な時間なんだけどね。

そんなわけでわたしは近くにバスタオルをおいて、石造りのお風呂に身を沈めた。

疲れた体にお湯が染み込むようでとても気持ちがいい。

こんなお風呂を独り占めなんて贅沢すぎる。

けれど、人心地ついてからわたしの心の中に浮かぶのはあちらの世界のことだった。

今頃、ザクトアリアはどうなってるんだろう。

カレヴィはわたしに怒ってるよね……。

激高させたばかりだったのに、更に怒らせてどうするんだって感じだけ。

カレヴィはいい加減わたしに愛想つかしたかもね。

役目もろくに果たさないで、逃げだしちゃったんだから。

そこまで考えが行くと、みるみる瞳に涙が浮かんでくる。
わたしはそれをごまかすように湯をすくって顔を洗った。

そんなことを何度か繰り返しているうちに、脱衣所の方から物音がした。

あ……、入りに来た人いるんだ。

そろそろわたし、出た方がいいかな？

でも千花かもしれないし。

わたしはその可能性を捨てきれなかったので、おとなしく湯に浸かったままでいた。

正直、ちよつとのぼせ気味になってたんだけど、やっぱり出てた方がよかったかなあ。

カラカラと引き戸を開けた人物を確認してわたしは思わず自分の目を疑ってしまった。

「ハルカ！」

「カ、カレヴィツ！？　なんでここにいるの？」

「おまえに会いに来た」

わたしが風呂に入っているのは一目瞭然たるうちに、カレヴィは向こうの衣装のままわたしに駆け寄った。

ちよつと、サンダルのままで！

こここの従業員さんの掃除が大変でしょ！

それに、そもそもこの露天風呂は女性専用だよ！

「ハルカ……ッ」

予想に反してとびきりの笑顔で再会したカレヴィは、わたしに両手を伸ばす。

「で、出てけ　っ！　このエロ王！」

バシャンとわたしはカレヴィにお湯をかけるとお風呂から出て、近くに置いてあったバスタオルを体に巻いた。

「ハルカ……！　やはり俺に怒っているのか。悪かった、俺は……」

「いいから出てけ、女風呂に男が入ってくるな！」

なおも言い募るカレヴィをぐいぐい押し出しながらわたしは罵倒した。

「女、風呂……？」

そこで、ようやく自分の居場所を把握したらしいカレヴィは、まずい、と顔に書いて慌ててそこを出ていこうとした。

「あ！　まず、そのサンダルを脱いで！　脱衣所に土足で上がらないでー！」

……まあ、これは既に遅いかもしれないけど、被害が拡大するよりはしました。

素直にサンダルを脱いで、バスタオルを巻き付けたわたしとともに脱衣所の方にカレヴィは引き返したけれど。

「　痴漢ですか、カレヴィ王」

浴衣姿で仁王立ちする千花の迫力にわたしは思わずびびってしまった。

わたしですらそんなだから、当のカレヴィは相当だろう。

見ると、カレヴィは冷や汗をかいていた。

「い、いや、けしてそうではない。誤解だ、ティカ殿」

「はるかの入浴中に忍び込むなんていい度胸ですね。あなたがはるかにしたことを考えたら、こんなことはできないはずです。恥を知りなさい！」

うう、怒った千花、怖い。

いや、わたしのためを思っ言ってくれてるのは分かるんだけど、なんだかわたしまで怒られてるような気になってきたよ。

「す、すまないティカ殿」

「謝るなら、まずはるかに誠心誠意謝るのが先でしょう！ それがないんです、はるかの入浴中に忍び込むなんていやらしい。あなたは実は王でなくて獣なんですか！」

いよいよエスカレートしていく千花の説教の中にカレヴィが獣っていうのがあったので、わたしは思わず頷いてしまった。

それをカレヴィが横目で恨めしそうに見てくるけど、実際痴漢と疑われても仕方ないことをしたんだし、ある意味自業自得だ。

「はるか風邪ひくといけないから着替えてきて。……わたしは、まだカレヴィ王に用があるから」

「うん、分かった」

たしかにいつまでもバスタオル姿でいるのは湯冷めして体に悪いし、それになにより、さつきからカレヴィがわたしの方を見て鼻の下伸ばしてるみたいなんだよね。

「ハ、ハルカ……ッ、俺を置いていくのか」

「カレヴィ、大袈裟。ただ着替えるだけだよ」

捨てられた子犬のように見てくるカレヴィをわたしはあっさり見捨てて脱衣所に向かった。

その途端、千花のお説教がまた始まった。

うわあ、ご愁傷様。

自分で見捨てておきながら、非情にもわたしはそんなことを思う。

うん、でも今回はカレヴィの自業自得だから仕方がない。

まったくもって、痴漢行為はよくないことだ。

46話 カレヴィの選択

「ほんつとに信じられない！ 女風呂に侵入するなんて、カレヴィの痴漢、変態っ」

「ハ、ハルカ……」

あれからわたしの着替えが終わり、千花のカレヴィへの説教が一段落したところで、わたし達は千花の魔法で泊まっている和室部屋へと移動した。

そして、カレヴィを卓の椅子に座らせると、その向かいにわたしと千花が座した。

そういうわけで、今は千花と交代してわたしがカレヴィを説教している。

対するカレヴィは耳の垂れたわんこみたいにしょぼんとしている。「それくらいじゃ生ぬるいよ、はるか。再起不能になるくらい、もつとこき下ろしてやらなきゃ」

おおお、千花が本気で怒ってるよ！ マジで怖い！

……でも千花の言うことももつともかも。

わたしも彼には精神的、肉体的に酷い目に遭わされたしね。

あれはわたしにも非があるとしても、まだあの傷は癒えてないんだぞ。それをこの世界でゆっくりと癒そうとしたのにどうしてくれる。

「そつだね……」

どう罵倒してやるうかとわたしは顎に手をやって考える。

……うーん、でもそうしていてもうまい言葉が見つからない。

人をこき下ろすにも、どうやら才能がいるようだ。

わたしが悩んでいるのをどう取ったのか、落ち込んでいたカレヴィが卓に両手をつけて深々と頭を下げてきた。

「本当にすまなかったハルカ。おまえに酷いことをした上に、怯えさせるような真似をして、これ以上なんと謝っていいか分からない」

「ちょっと王様なんだから、そういうことやめてよ。それにあれは怯えるっていうか、びっくりしたただけだし」

「というか、あまりのことに唾然とし過ぎて怯える間もなかったというのが本当のところだ。」

「そ、そうか！」

わたしの言葉に、カレヴィは途端に元気になって顔を上げた。

とても嬉しそうにしちゃって、王様の威厳もなにもあったもんじやない。

「……生ぬるい」

千花がぼそつと呟いてちょっと空気がひんやりしたけど、カレヴィに確認したいこともあったので、あえて聞こえない振りをした。ごめんね、千花。

「……ところで、どうやってここにきたの？ 異世界に移動する魔法って難しいって聞いたけど」

だから現れるはずのないカレヴィを見た時は本当に驚いたんだよね。

「ああ、それなら説明できるよ。たぶんカイルの手を借りたんでしょ」

あ、カイルって千花の。 。
「そうだ、カイル殿の力を借りた。彼ならおまえの魔力を辿るのも訳はないからな」

頷きながらそういうカレヴィはだいぶ普段の王様っぽい顔になってきた。

「……もう復活しちゃったか。やっぱり千花の言っとおり生ぬるかっただかなあ。」

「でも、カイルさんってガルディアの人でしょ？ そんな人をどうやって動かしたの？」

「それはもちろん、国家権力を使ってだな……、な、なんだハルカ、その蔑んだような目は」

正しくはわたしだけじゃなくて千花もだよ。

「あつきた……。元老院が目を光らせている時に元婚約者に会いにくためだけにそこまでやる？」

思わずわたしはカレヴィの無謀さに啞然としちゃったけど、彼はあまり気にしてないらしく、ひたすら笑顔だった。

な、なんかむかつく。

元老院のせいでいろいろ振り回されたのも手伝ってわたしはちょっとむっとしてしまった。

「元婚約者ではないぞ。おまえはまだ俺の婚約者だ」

「え」

内心でカレヴィをどうへこましてやるうかと算段していたところに爆弾発言をされてわたしは瞳を見開いた。

「でもカレヴィ言ってたじゃない。わたしは他の人を選んでいって」

あまりのことに動揺したわたしは、彼の顔が見られなかった。すごく嬉しくて泣きそうだったからだ。

「……確かに言った。だが、俺にとっては血を吐くような言葉だった」

……そうなの？

わたしがカレヴィを呆然と見返すと、彼はまじめな顔で頷いた。

「だから、それが一番よいとは分かっているけど、ティカ殿の案には乗れない。……俺はハルカだけは離せない」

カレヴィの真剣な言葉を受けて、千花が溜息をつく。

「仕方ないですね。わたしはなるべくそちらの政治には介入しない方がよいと思ったのですが。けれど、はるかのためを思えばこれが一番よいですね」

……どうやら、二人の間では話がついたようだ。

でも、これは夢？

あの日、決定的な破局が訪れたと思ったのに、わたしはこの気持ち
をカレヴィに告げていいのかな……？

わたしは浮かんでくる涙をあの時望んだようにカレヴィに拭われ
る。

「ハルカ、泣くな。俺がおまえに非情なことをしたことはいくら詫
びても足りないし、おまえが俺を嫌っても仕方がないと思っている
が……」

嫌いどころかその逆だよ！

心底すまなそうに顔を歪ませるカレヴィに、わたしは胸がいつば
いになりながらも首を横に振った。

「ううん、そうじゃないの」

「そうか……？」

どこか不安そうにわたしを見てくるカレヴィにわたしはもう一度
言う。

「そうじゃない」

「……そうか」

カレヴィはふっと笑ってわたしの頭に手をおくと、わたしのくせ
のある髪を何度も梳いた。

わたしは彼にされるがままにカレヴィの顔を見ていた。……うう
ん、彼から目が離せなかった。

「……ハルカ。もしかしたら俺は王でなくなるかもしれないが、そ
れでも俺のものになってくれるか……？」

それを聞いた途端、涙がわたしの頬を伝って、卓の上に置いてい
た手の甲にぱたぱたと落ちる。

それはわたしが一番欲しいと思っていた言葉だった。

だから、わたしは泣き笑いをしながらもカレヴィに伝える。

「……はい、喜んで」

それを聞いたカレヴィが卓を回り込むと、感極まったようにわたしを抱きしめた。

わたしは彼に襲われたときの恐怖を思い出して、ちょっとだけびくつとしてしまったけれど、自分を叱咤してなんとか震えを収めた。

「……まだ、俺が怖いかな？」

わたしを抱きしめながら、やや不安そうな声音でカレヴィが聞いてくる。

「ううん。わたしはあなたのこと好きだから、大丈夫だよ」

わたしがカレヴィにしがみつきながらそう言つと、一瞬周りの時間が止まった。

47話 告白の後に

「……それは本当か!？」

わたしから少し体を離して、信じられない、というようにカレヴィが聞いてくる。

「うん、わたしはカレヴィが好き。愛してる」

言い慣れない言葉を言ってしまったことで、わたしは凄く照れくさくなってしまった。

愛してるなんて、まさかわたしが言うことになるなんて思ってもいなかったよ。

「ハルカ……!」

それで感極まったらしいカレヴィは、痛いほどわたしを抱きしめる。

ちよ、ちよっと、カレヴィ苦しいよ。

「カレヴィ王、はるかが苦しがってます。少しは手加減してください」

遠慮するようにちよっと離れた場所にいる千花がそう言ったことで、わたしははっと我に返った。

うわあ、千花の前でこんな恥ずかしい告白するなんて、穴があったら入りたい! あ、そこに敷いてある布団に潜り込んでもいいけど。

「ああ、ティカ殿か。すまない、気をつける」

この言い方だと、カレヴィも千花の存在を忘れていたらしい。

げに恐ろしき恋の魔力。

気持ちを抑える必要がないと認識した時点で周りが気にならなくなるなんて怖すぎる。

「あ、千花ごめんね。カレヴィにはもう向こうに帰ってもらってから」

千花もわたしも睡眠時間足りてないし、悪いけどカレヴィにはご帰還頂こう。

「ハルカーツ!? おまえは、俺のことを好きなんじゃないのか!？」

案の定カレヴィがわたしの愛を疑うような眼差しを向けて絶叫してきた。

「……カレヴィ、こんな時間に近所迷惑だよ。静かにして」

わたしが冷静に言っていると、カレヴィは金魚みたいに口をパクパクさせた。

わたしはそんなカレヴィに体を寄せて、ちよつと甘えてみる。：

…千花が傍にいるからちよつと恥ずかしかったけどね。

「……もちろん好きだよ。でも、カレヴィも向こうに仕事残したままでしょ。来た時間も悪かったし、ここに泊めるわけにもいかないから強制送還」

女二人に男一人(野獣一頭)で、ここの布団に寝る訳にもいかないしね。

「しかし……っ」

わたしを抱き寄せながら、カレヴィは不満たらたらだ。

「ごめんね、わたしもカレヴィと一緒にいたいけど、それじゃあなたのためにならないから。……あ、それから、わたしが向こうに帰るのは明後日だから」

「おまえは、俺と一緒に帰ってくれないのか!？」

「だから、カレヴィ騒がしいってば」

うーん、告白は早まったかな。向こうに帰ってから改めて言えばよかった。

カレヴィの聞き分けのなさにわたしが困っていると、千花が心得たように言った。

「はるか、大丈夫だよ。この部屋に防音魔法を施したから」

「あ、ありがと、千花」

うーん、さすが千花は気が利くなあ。カレヴィも少しは千花を見

習ってほしい。

わたし達より年下っていつてもいい大人で、なにより王様なんだから。

「だって、カレヴィ無理矢理あんなことするんだもの。少しは温泉でゆっくり癒したっていいじゃない。こっちじゃないと日本食味わえないし」

「……まあ、体の方はすっかり千花に癒してもらったんだけど、これは秘密にしておこう。」

「日本食というのはないが、温泉なら向こうにもある。おまえがそんなに疲れているのならおまえの部屋に温泉を引いてもいいぞ」

「カレヴィ？」

わたしがわざと区切って名前を呼んだことでカレヴィは自分の失言に気づいたようだ。

「い、いや、今のは忘れてくれ。悪かった」

うん、分かればいいんだよ。

第一、この発端はカレヴィの離宮建築だからね？

それがまた、わたしのために温泉引くとかやりだしたら本当に目も当てられない。

「とりあえず、おみやげ買って帰るから、楽しみにしてて」

向こうではあんこは珍しいだろうし、おみやげは温泉まんじゅうでいいかな。

みんなの分も合わせて大量に買わなきゃいけないから、結構大変かも。あんこ物は重いし。

その辺りは千花がなんとかしてくれるかもしれないけどね。

「……分かった。おまえの帰りを待っている」

凄く不満そうだけど、カレヴィがようやく納得してくれたみたいなので、わたしはほっとした。

「ごめんね。向こうに帰ったらカレヴィの執務に影響出ない程度にはいちゃいちゃしていいから、それまで我慢してね……？」

願うようにカレヴィを見上げてそう言うと、カレヴィはわたしの唇にキスしてきた。

「分かった。おまえといちゃいちゃできるのを楽しみに待っている」

こ、これは恥ずかしい！

自分で言ったことだけど、カレヴィの口から改めて聞くと顔から火を噴くほど恥ずかしかった。

「なんだ、恥ずかしいのか？ 可愛いやつだな」

わたしが赤面したことで調子を取り戻したららしいカレヴィがわたしをからかいながら、またもキスしてくる。

……いや、だから千花が傍にいるんだって！

「ち、千花！」

これ以上カレヴィに調子づかせると手に負えないから、もう千花に任せよう。

「うん、分かった。それではカレヴィ王、向こうにお帰り頂きます」

「……もうなのか？」

残念そうにそう言うと、カレヴィはわたしから体を離れた。

「では、またなハルカ。……愛している」

「うん、わたしも 愛してる」

まじめな顔で言われるとなぜかじんとしてしまって、わたしは目に涙を浮かべてしまった。

「では、カレヴィ王」

「ああ」

千花の言葉に呼応した途端、カレヴィの姿がふっと消えた。

……今までそこにいたのがまるで夢みたいだ。

カレヴィの消えた場所をしばらく見つめていると、千花がわたしの肩をぽんと叩いた。

「はるか、明日の朝食食いつぱぐれるのも嫌だから、早く寝よ」

「うん、そつだね」

なんと言つても向こうではなかなか味わえない日本食だ。絶対食べたい。

そんな訳で、わたしは早速布団に入った。

その途端、ものすごい睡魔が襲ってくる。

「おやすみ、はるか」

……うん、千花、おやすみ……。

翌朝。朝方近くに眠りに就いたものの、わたしはすっかりと目が覚めた。

千花とわたしは朝の支度をすませてから、朝食を準備してある小部屋まで仲居さんに案内してもらった。

「わー、おいしそう！」

真新しいあじの干物が焼けるおいしそうな匂いを嗅いで、わたしのお腹がくうと鳴った。

おひつに入った炊き立てのご飯をお茶碗に盛って、豆腐と天然わかめの味噌汁をまず頂く。

うーん、この出汁は養殖物じゃなかなか出ないね。わかめ自体の歯ごたえもいい。

で、炊き立てご飯を一口。

その途端にご飯の甘みが広がって、ああ幸せ。

お新香はきゅうりとなすのぬか漬け。これも程良く漬かっておいしい。

それからメインのあじの開きに取りかかる。

うー、塩加減抜群の上に、脂がのってて最高！

出汁巻き卵もおいしいし、味海苔や納豆まである。

「はるか、凄く幸せそう」

千花がにこにこしながら、小鉢の納豆をかき混ぜている。

「うん、幸せ。千花、ここに連れてきてくれてありがとね！」

こんなことカレヴィには聞かせられないなと思いつつ、わたしはおいしいご飯を口にする。

ああ。あっちの世界のカレヴィに食事が口に合うかは分からないけれど、もし一緒にこの世界に来た時は、この宿に今度こそ泊まれるといいなあ。

48話 解けた誤解

温泉旅行から帰ってきたわたしは今、千花の移動魔法で王妃の間
にいた。

千花は向こうで買ったわたしの大量のおみやげを置いていくと、
わたしもいったん帰るね、と家というか屋敷に帰っていった。

……いろいろ忙しいのに振り回しちゃったみたいで申し訳ないな。
本当、いつもありがとうね、千花。

「……ただいま」

役目を放棄して向こうの世界に逃げちゃったことでちょっと気ま
ずかったけど、わたしは勇気を出して、王妃の間に入ってきたソフ
ィアに声をかけてみた。

「……まああつ！ ハルカ様、お帰りをお待ちしていましたわ！
陛下に早速お知らせしませんと」

色白の頬を染めて、ソフィアはわたしの帰還を凄く喜んでくれた。
……どうやら、役目放棄してちょっと向こうに行っちゃったこと
はあまり気にされていないようだ。

もしかしたら責められるかもしれないと思ってたから、これは本
当にありがたかった。

わたしがほっと一息ついている間にソフィアがカレヴィに報告に
行ってくれた。

この時間だと、カレヴィは執務かな。
なんか邪魔しちゃって悪いなあ。

でも、このくらいはマウリスにも許してもらえるよね。

「ハルカ……ッ！」

ソフィアから報告を受けたらしいカレヴィは、凄い速さでわたしの部屋に現れた。

……あ、前にドアをノックするように言ったのに、カレヴィ忘れてるな。

でもまあ、こんな時に指摘するのもなんだから、今回は見逃そう。

「カレヴィ」

わたしは一日半ぶりに会う彼に向かって微笑んだ。

ああ、会えて嬉しいな。

わたしがドキドキする胸を押さえていると、カレヴィに体を浚われた。

「ハルカ、ハルカ……！」

カレヴィの熱っぽい声は聞き慣れているはずんだけど、彼への想いを自覚してしまった今はドキドキが止まらない。

わたしはなんとか彼の体に挟まれた腕を抜き取って、カレヴィの背中に回した。

その途端、カレヴィの体がびくつとした。

……あれ、驚かしちゃったかなと思っただけれど、わたしはまず彼に謝ることにした。

どんな理由があるにせよ、勝手に向こうに帰っちゃうのはまずいものね。

「カレヴィ、ごめんね。わたし……っ」

言おうとした言葉はカレヴィの唇によってかき消された。

「ん、ん……っ、カレ、ヴィ……ッ」

口腔内に彼の舌が侵入してきて、恥ずかしかったけどわたしはその動きに応えた。

「は……あっ」

やがて彼の唇が離れていくと、そこに透明な糸が引いているのが見えた。

わたしはそれをぼうつと眺めていたけれど、もう立っているのさえ精一杯。

わたしがカレヴィに寄りかかると、彼はわたしを抱いて、応接セツトの長椅子に腰をかけた。

そうすると、自然とわたしも彼の膝の上に乗ることになってしまった。

「ハルカ……」

カレヴィはわたしの脛に口づけると、頬や唇にもキスしてきた。うう、別に初めてじゃないんだけど、なんだか凄くドキドキする！

「あ、あのねっ、カレヴィ。わたしあなたに謝りたいんだ。いきなり向こうに帰ってしまったって、ごめんなさい！」

ようやくカレヴィのキスの嵐が一段落したところで、わたしは勢いよく頭を下げた謝った。

「……ああ、あれか。あれは焦ったぞ。おまえがもう帰ってこないかもしれないと思ってな」

だからカレヴィ、国家権力まで使ってわたしを迎えに来たんだ。現れたのが女風呂だったから、つつい彼に酷い対応しちゃった

けど、あの時わたしはもつと彼の話の話を聞くべきだったかもしれない。……本当にごめんね。それなのに追い返しちゃって」

しゅんとしてわたしが言うと、カレヴィはわたしの頭を撫でた。「いや、結果的にあれでよかったんだ。すぐに戻ったから、それが

元老院にばれることもなかったしな」

「あ、そうなんだ……」

それはよかった。これ以上カレヴィの立場が悪くなるのはまずいものね。

思わずほっとしてカレヴィに笑いかけると、今度は彼に頬をキスされた。

「それにしても、おまえはいつ俺のことが好きになっただんだ？ 俺

は全く気がつかなかった」

ちよつと悔しそうに言うカレヴィにわたしはちよつと躊躇したけど、覚悟を決めて本当のことを言うことにした。

「自分の気持ちに気がついたのはね、あなたに滅茶苦茶にされた後だよ。あなたをあんなに怒らせたわたしは、もうあなたと顔を合わせることも少なくなるのかなと思っただらとて寂しくて、それで自分の気持ちに気がついたんだ。……でも、他の人を選べって言ったあなたに告白しても失恋するだけだと思っただし、だからあなたに会うのがつらくて逃げ出しちゃったんだ。……ごめんね」

あの時の苦しさを思い出してわたしが涙ぐんで言うと、カレヴィは眉を寄せて、わたしの目元を拭った。

「……悪かった。俺はおまえを肉体的に酷い目に遭わせたただけでなく、精神的にも相当苦痛を与えていたんだな」

「で、でもわたしもカレヴィをたくさん傷つけたと思うから、悪いのはあなただけじゃないよ。……けど、あんなことはもう二度としないでほしい。あれは女にとっては相当ショックなことなんだよ」

わたしがそう言うと、カレヴィの顔が見る見るすまなそうに歪んだ。

「ハルカ、本当にすまなかった。もう二度とあんなことはしないと誓う」

「本当……？　お願いね？」

「ああ」

カレヴィが力強く頷いたので、わたしはほつと息をついた。

「……あの時はカレヴィ以外の人を選ぶつもりなんてなかったから、あなたにそうしろって言われてすっかり動揺しちゃって。だからあんな、他の人と楽しくやるなんて酷いこと言っちゃったんだ。本当にごめんなさい」

あの時のことを思い出すと彼に凄く申し訳ないと思う。

わたしが深々と頭を下げると、カレヴィはふつと自嘲的に笑った。「そうだったのか。……俺も馬鹿だな。自分の気持ちばかり考えて、

おまえの気持ちまで思っただけで済まなかった。すまない」

「ううん、もういいよ。あの時はどっちもどっちだったし。もうこれ、この話題は終わりにしよう？ ……あ、そうだ。わたしおみやげ買ってきたんだ。一緒に食べようよ」

わたしはちよつと重苦しくなってしまうた空気をほぐそうと明るく笑って言う。

「ああ」

すると、それにカレヴィが優しく笑い返してくれた。

思わずキュンとしてしまって、わたしはそれをごまかすようにカレヴィの膝の上から慌てて降りた。

「ソフィア、悪いけど緑茶淹れてくれるかな？ あ、それと後でおみやげみんなにも配るからね」

「かしこまりました。本当に楽しみですわ」

嬉しそうに笑って、ソフィアがお茶の支度をしてくれる。

そしてソフィアは、わたしが日本から持ってきていた日本茶を教えたと手順通りに急須から湯飲み淹れてくれた。

緑茶のセット、念のために用意しておいて良かったあ。

やっぱりあんこ物には緑茶が一番だしね。

おみやげの温泉まんじゅうもお茶受けに出してもらったし、これで準備は万端だ。

「向こうの菓子か、どれ」

早速カレヴィがおまんじゅうを一口ぱくり。

そして次には、不思議そうな顔をして中身のあんこをまじまじと見ていた。

「あれ、おいしくなかった？」

「いや、そんなことはないが、初めて食べる味だったのでな。この黒いのはなんだ？」

「あんこ。小豆を甘く煮詰めて作るんだよ。……無理そうだったら、わたし食べるけど」

わたしが手を出すと、カレヴィがお茶受けをわたしの魔手から逃した。

……なんだ、結構好きなんじゃない。

わたしはうまいと言いながら温泉まんじゅうを食べるカレヴィに内心萌えながら、わたしもおまんじゅうを一つつまむ。

うん、吟味して買ってきただけあって、やっぱりおいしい。

「また、これを買ってこい、ハルカ」

「ええっ？ 無理だよ、これはあの温泉地でしか売ってないもの。そうそう買えないよ」

まさかそんなに気に入ったとは思わず、わたしはびっくりして言い返す。

すると、そうか、とカレヴィが少しがっかりしたような顔になった。

う、そんな顔されたら、困っちゃうよ。わたし、わたし……っ。

「 分かった。千花と相談してまた買えるようにしてもらおうよ」

「そうか。そうしてくれるか」

結構甘い物好きなカレヴィの嗜好にばっちり当てはまってしまった温泉まんじゅう。

それがまた食べられると聞いて、カレヴィは顔を綻ばせる。

う、なんだか可愛いぞ。

なんて思うわたしは既にカレヴィと同じく末期なのかもしれない。

とりあえず、双方の誤解は解けたみたいだし、ひとまずはこれで安心かな。

まだ元老院というラスボスが待っているけどね。

でも、大丈夫。

カレヴィと一緒になら、きっとわたしも戦える。

それに、なんと行ってでもわたしはザクトアリアの未来の王妃なんだからね。

49話 三人の訪れ

二人の間にわだかまっていた誤解は解けた。

ほんわかした気分で時折いちゃいちゃしながらお茶をしていたわたし達だけど、それが終わるとカレヴィはきちんと執務に入っていた。

ちよつと寂しいな。

ぼつんと一人残されたわたしはカレヴィの温もりの残る唇へと手をやった。

なんとなくカレヴィがわたしを構っていた気持ちが分かった気がして、わたしは溜息をつく。

なんだか気が抜けて、長椅子に座って少しの間ぼーっとしていたら、ソフィアがシルヴィ達の来訪を告げてきた。

わたしが突然いなくなって、彼らにも心配かけちゃったかな……。悪いことしたな。

でもどんなに心配されようと、わたしが選ぶのはカレヴィだけなんだけど。ごめんね。

「あちらの世界に逃げ帰ったと聞いたのに、なんだ、元気そうじゃないですか」

わあ、部屋に入ってくるなり、いきなりシルヴィの毒舌が。

「そりゃ、元気だよ。カレヴィと仲直りしたもの」

だからこんな毒舌なんか、愛の力で跳ね返しちゃうものね！

…って、恥ずかしすぎるか。

「……そうですか。兄上もこんな荷物を背負うことなどないのに」「うーん、シルヴィもなかなか言うなあ。

「でも、カレヴィ自身がわたしを離せないって言うんだから仕方ないじゃない」

こうやって口にしてみると、これって凄いい台詞だよねえ。

わたしってば、カレヴィに愛されてるなあ、えへへ。

赤くなる頬を両手で隠しながらそんなことを思っていたら、シルヴィにすかさずつつこまれた。

「なに、にやけた顔をしてるんです。気持ちの悪い」

き、気持ち悪いって、仮にも義姉になろうという女に向かって手厳しすぎるでしょ。

わたしがシヨックを受けていると、見かねたようにイアスがシルヴィを諫めた。

「シルヴィ、ハルカ様に言い過ぎだ。せつかくお帰りになられたのだから、僕達はもつと喜ばなければ」

「そうだよ。シルヴィはハルカ嬢が向こうに帰られて相当がっかりしていたじゃないか」

アーネスがそう言った途端、シルヴィは真っ赤になって飛び上がった。

「そ、そ、そんなことはない！」

……そうだったんだ、シルヴィ、口ではこんなこと言っても、未来の義姉のことしつかり心配してくれてたんだね。

本当にツンデレなんだからっ！ 可愛いなあ。

「……まあ、立ち話もなんだから座らない？ わたし、珍しいお菓子買ってきたんだ。食べていってね」

わたしは三人をテーブルに案内すると、その向かいに腰掛けた。

すると心得たもので、ソフィアがちゃんとわたしが買ってきた温泉まんじゅうと緑茶を出してきた。

「……これは？」

茶色のぼこつとした丸い物体が怪しかったのか、シルヴィが恐る恐る聞いてきた。

「おみやげの温泉まんじゅう。味はカレヴィのお墨付きだよ」
わたしがそう言った途端、三人ともなぜかほっとした顔をした。
失礼な。

で、一口食べた三人の感想。

「うまい」

「これはおいしい」

「本当においしいです」

ふふふ、そうでしょう、そうでしょう。

わたしはさつき食べたばかりだから自重しなくちゃいけないけど、
あなた達は遠慮しなくてもっと食べていいからね。

それで三人に、カレヴィの時と同じくこの中身はなんだと聞かれたので、同じように答えておいた。

やっぱりあんこは異世界人には珍しいんだねえ。

「そういえば、ハルカ嬢はカレヴィとうまくいったんだね。彼が思い詰めたようにあちらに行った時はどうなるかと思ったけれど」

「うん、おかげさまで」

アーネスがちょっとつまらなそうに言ってきたので、わたしはにっこり笑い返しておいた。

アーネスやシルヴィは私との結婚にそう乗り気ではなかっただろうけど、真摯に告白してくれたイアスには悪いことしちゃったなあでも、わたしが好きなのはカレヴィだし、こればかりは仕方ない。

「イアス、ごめんね。せつかくわたしのこと好きって言うてくれたのに応えられなくて」

「いえ、ハルカ様はお気になさらないでください。僕はあなたを見ているだけで幸せですから」

そこまで言われると、なんだかちょっと恥ずかしくなってくるなあ。

「イ、イアスはどこでわたしを好きになったの？ 接点がなかった

から、それが不思議だったんだけど」

「実は僕は魔術師なんですよ。それで、時々ティカ様に指導を受けたりしているんです。その経由であなたのことを知りました。……あ、時々僕はハルカ様の護衛もしたりしているんですよ、ご存じないでしょうか」

「え……」

それは初めて聞く話ばかりで、わたしは目を白黒させた。

「それでハルカ様を拝見してて、可愛い女性だなと思ったのが始まりですね」

「そ、そうなんだ……。ありがとう、ごめんね」

わたしが可愛らしいかどうかは置いといて、こんな冴えないわたしでも好きになってくれたのは本当にありがたい。

……でもわたしはカレヴィが好きだから彼の気持ちにはどうあっても応えられない。だから「ごめんね」。

「いいのですよ。僕の失恋は初めから決まっていた。それにあんなに陛下に愛されて、ハルカ様が陛下を愛さない訳がありません」
……うん。ごめんね、イアス。

「……しかし、そうは言ってもこの先元老院の対応を考えると、ハルカ嬢がカレヴィのものでなくなる可能性は高くなるな」

……それは至極もつともな意見だけどさ、アーネス。

わたしもカレヴィも、もう決めただよ。

「わたしはこの先もカレヴィのものだよ。彼が王でなくなってもそう。……約束したんだ」

わたしは胸に手を当てて目を閉じる。

あの時カレヴィとした神聖な約束は、きっと生涯忘れないだろう。

「しかし……っ、それでは兄が王座から引きずり降ろされてしまうではないですか！ あなたはそれで平気なのですか！」

シルヴィが憤慨して立ち上がる。……うん、兄思いのいい子だね。もちろん、平気じゃないよ。だからわたし決めただ。カレヴィ

と一緒に元老院と戦うって」

わたしがそう言つと、三人とも呆気に取られてた。

あれ、これってそんなに荒唐無稽な話かなあ？

「……いったいどうやって元老院を納得させるんだい？」

興味を引かれたように、アーネスが瞳を輝かせてこっちを見てくる。

うーん、あんまり期待されても困るんだけど。

「残念ながら、今のところ無策」

……ちよつとみんな、そんなに呆れたような目で見ないでほしいんだけど。

わたしはこほんと咳払いをすると、三人を見回して言った。

うん、身分の高いこの三人なら元老院のこと知ってるだろうし、

ちよつどいい。今聞いちゃおう。

「わたしは元老院のことなにも知らないし、だからちよつと情報収集しようかなあと。……それで、わたしが元老院の最高責任者に会うにはどうしたらいいのかな？」

50話 元老院

アーネスに教えてもらった元老院の最高責任者の名前はグリード
財政大臣。侯爵家出身だそうだ。

……頭の固そうな人じゃないといいけど、無理だろうな。

それで、わたしは三人を引き連れて、元老院の建物の前にいる。
いや、アーネスだけでいいって一応言っただよ？

ほら、アーネスって大貴族リットンモア公爵様だし、身分的に元
老院の面々に見劣りすることは絶対ないからとも言っただけど、
それでも他の二人は譲らなかった。

「それなら、俺は王弟ですよ」

「ハルカ様を兄上と一緒にすることはできません。万が一、ハルカ
様に手出しをされると困りますから」

まあ、二人の言い分は分かるから、それで一緒に付いてきてもら
ったんだけど、その間のアーネスの愚痴がちよつとうるさかった。

……なんだ、わたしを口説く気満々だったとか？

でもわたしはカレヴィ一筋だからそんなことしても無駄だよ。

それで、元老院の入り口に立っている兵士に、一番身分の高いシ
ルヴィが代表してグリード財政大臣に至急取り次ぐよう命令してい
た。

まあ、シルヴィもこう言うところはさすが王子様で、人に命令し
なれている。

兵士が取り次ぎに行っている間、わたしは疑問に思っていたこと
をみんなに聞いてみた。

「そのグリード財政大臣って、どういう人なの？」

「……まあ、こうなった経緯からも分かるだろうけど、頭の固くて

融通の利かない人物だね。さすがに最高責任者になるだけあって、有能でもあるんだけど。わたしとしては、温厚なヘンリック内政大臣あたりを攻めたいところだね」

聞くところによると、その人がこのナンバー2らしい。

それにしても、アーネスの話のグリード財政大臣がわたし想像通りの人物だったので、わたしは逆に安心してしまった。

まあ、はっきりとした保守派ってことだろうな。

……とすると、異世界の人間を王妃にすることにも内心よく思っていないことも考えられる。

そんなことを考えていたら、さっきの兵士が戻ってきて「どうぞ、お入りください」と言ってきた。

それで建物の中に入ると、品のいい内装で華美なところが全くなかった。

たぶん、最高責任者の影響もあるんだろうな。

……うん、わたし、こういうの嫌いじゃないよ。むしろ、好印象なくらいだ。

「皆様ようこそいらしてくださいました。ハルカ様、わたしは内政大臣のヘンリックです。以後よろしくお願いいたします」

ドアの前で待ち受けていたのは、なんとさっき名前の出てたナンバー2の人だった。

まあ、王弟自らの訪問だから、下手な人が出てこれないんだろうけど。

わたし達に対応するヘンリック内政大臣は、短い白髪に穏やかな緑の瞳のまさに好々爺と言つのがふさわしい人物だった。

きっと頭の固いトップの調整役なんだろうなあとわたしは彼の様子から想像する。

「こちらです」

内政大臣は重厚な扉の前までわたし達を案内すると、その前で警備をしていた兵士に取り次ぐように言った。

するとすぐにいらえがあって、わたし達は部屋に通された。

これがラスボスの本拠地か。

ぐつと拳を握ってちょっと武者震いをしてしていると、一度見たら忘れられないような人物が執務機の椅子から立ち上がった。

「これは、わざわざお越しいただきありがとうございます」
わたしはその人物を目にして思わず息を止めた。

バーコード落ち武者。

それがわたしの彼に対する第一印象だった。

頭はあまり手入れしていないような肩を覆うくらいの黒髪で、てっぺんが禿げていて、ほんの気持ちだけ髪が幾筋か横に流れていた。

……それがまさにバーコードそのもの！

おまけにグリッド財政大臣は強面で、これまたあまり手入れしていないような口髭と顎髭を生やしているもんだから、まさに落ち武者という感じ。

……だからそれらを総合して、バーコード落ち武者。

とは言っても、ここで理解してくれる人は皆無だろう。

ああ、千花がいれば、きっと同意してくれるだろうに。

わたしは凄く笑いたかつたけれど、必死で口を押さえてぶるぶるしていた。

「……わたしの顔を見て吹き出すのを堪えている方は初めてです、ハルカ様」

本人にそう言われたことで、わたしは堪えきれずについ吹き出して、大声で笑ってしまった。

男共がわたしの笑いを収めようと、名前を呼んでくるけれど、もー駄目、ツボにはまっちゃって笑いが止まらない！

「すっ、すみませ……っ、わ、たし、失礼……っで……」

財政大臣がむっとしていているけど、初対面でこれだけ笑われれば当

然の反応だろう。本当にすみません、失礼で。

「……今すぐその笑いを止めないと、君の唇を塞ぐけど、いいかな」
見かねたアーネスがわたしを抱き寄せて強硬手段に出てきたので、わたしはようやく笑いを収めることができた。……ついでに彼の顎をまた殴ってしまったけど。

「あなたは随分と落ち着きがないな！ それに男の顎を殴るなんて淑女としてはしたくないでしょう」

ようやく平常心を取り戻したわたしに、シルヴィが怒ってくるけど、はい、ごもつともです……。

「……それであなた方の用向きはなんなのです」

騒がしかった室内にようやく静寂が訪れたところで、わざとらしくグリード財政大臣は尋ねてきた。

……わたし達が訪ねてきた理由は分かっているだろうに、なかなかこの大臣はいい性格をしているらしい。

「わたしとカレヴィ……陛下との婚姻を元老院に認めていただきましたくてこの度参りました。……どうかご承認ください」

「ふむ」

わたしのその言葉を聞いて、財政大臣は少し考え込むような様子を見せた。

「……まあ、立ち話もなんですから、どうぞおかけになってください」

「あ、わたし、おみやげ持ってきたんです。どうぞお食べになってください」

ようやく持ってきた温泉まんじゅうの存在を思い出したわたしは、はっとしてグリード財政大臣にそれを差し出した。

「これは、ご丁寧にもありがとうございます。……そういえば、ハルカ様はここ二日ばかり向こうの世界に逃げ帰っていたとか聞きました、まさかそんなことはあるわけはありませんな」

それでわたしは思わずぎくうつとしちゃったけど、なんとか平静を保つてすつとぼけることにした。

「……まあ、それはいいじゃないのことでしょう？ あれは陛下に少しばかりの里下がりの許可を頂いただけですわ」

礼儀作法のシレネ先生に教わった淑女の微笑みで、わたしは嘘八百を並べ立てる。

他の三人の呆れたような視線が気になるけど、後でカレヴィと口裏合わせればいいんだよ！

まあ、とりあえず食べ物で買収、できるかどうかは分からないけど、一応の礼儀は通したぞ。

でも、初対面でやらかした爆笑のことは忘れてくれ……ないだらうな、やっぱり。

侍女にテーブル席へ案内されたわたし達は、言われるままにそこへ腰掛けた。

そしてその正面に、グリード財政大臣とヘンリック内政大臣が座った。

「さて、先ほどのハルカ様がおっしゃられた願いですが」

侍女が一通りお茶の支度をした後で、グリード財政大臣がおもむろに口を開いた。

そしてそれは、わたしが予想した通りの言葉だった。

「陛下が今の地位にある限り、あなた様との婚姻は到底認められませんが」

51話 元老院2

……やっぱりこうくるか。

でもわたしはそれに従うわけにはいかない。

まあ、そう言う理由は大体分かってるけど、念のため確認しておこう。

「それはどうしてですか？ わたしがこの国の最高権力者である陛下に嫁することで、ザクトアリアと最強の魔術師との繋がりが強化されるはずですが」

「確かに政略の道具としては、あなた様は大変魅力的に映りますな。しかし、陛下に絶対的な権力があるだけにあなた様は猛毒です」

このおっさん、本人を前にして堂々と道具って言ったよ！

……けど、わたしが猛毒ってどういうこと。

「離宮建設は中止になったはずですよ。今回のことで反省されたのか、今は陛下は真面目に執務に励んでいますし、なにが問題なのですか」
わたしがグリード財政大臣の顔を真剣に見つめると、彼は少し溜息をつきながら言った。

「それは、こちらが抗議をしたからでしょう。……しかし、婚礼をあげてからも同じことが何度も起こっては国としてはかainいせん」
まあ、財政大臣だけにお金の出入りには敏感なんだろうけど、それってわたしが莫大な金をつぎ込ませる女だって、元老院に認定されてるってこと？

「わたしが彼にそんなことをさせません」

「……しかし、陛下はあなた様が気乗りしないのを承知で離宮建築を進めたではないですか。あなた様がどんな慎ましい方でも、陛下はあなた様に珍しいもの、豪華なものを与えたがらないと誰が断言できるのです」

「それは……」

この財政大臣、わたしが建築に気乗りしてなかったことまで把握

しているのか。

そこまで分かっているの発言は重みがあつて、わたしは思わず口ごもった。

「あなた様自身にその気がなくても、陛下はいずれ国を傾けてしまう。そうなつてしまつては手遅れなのです」

「それは、ハルカ嬢が傾国の美姫になる可能性が高いということかい」

傾国の美姫つてなに？ 間違つてもわたしはそういう柄じゃないから……とは思うものの、わたしは自分が国を傾けてしまうかもしれないというのがシヨックで言葉も出ない。

「端的に言えば、そうですね。陛下はハルカ様に溺れすぎています。しかし、それは国の最高権力者としては致命的なのです」

なるほど、アーネスが前にカレヴィが王座を引きずりおろされる可能性があると言つたのはこういうことだったんだ。

「しかし、兄王ほど政務をとれる者などいないぞ。……実際あの量をよく捌いてると感心するほどだ」

カレヴィに心酔しているらしいシルヴィが気分を害したように顔をしかめて言つ。

まあ、敬愛している兄を致命的とまで言われれば、彼が怒るのも無理はない。

「……そうですね。確かに陛下ほど政務を捌ける方はおられません。だからこそ、我々も陛下を退位させるわけにはいかないのです」

そこまで言つて、グリード財政大臣はわたしを見た。

「我々としてもこれは苦渋の決断なのです。……ハルカ様、酷なことを申しますが、王妃とられるのは諦めていただきたい」

「そ、そんな……」

あまりのことにわたしは動揺を隠せなかった。

せつかく、想いが通じ合つたのに。それ全部、諦めなくちゃいけないの……？

「ハルカ様……」

イアスが気遣わしげにわたしの顔を見てくる。

……わたしはそんなに心配そうに見られるような顔をしているんだろうか。

「……その場合は、我々がハルカ嬢の相手に名乗り出ても元老院は構わないのだね？」

ちよつと、アーネスこんな時になに言ってるの？

それじゃ話が元に戻っちゃうじゃない。

けれど、わたしがアーネスをきくと睨んでも、彼に堪えた様子もない。

「はい、構いません。むしろ好都合というものです」

元老院としては、国のプラスになれば、私の相手が誰でも問題ないということなんだろう。

それに、国王という最高権力者でもなければ、そうそう巨額は動かせないからね。

でもわたしは。。。

「わ、わたしはカレヴィのことを愛しています。彼以外の方のものになるなんて考えられません」

泣きそうになるのを堪えて、ようやくそれだけ言うつとわたしは俯いた。

「しかし、それでは国が傾くと何度言えば分かるのです」

グリード財政長官が聞き分けのない子供を叱るように言った。

うん、言いたいことは分かるよ。分かるけど。。。

わたしはいよいよ涙を抑えられなくなり、慌ててハンカチを取り出して目元に当てた。

「まあ、グリード。必ずそうなると決まったわけではないし、女性にそう強く言わなくても。……それに、そうした場合、最愛の女性を奪われたことで、逆に陛下が悪政に走る可能性もありますよ」
今まで黙っていたヘンリック内政大臣が発言したことで、重苦しかった室内にほっとしたような空気が流れた。

「……けれど、彼の言っていることも結構カレヴィには厳しい内容だ。」「では、どうすればいいのだ」

むっとしたように財政大臣が、内政大臣を見ると、彼はしばし考ええるように口元に手を当てた。

「そうですね……。ならば、婚約期間を更に一月延ばして様子を見ましようか。……それに異論はありますか、グリード」

「……いや、ない」

グリード財政大臣が渋々彼の意見に頷くのを見て、わたしは思わず目をパチパチさせてしまった。

ナンバー2の地位にあるといっても、実はそれはトップのそれと大差ないのかもしれない。

それからわたし達は話がまとまったところで、元老院で昼食を取らせてもらった。

そこで話されたのは、婚礼延期を対外的にどう発表するかとかだった。

まあ、これは最終的にカレヴィが決定することだろうけど。

あ、千花と家族には言っておいた方がいいか。婚礼が延びたって。

……ああ、本当に凄く残念だ。

わたしがしょんぼりしていると、ヘンリック内政大臣が慰めるよう

に言ってきた。

「そんなに気を落とされなくてください。わたし達も元老院の他の者の説得に努めますから」

「は、はい」

国を傾けると懸念されているのに、ここまで言うてくれてるんだ。カレヴィとの仲が引き裂かれなかっただけでも、儲けものじゃない。

わたしも変に落ち込むのはやめよう。

……それに元老院の人がそう悪い人物でもないってことも分かったしね。

「……しかし残念だな」

鶏肉のソテーを切り分けながら、アーネスがつくづくという風に言った。

「え……、なにが？」

「依然、君はカレヴィのものだ。もう少し、グリード財政大臣は頑張ると思ったのだけだね」

それを聞いて、わたしは仰天した。

なに、わたしとカレヴィの仲を取り持つために付いてきてくれた訳じゃなかったの？

「そう期待されても。噂に違わず策士ですな、リットンモア公爵」
呆れたようにグリード財務大臣がアーネスを見た。

「いや、なかなかハルカ様の周りは華やかですねえ」

なにが嬉しいのかヘンリック内政大臣がにこにこしてる。……この人も温厚そうに見えてなかなかのくせ者だ。

「君がその気になったら、迷わずわたしの胸に飛び込んできていいのだよ」

シルヴィとイアスの冷たい視線を浴びているにも関わらず、アーネスはすました顔でわたしを口説く。

「おあいにく様。わたしは身も心もカレヴィのもんですから！」

あかんべしてやりたいところだけど、さすがにそれは子供っぽいのでやめておいた。

……でも、テーブルの下でしっかり彼の足を踏むのは忘れなかったけどね。

52話 睦み

元老院を後にしたわたしは、その足でカレヴィの執務室に報告に行った。

あ、相変わらず他の三人も後についたままだけど。

それで、元老院からもらった通知書をカレヴィに渡してから、事の次第を報告した。

けど、それを聞いたカレヴィは見る見る顔を険しくしていった。

……あれ？

「ハルカ、俺に告げず、勝手に元老院などに行くな。……それに婚約期間を一月延長しただと？ そんな大事なことを勝手に決めてくるんじゃない」

「ご、ごめんなさいっ」

なんだかカレヴィがかなり怒ってるみたいなので、わたしは思わずうるたえて涙目になってしまう。

……確かに、カレヴィに一言の相談もせずに行動したのはまずかった。

でも婚約期間一月延長で、すぐにカレヴィと引き離されるのを免れたのはよかったと思っただよ。

「ご、ごめんね。国民や他の国には婚礼の延期を知らせなきゃいけない手間があるだろうけど……」

「そんなことはどうにでもなる。俺が問題視しているのは全く違うことだ」

え、そのことで怒ってるんじゃないの？

わたしは涙目のままでカレヴィを凝視した。

「……もし、期間終了後に元老院からやはり駄目だと言われたらおまえはどうする気だ」

思っていないかったことをカレヴィに指摘されて、わたしは愕然としました。

わたし、そんな可能性なんて全然考えてなかった。

だってカレヴィは執務頑張ってるし、それを見たら、元老院だって考えを改めると思っただよ。

「わ、わたし……っ」

わたし、凄く考えなしだった。

本当になんでカレヴィに一言でも声かけなかったんだろう。

カレヴィの厳しい視線に震えが止まらないでいると、見かねたようにシルヴィが言った。

「兄王、ハル力はあなたのためを思って行動したのです。それを責めるのは酷と言うものです」

「それは分かっている。俺が怒っているのは、俺に話を通しておかなかったことだ」

「ほ、本当に勝手に行動してごめんなさい！ 謝っても許してもらえないかもしれないけど、今度からは重要な話は、あなたに伝えてから行動するから……っ」

あ、やだ、本格的に涙が出てきた。みっともない。

わたしがハンカチを探してポケットをゴソゴソやっている間に、カレヴィが椅子から立ち上がってわたしを抱き寄せた。

「……すまない、言い過ぎた。泣くなハルカ」

一転していつものカレヴィの声になって、わたしは安心してよりいっそう泣いてしまった。

「カレヴィ、そんなふうに女性を泣かすものじゃないよ。可哀想に、あんなに泣いて」

アーネスが責めると、カレヴィは焦ったようにわたしの頬に流れる涙を指で拭いた。

「本当にすまない。頼むから泣きやんでくれ」

「陛下が強く言われるからですよ。ハルカ様のお気持ちも少しは考えてください」

イアスもカレヴィを責めたけど、彼は悪くないよ。悪いのはわたしなんだよ。

「ごめ、……なさい、わたし、考えなしで……っ」

「もういい。ハルカ自分を責めるな」

カレヴィがわたしの目元に唇を押し当て、ぎゅっと抱きしめてくれた。

「うん……」

馬鹿な行動をしてしまったことで、カレヴィに愛想つかされたかと思っただけど、大丈夫だったのかな……。

わたしもそろそろカレヴィの背中に手を回して、彼を抱きしめる。

その、肌になじんだ温もりに、わたしは心底ほっとした。

ああ、やっぱり失いたくないな。

そう思ってたなら、カレヴィに頬や頬、唇に何度もキスされた。

完全に二人の世界を作っていたわたし達に遠慮したのか、呆れたのか、気がついた時には誰もいなくなっていた。

それで平静を取り戻したわたし達は、明日の朝、また改めて元老院に交渉に行くことにした。

カレヴィによると、婚約期間はそのまま婚礼を迎えたいそうだ。うん、それならなにも変更することはないし、それが一番いいよね。

そのうち宰相のマウリスが戻ってきて、「皆様、お帰りになりました」と報告してきた。

……なんかみんなに悪いことしちゃったなあ。後で謝っておこう。とりあえずマウリスが来たことで、カレヴィとのいちゃいちゃはとりあえずおしまいになって、次に彼に会えるのは晚餐の時ということになった。

ちよつと寂しいけど、わたしもこれから礼儀作法の授業が入ってるし、晚餐まで我慢しよう。

それで自室に戻ったわたしは、礼儀作法の授業を受けた。

けど全く身が入らなくて、シレネ先生に「こういう時もありますよね」と苦笑いされてしまった。

すみません、本当にごめんなさい、先生。次は真面目にやりますから……。

その後も、漫画のプロットを練ろうとしたけれど、なんだかぼーっとしちゃっていい案が思いつかない。

それではつと気がついたら、カレヴィの似顔絵なんかを描いちゃつて、自分でも頭が沸いてるとしか思えなかった。

そんなこんなで、ようやく待ちわびた晚餐の時がやってきた。

「カレヴィ！」

共同の間にカレヴィの姿が見えたときは嬉しくて、つい食事時とついうちも忘れて、わたしはお行儀悪く彼に駆け寄って抱きついた。

「ハルカ」

けれど、カレヴィは叱る様子も見せず、ただわたしを受け止めてくれた。

その様子をぽかーんとした顔で見ている侍女達。

わたしがしばらく留守にしたと思ったら、カレヴィへの態度が一変していたので、びっくりしているのだろう。

「ハルカ様あ……、陛下……」

「本当によかったですわ……っ」

既にわたしの豹変ぶりを知っているソフィアから聞いたのか、イヴェンヌとモニーカが涙ぐんで祝ってくれている。

……ありがとう。いなくなった時は心配かけてごめんね。

わたしとカレヴィは侍女達の看視の中、抱き合いながらキスを何度も交わした。

……少し前までは恥ずかしくてたまらなかったそれが、全く気にならなくなってしまったところが恐ろしい。

羞恥心というものをどこかに置いてきてしまったとしか思えない。

いちゃこらしてたら、ゼフィリアが咳払いしてわたし達の暴走を止めてくれた。

それですこり笑って「お二方、おめでとunggざいます」と祝ってくれたのが嬉しかったなあ。

それで、ようやく食卓についたわたし達だけれど、その時にカレヴィからちよつとした情報をもらった。

「え……、カレヴィのお父さんとお母さんが帰ってこられるの？」

カレヴィの話によると、早々に引退して政務をカレヴィに押しつけ、周辺諸国を旅していた先王陛下が、王太后陛下と共にこの度ザクトアリアへお戻りになるらしい。

ちなみに、この世界では比較的早い時期に王が王太子に譲位する

のはそんなに珍しいことではないらしい。

「ああ、俺が嫁を娶ると聞いたからだろう。……それにしても微妙な時期に帰ってくるな」

……うーん、それは確かに。

今は元老院に二人の結婚を認めてもらおうって時だからなあ。

でも、カレヴィのご両親にお会いできるのは楽しみでもある。

「でも、ちよつと緊張するかな」

なんといいてもわたしは庶民出身だから、ロイヤルな方から見たら、穴だらけだと思っただよね。

政略でも、こんな嫁いらないって思われたらどうしよう。

でも、そんなわたしの不安をカレヴィは笑い飛ばしてくれた。

「あの二人に限ってそんな心配はいらないぞ。父上などは、かなりふざけた性格だからな」

どうやら、お二人ともとても気さくな方らしい。

それを聞いてわたしはちよつと安心した。

ああ、早くお会いしたいなあ。

でもそれよりも今は元老院との戦いが先だよね。

予定通りカレヴィと婚礼を挙げられるように、わたしも気を引き締めていかなきゃ。

わたしがそう決心して拳を握りしめていると、カレヴィが「ハルカ」と、フォークにのせたパテを差し出してきた。

もしかなくても、これを食べるってことだよな。

……うん、じゃあ遠慮なく。

わたしはカレヴィにつこり笑うと、あーんとパテに食らいついた。

53話 乱入

カレヴィと想いが通じ合ってから初めての夜の習いをすませた翌朝、わたし達は時折いちゃいちゃしながら、仲良く朝食をとっていた。

その席で話したことは主に元老院のこと。

「財政大臣と内政大臣を呼びにやらせた。ハル力はしばらくしたら俺の執務室に來い。侍女を呼びにやらせる」

わたしはカレヴィの言葉に目をぱちくりさせてしまった。

「あれ、元老院に二人で行くんじゃないの？」

昨日カレヴィが元老院と交渉するって言ってたから、てっきりそうだと思ってただけだ。

「王がわざわざ臣下のところに赴くなどおかしいだろうが」

カレヴィに溜息をつかれながらつん、と額を軽く突かれて、わたしは少しだけのけぞった。

「あ、そうか。王の権威に拘わるものね」

言われてみれば納得。

それでカレヴィは朝から二人を執務室に呼びつけたわけね？

「そうだ。元老院にいつまでも大きな顔をされるのも癪だしな」

なにかを思い出したのか、少しだけむっとしながらカレヴィが言う。

「でも、そんなに傲慢な感じはしなかったけどなあ……」

グリード財政大臣なんかはきついけど、間違っただけだと言ったことがあったし。

わたしはそう言うと、カレヴィは大きな溜息をついた。

「そこでほだされてどうする。やつらは俺達を引き離そうとしているんだぞ」

「あ、うん……」

でも、本当にカレヴィの言う通り、元老院はわたし達を別れさせ

るつもりなのかなあ？

ヘンリック内政大臣が様子を見て決めるって言ったのは、本当に元老院側の譲歩だと思っただけだ。

「それでは、俺はこれで執務に入る。……ハルカ、また後でな」
「うん」

朝食をすませたカレヴィは席を立つと、向かいのわたしのところまで来た。

そしてカレヴィがかがんで、わたしの頬にキスをしようとした、その時だった。

いきなり正面のドアが開いたと思ったら、浅黒い肌の中年男性がえらい勢いで入ってきた。

「おお、久しぶりだなカレヴィ！ この娘がおまえの婚約者か？ ほほう、こりやあまた、立派なおっぱ……っ！」

するとその後ろから現れた銀髪の綺麗な女性が、近くにあった銀の盆でその男性の頭を皆まで言わずに殴った。

そのいきなりの展開に、カレヴィとわたしは呆然。

「……息子の嫁になる人に向かって下品な物言いはやめてください」
「いや、ニーニア。あまりにも印象的なお……っ、……だったからさあーっ！」

ニーニアという女性に言葉の途中で殴られているにも関わらず、懲りずに中年男性は主張している。

「……どうやら、わたしの胸のことを言っているみたいだけど」
「そんなに大きな胸が好きですか。あなたは息子の婚約者にまで手を出そうとしているのですか？」

そう言って、ニーニアさんは銀の盆で中年男性をボコボコにする。

いや、ちょっと待って。

……息子の婚約者？

「誤解だ、子猫ちゃん。俺は子猫ちゃん一筋だよお」
それでもつて、ニーニアさんに情けない声で許しを乞うこの中年男性はもしかして。

「……お二人ともいい加減にしてください。父上、母上、いい歳をしてみつともない」

カレヴィが呆れかえってそう言ったことで、いきなり乱入してきた二人は我に返ったみたいだった。

「カレヴィ、女性に歳のことをいうのは礼儀に反してますよ」

ニーニアさん……、いや王太后陛下が可愛らしく唇を尖らせて言った。

その様子はカレヴィの母親とは思えないほど可憐だった。

先王陛下が子猫ちゃんと呼ぶのもなんとなく分かる気がする。

わたしがそんなことを思って王太后陛下を見ていたら、かの方とばっちり目が合ってしまった。

……しまった。あんまりまじまじ見すぎちゃった。

ぶしつけな女とか思われたかなあ、などと思っていると、王太后陛下が興味深そうな感じでわたしに近寄ってきた。

「それにしても、本当にすてきなお胸ね」

と言うと、おもむろにわたしの胸を揉み始めたーっ!?

「は、母上、なにをしているんです!」

カレヴィが驚いて声を上げるけど、王太后陛下はまったく気にする様子もなくわたしの胸を揉み続けていた。

「子猫ちゃん、ずるい……」

どことなくいじけた様子の先王陛下を王太后陛下は勝ち誇ったようにふふんという顔で見る。

「ほほほ、女性同士の特権ですわ。けれど本当にこの感触、すばらしいわあ……」

……いや、初対面の女性に胸を揉まれたのは一度や二度じゃない

けど、さすがにロイヤルな方にやられると、わたしも予想外すぎて
啞然としてしまう。

「……母上、いい加減にしてください。怒りますよ?」

カレヴィがこめかみをぴくぴくさせて静かに言う。

わあ、カレヴィ怒ってるよ!

でもこんなの女同士の挨拶みたいなもんなんだから、そんなに気
にすることもないのに。

「まあ、怖い。カレヴィ、そんなに嫉妬深いとハルカ様に愛想を尽
かされますわよ?」

それでようやく王太后陛下から解放されたわたしをカレヴィは「
よけいなお世話です」と言って抱き寄せた。

それを王太后陛下は目を細めて見ていたけれど、やがて姿勢を正
して言ってきた。

「……挨拶がおくれましたわね。ハルカ様、わたくしカレヴィの母
のニーニアです。よろしくお願いしますね」

見本のような正式な礼での挨拶に、わたしも慌ててカレヴィの腕
を出て、正式な礼を返す。

「ハルカ・タダノです。こちらこそよろしく願います」

「……じゃあ、次俺の番な。俺はディアルーク、カレヴィの父親だ。
よろしくな、ハルカ」

「あ、よろしく願います……」

どこかの兄ちゃんのような口調とは裏腹な淑女への礼を受けて、
わたしはちよつとぼかんとしてしまった。

けど、すぐにはっと気づいて先王陛下に礼を返した。危ない危な
い。

「……父上、母上。せっかくお越しいただいても、俺とハルカは今
はお相手できませんよ。これから大事な話し合いがあるので」

カレヴィがそう言ったことで、わたしは元老院のお偉方とこれか
らやり合う予定だったことを思い出した。

あまりにもお二方の登場の仕方が強烈だったから、つい忘れちゃってたけど。

「ああ、分かってるよ」

先王陛下はうんうんと頷きながら、カレヴィの肩を叩いた。

え……、分かってるってどういうこと？

「元老院の連中とこれからやり合っただろう？ それを聞いて、俺たちはここに来たんだ」

54話 説得

「え……」

そうすると、このお二方はわたしが国を傾ける存在になるかもしれないって知ってるってこと？

「も、申し訳ありません、わたし……っ」

もしかしたらカレヴィをたぶらかしている女と認識されてるかもしれないと思つたら、いても立つてもいらなくて、わたしはお二方にわたしは頭を下げていた。

それを見たカレヴィが眉を寄せて辛そうに言った。

「ハルカ、おまえはなにも悪くない。謝るな」

カレヴィにぎゅっと抱きしめられるけど、今回ばかりは安心感は訪れない。

「確かにハルカは悪くないな。悪いのは、カレヴィ、おまえだ」

先王陛下にそう指摘された途端、カレヴィの端正な顔が歪んだ。

「おまえがしっかりしないばかりに、大事な女が悪く言われてるんだぜ。おまえは男としてどう責任とる気だ」

先王陛下の厳しい言葉に、カレヴィがすかさず答えた。

「……いざとなればすべての責任を負って退位します」

「この大馬鹿野郎」

その途端、先王陛下が吐き捨てるように言った。

「そしたら、シルヴィにしわ寄せが来るじゃねえか。……それに、

ハルカには王を退位させた悪女って汚名がつくかもしれないんだぜ

？ カレヴィ、おまえはそれでも平気なのか」

「それは……」

「カレヴィ」

カレヴィに抱かれた腕から、細かい震えが伝わってくる。彼が動揺している証拠だ。

わたしは彼を抱きしめた後、カレヴィの腕から抜け出した。

「……わたし、思ったんですけど」

「ハルカ」

お二方に向かって話すわたしにカレヴィが驚いたように瞳を見開く。

きっと、いったいなにを言う気だと思ってるんだろうな。

「今回のような巨額が動く場合は、必ず元老院を通せばいいのではないのでしょうか。そうすれば、少なくともいいか悪いかの結果は元老院が出してきます」

「……そうだな。ハルカが正解だ。なかなかどうして、王妃としての資質があるようじゃねえか」

それまで黙って聞いていた先王陛下がにと笑って、わたしを見た。

ああ、間違ったこと、言わなくてよかったあ。

「しかし、いちいち元老院を通していたら、王の権威が墜ちてしまいます」

「カレヴィ、元老院はけして敵ではありませんよ。今回もすべては国のためを思って動いたまでのこと。……その結果、ハルカ様には随分と辛い思いをかけてしまいました」

「そんなこと……」

王太后陛下の劣るような視線に、わたしは思わず頬を染めて首を振った。

こんな綺麗な方にそんな優しい目で見られたら、なんだか恥ずかしい。

そんなわたしを先王陛下は横目で見て笑った。その笑いはとても優しかった。

「……カレヴィ、いい加減覚悟を決めちまえ。このままだと、大事な女を一生失うことになるぞ」

先王陛下の言葉があまりにも重いものだったので、わたしは思わずカレヴィを見た。

「カレヴィ……」

思いもかけず不安そうな声が出て、カレヴィもわたしを見る。

「……ハルカ」

カレヴィの顔が苦悩に歪む。

わたしはカレヴィに寄ると、そっと抱きしめた。
応えるようにカレヴィもわたしを抱きしめる。

ああ、この温もりを失いたくないな。

カレヴィもわたしと同じ思いだといいいけど。

「……分かった」

ややして、覚悟を決めたのが、カレヴィが頷いて言った。

「俺は王として覚悟を決めた。今回の非を認め、元老院との協調の道を選ぶ」

張りのあるその宣言は、まさに堂々とした王者のもので、わたしはこんな時だけど、惚れ惚れしてしまった。

「よし、よく言った！ それなら、俺は全面的におまえに協力するぜ。二人の婚礼を強行突破させてやる」

え、強行突破ってどういうこと？

わたしが思わず首を傾げると、王太后陛下が優しく微笑んで言った。

「……当初の予定通り、二人の婚礼を行うんですよ。カレヴィの意志が固まれば、わたくし達や最強の魔術師殿が全力で補助しますわ」「最強の魔術師……。もしかして千花がお二方に連絡を取ったのですか？」

気の利く千花なら先を見越して行動してもおかしくない。

……けど、つくづく千花の人脈は凄まじいなあ。

わたしのその考えを肯定するように王太后陛下が華やかに笑った。「そうです。実はもうそのつもりで既に準備をしてあるんですけど

ね。……さあさあ、ハルカ様は婚礼衣装の仮縫いが出来上がってま
すから早くそちらのお部屋に行きましよう」

「え……」

王太后陛下はわたしをカレヴィの腕から無理矢理奪うと、隣のわ
たしの居室へ向かってぐいぐいと手を引いた。

でもわたしはカレヴィのことが気になって思わず振り返ってしま
う。

そんなわたしに先王陛下は全く心配することはない、と言うよう
に手を振っていた。

「話をつけてくる。……ハルカ待っている」

そう言つて爽やかに笑つたカレヴィがもの凄く遅く見えて、わ
たしは思わずじーンとしてしまった。

「うん、待ってる」

「……さあ、ハルカ様」

カレヴィに頼いたわたしを王太后陛下がわたしの居室へと強制連
行する。

ああ、言いたいことはたくさんあるけど、これが終わってからで
いいよね。

わたしはわたしで出来ることを頑張ろう。

わたしは頭を上げると、王太后陛下に従つて仕立屋の待つ自分の
居室に戻った。

そのしばらく後、無事婚礼衣装の仮縫いの調整を終えたわたしは、
ニーニア様とのんびりとお茶を飲んでいた。

王太后陛下と呼んだら、それは大仰すぎるので、ニーニアと呼ん
でくださいと言われたのでわたしは遠慮無くそうさせてもらつこと

にした。

ニーニア様はとても気さくな方で、わたし達はすぐに仲良しになった。

ニーニア様によると、最初のコミュニケーション（胸揉み）も良かったらしい。

あ、そういえば、ニーニア様が先王陛下に「子猫ちゃん」と呼ばれてたのは、名前の響きが猫の鳴き声に似ているからなんだって。なるほど、と納得しながら紅茶を飲んでいたら、いきなり共同の間に続く扉が開いた。

そこに立っていたのはやっぱりカレヴィで、その後ろには腕組みして不敵に笑う先王陛下がいた。

「元老院と話をついた。式は当初の予定通り執り行う」

55話 婚礼

「今まで毛嫌いしていたが、結構話せる連中だった」
肩の荷が下りたように、カレヴィが笑って言った。

……そんなに嫌いだったのか。

どつりでわたしが勝手に元老院へ行つたことに激怒するわけだ。

「でも、よく元老院を納得させたね」

グリード財政大臣なんかは、「いきなりそんなことを言われましても信用できません」くらい言いそうだけど。

「ああ、それは……、ここだけの話だが、父上が財政大臣の弱みを握っていてな」

……それで、脅して無理矢理話をまとめたつてわけだね？

ちよつとグリード財政大臣がかわいそうな気もしないでもない。

カレヴィが元老院を嫌つていても、財政大臣達はカレヴィのこと王としてかなり評価していたわけだしさ。

……うん、そのうちそのことをカレヴィに教えてあげよう。

「それでだな、ハルカの提案通り、巨額を動かすときは元老院の許可が必要になることになった。……まあ、奴らにおもねるようで癪だが、ここは譲歩することにした」

まだ不満だというばかりにカレヴィがちよつと不機嫌そうな顔になる。

日本人の感覚からすれば、一個人の裁量でそんな大金が動く方が怖いんだけどね。……まあ、カレヴィは王様だけど。

「うん、それでいいと思うよ。カレヴィ、頑張つたね」

わたしはカレヴィに寄り添うと、その背中をよしよしと撫でた。

カレヴィも王様としてのプライドがあつただらうし、その葛藤ま

では計りかねるけど、今回元老院と歩み寄ったのは、素直に偉いと思う。

「おまえのためだ、それくらいする」

うーん、嬉しいけど、王様の発言としては、ちょっとどうかと思うぞ。

「……わたしのことはもう充分だよ。できれば国民のことも考えてほしいな」

カレヴィはその言葉でわたしがもっと喜ぶものと思ってたらしく、ちよつと苦笑して言った。

「……分かっている」

うーん、ちよつと冷たかったかな？

でも今までの経緯を考えたら、結婚できてすごく嬉しい！ って素直に喜べないんだよね。

それに、わたしも王妃になるんだから、少しは気を引き締めなくちゃいけないと思う。

「……わたし、未熟だけど王妃として頑張るよ。だから、これからもよろしくね、カレヴィ」

わたしが真剣な顔でそう言うと、カレヴィは少し瞳を見開いて、ややして破顔した。

「ああ。俺の方こそよろしくな。そして、一緒にザクトアリアの歴史を作っていこう」

わたしはカレヴィに抱き寄せられて、目を閉じる。

それは、最初ここに来たときに思っていたよりも随分と重い使命だったけど、カレヴィや周囲のみんなと一緒に頑張ろうとわたしは思った。

そして、このザクトアリアという国をより良くしていくんだ。

そして、それから怒濤の日々だった。

わたしは婚礼の段取りを復習したり、出来上がってきた衣装に合わせた髪のかき方や飾りだのを侍女達にいろいろ検討されたり。

わたしの礼儀作法はまったくの付け焼き刃なので、披露式典という名のダンスパーティーなんて催されなくて本当によかったと思う。

そんなものがあつたら、絶対にそこまで手が回らないと断言できるし、カレヴィもそれが分かっていただけなのか、あえて披露式典は行わないことにしてみたんだ。

でも、国民への披露はしなきゃいけないから、バルコニーでのお披露目はあるらしい。

そこでわたしは、シレネ先生に王妃らしい気品を醸し出す手の振り方や微笑みなんかをさんざん練習させられた。

いよいよ明日が婚礼という前日の夜。

わたしは共同の間の応接セットにカレヴィと隣あつて座つてくつろいでいた。

ちなみに、この日の夜の習いはなし。

……なくてよかったと、わたしはこっそりほっとしていた。

正直、そこまで体力もたないしね。

「うっー、笑いすぎてなんか変。今も自分が笑ってる気がする」

両頬を押さえてわたしがカレヴィに訴えたら、彼はそんなことないぞ、と笑って言うてくれた。

……うん、それならいいけど。

「いよいよ、明日だね」

「ああ、緊張するか？」

わたしはカレヴィに抱きしめられながら、素直にうん、と頷いた。

「でも、これでカレヴィとずっと一緒にいられると思うと、嬉しい」

「ハルカ……」

カレヴィが嬉しそうに笑うと、わたしを抱く力が強くなった。わたしも負けずにカレヴィを抱きしめ返す。

ああ、こうしていると短い間にいろんなことがあったような気がする。

でも、これからはそれ以上にいろんなことがあるんだろうな。

名残惜しかつたけれど、わたしは無理矢理カレヴィの腕から出た。

「とりあえず、明日頑張るね。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

わたし達は口づけを交わすと、わたしだけ一足先に休ませてもらうことにした。

わたしは明日の朝早くから衣装の着付けやらで忙しいからだ。

そして、寝室のベッドにぼすんと横になると、さっきまで緊張してたのが嘘みたいになわたしは深い眠りに引き込まれていった。

そして、肝心の婚礼当日。

入念な支度をされた後、わたしはカレヴィと元老院の一角の式場で引き合わされた。

カレヴィはわたしを見て瞳を見開いた後、「綺麗だ」と囁いてくれた。……うう、嬉しいな。

辺りを窺うと、ザクトアリアのお偉方とカレヴィのご両親、シルヴィ……あ、アーネスの姿も見える。

婚礼を予定通り執り行うことが決まって、アーネスはしきりに「残念だ」と言っていたけど、どこまで本気だったんだろ、あの人。

……まあ、わたしはカレヴィー筋だから気にしなくてもいいか。

……あと、おとんとおかんの姿も確認できた。

けして仲のよい親子ではなかったけれど、それはわたしにもたくさん非があつたことだし、これまでのこと全部水に流してこれからはたくさん親孝行しようと思えた。

そして、千花。

参列者でいるはずなんだけど、残念ながらもどこにいるかは確認できなかつた。

そして、わたし達は衆人環視の中、宣誓をし、婚礼誓約書に署名をした。

「兩名の婚礼の誓約は成された」

宰相のマウリスの宣言の後、わたし達を祝福するように天井から花吹雪が降ってきた。

ああ、千花だ。

予定されていなかったハプニングに、わたしとカレヴィーは思わず微笑みあう。

そしてわたし達は、花吹雪が舞う中で幸せなキスを交わした。

最終話 運命の人

……えーと、いち、じゅう、ひゃく、せん、まん……。

庭園の東屋で、にやにやしなから通帳の残高を数えていたら、長男のアリアスにうんざりした顔をされた。

「母上、いい加減その趣味はやめてください。一国の王妃として恥ずかしいですよ」

「いいじゃないの、これくらい。浪費するわけでもないし、可愛い趣味じゃない」

「可愛いですか？ むしろぶき……いえ、なんでもありません」
わたしが一睨みすると、アリアスは慌てて口ごもった。

……まったくまだ十歳だっていうのに、変に大人びていて、口うるさくてしょうがない。あんたは小姑かっの。

「おかあさまあ、マンガのつづき、まだあ？」
五歳になるティティアが可愛らしくおねだりしてくる。

うん、むかしはアリアスもこんなだったのに、時の流れは無情だ。
「うん、そろそろ完成するから、もうちよつと待っててね」

わたしがティティアの波打つ銀髪を撫でると、ティティアは「うん、まってる！」と大きく頷いてどこかへ駆けていった。

「ティティ、危ないよ」

それを慌ててアリアスが追いかけていく。

ティティには近衛がついてるから心配ないっていうのに、アリアスは立派なシスコンに育ったな。

ちよつと離れた場所では、八歳になるジェイドがベンチに座って静かに本を読んでいる。

うん、落ち着いたいい子だね。

わたしの影響で漫画も大好きな立派なオタクだけど。

あの、ザクトアリアの国民から熱狂的に祝われたカレヴィとの結婚から、十一年の歳月が流れた。

わたしは今や三人の子を持つ王妃だ。

それでもって、今は双子を妊娠中で、お腹がかなり大きくなっているので動作がかなり大変だったりする。

趣味の漫画もお腹が大きいので斜めになって描いたりして、わたしなりに工夫してみたり。

あ、そういえばわたしの騎士と姫君の恋物語を描いた漫画は無事に完結して、最後まで本にすることが出来た。

ありがたいことに王宮でわたしの本は大人気だったし、心配していた向こうの世界の通販なんかは代行業者にお任せできたので、本にして本当によかったと思う。

製本やら通販やらがうまくいったのは、千花の協力によるところが大きい。

本当に千花には、いくら感謝してもしきれないくらいだ。

うん、千花は一生ものの親友だね。

その千花の協力の元、ザクトアリアもますます発展していつても、まったくもって千花様様だ。

……でも、千花にばっかり損させているみたいで悪いなあと時々思う。

それで何度か彼女にそのことを言ってみたりするんだけど、千花はその度に「そんなことないよ」って笑って言うんだよね。うーん、本当にいいのかなあ。

一応カレヴィにも相談してみたけど、「ティカ殿はそれで幸せなんだから、放っておけ」とか言うし。

うーん、なんとなく納得しないけど、それならわたしは千花のよき理解者になれるように頑張ろうかと思う。

千花は千花なりに、最強の魔術師としての苦労はあるだろうし。
……まあ、わたしなんかじゃ頼りないかもしれないけどさ。
でも、わたしが千花の癒しの一部になれたらいいと思うんだ。

「さて、下描きはこんなものでいいかな」
大きなお腹に苦勞しながら、ティティにさっきおねだりされた漫画の最終話の下描きを終わらせたわたしはひとりごちた。
漫画のあらすじはこうだ。

それは、二つの世界を行き来する至高の魔女が存在する世界。
異世界から来たとある娘と豊かな国の王様は運命的な出会いをしました。

王様と娘はやがて恋に落ち、そして皆に祝福されて結婚しました。
……うん、間違いなくわたしとカレヴィの話なんだけど、そのままだと夢も希望もないところもやっぱりあるから、漫画自体はかなり美化されている。

あ、それから、カレヴィとわたしの話のラストはこれで締めようかと考えている。

『豊かな国の王様とお妃様は至高の魔女の守護の元、いつまでも仲良く暮らしました。』

ベタだけど、千花への感謝も表したこれが一番ベストな終わり方だと思ったんだ。

「ハルカ、そろそろ部屋へ戻れ」

わたしが妄想にふけっていると、カレヴィが執務を中断したのか、わざわざわたしを迎えに来てくれた。

「うん、ありがとう」

相変わらずカレヴィはわたしを溺愛してくれていて、わたし達に倦怠期というものはどうやらなさそうだ。

……今もはばからず、カレヴィはわたしにキスしてくるしね。だから、わたしもそれにお返しする。

ああ、幸せだな。

カレヴィに会えて、本当によかった。

ここまで来るのに本当にいろいろあったけど、今となってはその全てが愛おしい。

そして、あなたがわたしの運命の人。

世界を越えて、わたしはあなたに出会うべくして出会った。

了

勝利宣言

「ハルカとの婚礼を当初の予定通り執り行うことが決まった」

場は、王の執務室。

その中でカレヴィの凜とした声が響いた。

そこにいるのは、彼の弟であるシルヴィ、アーネス、イアス。

……言わずと知れたはるかへの求婚者達だ。

ちなみに宰相であるマウリスはとばかりを恐れたのかこの場にはいない。

「……君はそのことを知らせるためにだけに、わざわざわたし達を呼んだのかい？」

アーネスがその場にいる者の言葉を代表して嫌みたらしく言った。しかし、今のカレヴィにはその嫌みな口調さえ、耳に心地よかった。

なにせ、これで愛するはるかへちよっかいをかける者がいなくなつたのだ。

「……元老院はもう少し頑張ると思つただけだね」
幾分悔しそうにアーネスが唸る。

それでカレヴィは、彼が珍しく今回はかりは本気であつたことに気がついた。

まあ、いかにアーネスがはるかを想おうとも今更遅いのではあるが。

「こちらも譲歩した。それで、それなりの金が動くときは、元老院の承認が必要になつた」

「駄目ではないですか、兄王。それでは、元老院を調子づかせてしまつ」

同じく元老院をあまりよく思っていないシルヴィが怒ったように言う。

「ハルカの案なんだ。父上もそれに賛成だったしな。……多少渋ったが、元老院もこの案には譲歩したぞ？」

「ハルカが……」

思ってもいなかったところで元老院を宥めさせたはるかの手腕に、シルヴィ達は少し呆然としたようだ。

「なんでも、ハルカのところは議会政治だそうだ。だからそんな柔軟な案が出てきたんだろうな」

確かにこの大陸の絶対的な王の権力を知っていれば、そうそう出てこない案ではある。

「それに、母上が言っていた。元老院は敵ではない、国のためを思っている」と

「母上が……」

カレヴィにはまだそれを全面的に信じられなかったが、かつて王宮に君臨していたディアルークやニーニアがそう言うのだ。

それはカレヴィにとってはかなり譲歩だったが、それではるかの手に入ればそれくらいはと言うことはない気がした。

そして、カレヴィとはるか婚の婚礼は渋々ではあったが、元老院側に承認され、予定通り通り執り行われることとなった。

トントン。

ふと、執務室の横の扉から叩く音がした。

それに、カレヴィはすぐさま「入れ」と許可を出した。

……その扉から入って来る者はだいたい決まっている。侍女かあるいは。

「カレヴィ、ちょっとお邪魔するね。時間が空いたから遊びにきち

やった……あれ」

嬉しそうに扉から顔をのぞかせたはるかが、その場にいる者達を見てきよとんとする。

「ハルカ、気にすることは無い。入ってこい」

カレヴィに呼び止められて、はるかがおずおずと執務室に入ってきた。

「うん、お邪魔します」

その時、はかったように侍女が茶の用意をして入室してきた。

「ハルカ、俺の横に座れ」

カレヴィに促され、はるかは素直に彼の横の席に座った。

「今、彼らに俺たちの婚礼のことを伝えていた」

「……そうなの？」

カレヴィのその言葉にはるかの頬が染まった。

その様子は、とても実年齢が二十七とは思えないほど初々しく、可愛らしい。

「ああ、これでこいつらもおまえの求婚を諦めるだろう？」

「え……？ あ……、え、と、ごめんなさい……」

いかにも嬉しそうなカレヴィとは対照的に、はるかは事態を把握すると、求婚者達に申し訳なさそうに謝った。

「ハルカ、なぜ謝る」

「え、それは、気持ちに伝えられなかったから……？」

カレヴィがむつとすると、はるかは慌てたように言った。

「おまえが謝ることはない。こいつらにとっても残酷なだけだ」

「あ……、ごめんなさい」

はるかはカレヴィの指摘でようやく自分の発言の残酷さに気づいたらしく、申し訳なさそうにもう一度謝った。

「いいんですよ。僕はハルカ様が幸せならそれで幸せなんですから。

……ハルカ様、どうぞお幸せに」

「う、うん、ありがとう……」

イアスの言葉で、はるかが感動したように目に涙を溜めた。

一人で点数を稼ぐなとイアスに対して周りの男共が思っているとは、はるかとはまったく気がついていない。

「ハルカ、泣くな。おまえの好きな菓子があるから食べる。……なんなら俺が食べさせてやるが」

カレヴィがはるかを膝の上に乗せると、瞳の浮かぶ涙を指で拭いた。

「え……、や、やだっ、一人で食べるよ！ ……あ、でもわたし今ダイエットしてるんだっ」

求婚者達を置いてきぼりにしていちやつくはるかとかレヴィだったが、はるかはふと思いついたように出されたケーキを押しつけた。「これくらい大丈夫だろう？ それに夜には運動させてやるしな」あからさまなカレヴィの言葉に、男達は空気を凍らせ、はるかはこれ以上ないほどに真っ赤になる。

「ししし、信じられない！ みんなの前でそんなこと言うなんて、カレヴィの馬鹿！」

はるかは慌てたようにカレヴィの膝から下りると、執務室を駆けて出ていってしまった。

「……こんなことで恥ずかしがるとは可愛いやつだな」
そしてその場には、はるかの反応にやけるカレヴィと彼に冷たい視線を浴びせる男達だけが残された。

……いずれにしても、恋の勝者であるカレヴィには今はなにを言ってもただのやつかみにしか聞こえないだろう。

そう思った三人のはるかの元求婚者達は小さく溜息をついたのであった。

伝わらない言葉(前書き)

シルヴィ視点。

伝わらない言葉

ここ数日、婚礼衣装の最終調整に入っているらしく、慌ただしく仕立屋や宝石商がハルカの部屋に出入りしている。

ようやくそれが一段落したのを見計らってシルヴィはハルカを訪ねた。

「ハルカ」

「あれ、シルヴィ、いらっしやい。今日は一人？ イアスは？」

今日のハルカは婚礼の化粧の打ち合わせでもしたのか、いつもより華やかに見えた。

「……別にいつも一緒にいるわけじゃないです。俺達を子供かなにかだと思っているんですか」

シルヴィが少しばかりむっとして言うとハルカは少し慌てたようだった。

「あ、ごめん。そういえばここは十五で成人だったね」

「そうです」

「つかぬことを聞くけど、シルヴィって今いくつ？」

「そういえば彼女には言っていないかったかとシルヴィは思う。」

「言えば、馬鹿にされそうでなんとなく言えなかったのだ。」

「十六です」

すると、ハルカが驚愕に瞳を見開いた。

「じゅっ……るく」

「そうです。なにか問題でも？」

「大ありだよ！ わたし十以上も年上じゃない。シルヴィは国のためとは言え、そんな女を妃にしようとしたの？」

心底驚いたというようにハルカは胸に手をあてて深い呼吸を繰り返す。

「そうですよ」

ハルカが随分と年上なのは求婚する前から知っていたことだ。

確かにこの大陸の基準からしたら、ハルカは立派な嫁き遅れであるし、彼女の驚きは分からないでもない。

「そうですね……って、そしたら、わたし犯罪者じゃない！ わたしの国じゃシルヴィ、高校生だよ！」

「コウコウセイ……？」

ハルカの言葉の中に分からない単語が含まれていたので、シルヴィは思わず聞き返す。

「え、えーと、学校に通っている未成年っていうか……。わたしの国では、親の承諾ありでも結婚は男子十八歳、女子十六歳からだから」

ハルカが胸の前で指を組み合わせて言いづらそうに言った。

……なるほど、それでハルカが犯罪と言ったのか。

シルヴィは納得すると、ふと気になってハルカに尋ねた。

「ハルカの国の成人はいくつなんですか？」

「二十歳だよ。向こうではそれでわたしの歳くらいで結婚しても別に普通かな。……まあ、わたしはモテなかったから向こうにいても結婚できたかどうかは微妙だけど」

シルヴィは信じられないことを聞いた気がして、瞳を見開いた。

ハルカの国では、成人が二十歳というのも驚いたが、それよりも「……もてなかった？」

「あれ、カレヴィに聞いてない？ わたし、モテなかったから向こうでは彼氏もいなかったの。……まあ、そのおかげでカレヴィと結婚できるんだけど」

そう言っただけで恥ずかしそうに頬を染めるさまは、とても年齢相応に見えない。

肌のきめ細やかさから見ても、せいぜい二十歳くらいだ。

「あなたはモテないようには見えないですよ。それにイアスやアーネスにも懸想されているではないですか」

……そして、俺にも。

その言葉をシルヴィは声には出さなかった。

これから兄王の花嫁になる人に向かって告白するには、あまりにも時期が悪すぎた。

「冴えないわたしを知ってて好きって言うってくれるカレヴィやイアスは、こう言ったらなんだけど、相当な物好きなんじゃないかな。それに、アーネスはただ毛並みの変わった女が珍しいだけだと思うし」

……ハルカは本気でそう思っているらしい。

だが、シルヴィは聞いていてハルカのあまりの鈍感さに頭が痛くなってきた。

ハルカはただでさえ男を寄せ付ける体つきをしている上に、笑顔に愛嬌があり、性格も悪くない。むしろ可愛らしいと思うこともあるくらいだ。

たとえ化粧がなくても、向こうでもハルカはモテていた。

それは断言できる。

……それがなぜ本人が頑なにモテないと思っているのかは謎だったが。

「それにわたし、カレヴィに会うまで人を好きになるって感情がよく分からなかったんだよね。……だから、カレヴィがわたしの初恋」
そう言って、恥ずかしそうに、だがとても嬉しそうにハルカが笑う。

……その笑顔を見ていたら、抑えていた感情が蘇って、シルヴィは彼女を浚ってしまいたくなった。

けれど、もうすぐ彼女は兄王の花嫁になる。

そして愛し合う二人を遮ることはなにもなくなるのだ。

なぜ、王が俺ではないのだろう。 。
そうすれば、間違いなく自分は彼女を浚っていただろう。
だが、現実には兄が王で、ハルカは彼と愛し合っている。
その絆はもう簡単には揺るがないだろう。

「……もう少し早くあなたに会いたかったですよ」

できれば、兄王よりも先に。

そうすれば、この人を自分のものにできただろうか。

言わないでおこうとした言葉は、簡単に口に出てしまった。

そのシルヴィの告白に、ハルカは分かっているのかどうか、んー、
と少し考え込むと、ややして言った。

「シルヴィ、わたしの義弟になるんじゃない、駄目？ わたしはシルヴィ
みたいな弟がほしいけど」

どこまでも無邪気に、そして残酷にハルカはシルヴィの想いを拒
絶する。

その言葉は一度却下したはずだが、しかし今はあの時とは状況が
違っている。

「その際には、あなたが少しはしとやかになることをお願いし
ますよ」

その言葉を聞いて嬉しそうに微笑むハルカにシルヴィは胸の痛み
を覚える。

「……ところで、シルヴィ。このお化粧どう思う？ ちょっと派手
じゃない？」

そんなシルヴィの心も知らずに、ハルカは無邪気に質問を投げかける。

だから彼は答える。この恋情への別離を込めて。

「とても似合っていますよ。王妃にふさわしい華やかさです」

そして、彼女はシルヴィの言葉に嬉しそうに微笑むのだ。

無邪気に、どこまでも残酷に。

それはひとひらの花びらの1つとくー (前書き)

アーネス視点連載。

それはひとひらの花びらのごとく1

「そういえば今度、最強の魔術師の友人を妃に娶ることにした」

アーネスはカレヴィに領地関連の報告を行った際、彼にふと思いついたかのように言われ、その内容に思わず首を傾げた。

「最強の……？ 確か君の妃になるのは、ディアルスタンの王女じゃなかったのかい？」

もうすぐ婚礼契約の書簡が来ることになっていると、ついこの間本人に聞いたような気がするのだが。

「ああ。そのはずだったが、よりにもよってその女はいきなりディアルスタンとの契約書の上に落ちてきてな。書状を滅茶苦茶にくれたので、『代わりにおまえが俺と結婚しろ』と迫った。……その時はかの魔術師の友人とは知らなかったが」

それを聞いて、アーネスは密かにその女性の不運さに同情した。いきなり現れたということは、彼女はかの最強の魔術師に召喚でもされたのだろう。

しかし、見たこともない場所で、知らない男にいきなり結婚を迫られたら誰でも驚くのではないか。

「……それで、彼女はどうか答えたんだい？」

「嫌だと言ってきた」

「……まあ、そうだろうね」

カレヴィは王という立場にあるためか少し強引なところがある。彼の端正な容貌に目を奪われなければ、まともな女性ならまずそう答えるだろう。

「だが、ティカ殿に俺の妃になれば給金が貰え、趣味に没頭できると聞いて話に飛びついてたぞ」

それを聞いて、アーネスはその女性のあまりの変わり身の早さに啞然とした。

「なんとまあ……。こう言っではなんだが、そんな女性を王妃に据えて大丈夫なのかい？ 聞いた限りでは、最悪、装飾品等に大金を注ぎ込み、国庫を傾けそうな女性に思えるけれど」

「……まあ、それはないな」

アーネスの心配をよそにカレヴィはあっさりとそれを否定した。

「なぜだい？」

「ハルカ……。ああ、その女の名前だが、現れた時にとて貧相な格好をしていたんだ。そんな格好を好きでしている女が浪費をするとは思えない」

カレヴィがそうまではつきりと言い切るということは、予想するにハルカという女性はとて地味な感じなのだろう。

「……で、その彼女は美人かい？ かの魔術師の友人なら期待できそうだが」

ティカという最強の魔術師は、その力もだが、美貌でも大陸に名が轟いている。

人妻であるにも関わらず、未だに彼女を手に入れることを諦めていない者も多い。

その友人なら、地味でも見目は悪くないだろう。

「いや、顔立ち自体は普通だ。体つきはいいがな。あれなら子もすぐできるだろう」

カレヴィはその女性の顔立ち自体にはさほど興味はないらしい。

「……ふうん？」

元より、国のための政略結婚を当然と受け止めている彼には、女性の美醜など余程酷くないかぎり気にも留めないのかもしれない。

彼にとって大事なのは、世継ぎを産めるかどうかなのだ。

「それよりも年齢が俺より三つも年上なのが気になるがな。……子も何人が欲しいしな」

それを聞いて、アーネスは耳を疑った。

それではハルカは現在二十七歳ということではないか。

「カレヴィ、こう言っではなんだが、そのハルカ嬢は王妃にしても

大丈夫なのかい？ その年齢ではとても身が清らかだとは思えないが」

それに、普通に見ても立派な嫁き遅れだ。

アーネスは親友の身が心配になってつい言ってしまった。

「ああ、それなら大丈夫だ。ハルカは自分がモテない女だと豪語していたからな」

カレヴィはその時のことを思い出したのか、くつと笑いだして言った。

「……それなら問題はないか。それにしてもハルカ嬢はなかなか剛胆な女性のようにだね」

女性なら恥とも言えることをこうも堂々と宣言してしまえるとは、なかなか面白い。

アーネスは話を聞いていて、少々変わっているハルカ自身にだんだん興味が湧いてきた。

「ああ、そうだな。少しばかり卑屈かと思ったが、それを補って余りある性格だからな。まあ、前向きなのはハルカのいいところだが、どうやら、出会いはともかくとして、カレヴィはハルカを悪くは思っていないようだ。

……これなら、これから政略の道具になるハルカ嬢も少しは幸せになれるだろう。

その気持ちとは裏腹に、アーネスはまったく逆の質問をカレヴィに投げかけた。

「それで、ハルカ嬢は役に立ちそうかい？」

「ああ、ハルカはティカ殿のとても大事な友人のようだ。そうでなければ、そもそもティカ殿が召喚してまで会いたいと思わないだろう。ハルカはディアルスタンの王女などよりも余程国益になる女だぞ」

「……そうか。それならいい」

女性は国益の為の人身御供か。

少しばかり、アーネスはかの王女とハルカのことの気が毒になったが、彼とてまだ見ぬ女よりは国益の方が大事だった。

「それと、ハルカの歳は二十歳ということにしてある。本当の年齢を言ってしまうえば貴族連中がうるさいからな」

カレヴィがやや面倒そうな顔で言う。

それは確かに賢明だとアーネスは思った。

たとえ、ハルカの身が清らかでもそれを疑ってかかるものもいるだろう。

「しかし、七つも詐称して大丈夫なのかい？」

「それは大丈夫だ。ハルカは二十歳以上には見えないほど童顔だ。見たところ肌も滑らかそうだったぞ」

「へえ、それはいいね」

体つきがよくて肌が滑らかなら、夜の習いの時などはとても楽しそうだ。

アーネスはそれを聞いて、カレヴィが少しうらやましくなる。

まあ、こちらにも楽しめそうな女性を見繕ってくればいいか。

そしてそれは、地位も容貌も恵まれている彼には造作もないことだったのである。

それはひとひらの花びらのごとく2

その数日後、アーネスはカレヴィから信じられないことを聞いた。「夜の習いをまだしていない？ カレヴィ、君はいつたいなにをしていたんだい」

カレヴィは別に奥手なわけではない。

そうであるのにハルカにまだ手を出していないのが謎すぎて、アーネスは思わず呆れたような声を出してしまった。

「それが、初日はティカ殿がハルカの寝室に泊まっていったし、次の日はハルカが勤め先に行くと言って向こうに帰ってだな……。俺も今日あちらに行ってきたが、四角くくて平べったい物が机の上に乱立していて……」

「いや、それはいいけれど。……それで今日こそ習いをするんだね？」

異世界で見た光景を語り出したカレヴィを遮って、アーネスは再度確認する。

「あ、ああ。それは大丈夫だ。侍女長にもその準備をするように言っている」

「……ならいいけどね」

カレヴィらしくもなく、目の前のおいしそうな兎に手を出さないなど、耳を疑うような事態だ。

「異世界の女性を手に入れるのは、いろいろと大変そうだね、カレヴィ」

「まあ、それも今日までだ。ハルカは仕込みがいがあるから楽しんでぞ」

カレヴィはハルカをあれこれするのを思い描いているのか、少しばかり締めりのない笑顔で言う。

「……まあ、程々にね、カレヴィ」

まさか、カレヴィが懇意にしている高級娼館の女性達のようにハ

ルカを扱わないと思うが、一応アーネスは釘を刺しておく。

「分かっている。最初の習いだからな」

それを聞いて安心したが、実際はとんでもなかったらしいことを後日アーネスは知った。

夜の習い云々をカレヴィに聞いたただした数日後、アーネスは王の執務室を訪ねた。

「やあ、ハルカ嬢との仲はどうだい？」

その問いに対して、カレヴィは最高に締まりのない顔をしながらのろけた。

「ああ、ハルカは最高だぞ、アーネス」

「ここ数日でいったいどうしたんだい」

カレヴィのあまりの変わりように、アーネスは啞然とする。

「……まさか、落ちたのかい？」

ハルカはとくに美しいとも聞いていなかったたので意外だったが、

このカレヴィの様子はそうとしか考えられない。

「ああ、落ちた。俺はハルカが好きだ。……残念ながら俺の一方的な片思いだな」

「なんとまあ……」

幸せそうにハルカのことを話すカレヴィは、最早一国の王ではなく、ただの恋する青年そのものだった。

「……そんなにハルカ嬢はよかったのかい？」

「夜の習いのことなら、ハルカは最高だったぞ」

「へえ……」

多くの高級娼婦を相手にしているカレヴィが最高と言っからには相当なのだろう。

本来は快樂主義であるアーネスは、まだ見ぬハルカに強い関心を持った。

これは是が非でも会ってみたいな。

今までどんな手練れの高級娼婦にもなびかなかったカレヴィが、ほんの数日で恋に浮かされるのだ。

顔立ちが普通というが、いったいどんな女性なのだろうとアーネスは期待を膨らませた。

「……アーネス、言っておくがハルカに会おうとするなよ」

顎に手を当てて考え込んでいたアーネスに、カレヴィが一転して不機嫌そうな顔をして忠告する。

「なぜだい？」

「なぜって、おまえは今ハルカを口説く気でいただろう？」

鋭い。さすがに生まれてからの友人であるカレヴィの目はごまかせないか。

「まあ、そうなんだけどね」

「やはりか！」

カレヴィは大げさなくらい叫ぶと、アーネスに大股で近づいてきた。

「……カレヴィ、君、人格変わってないかい？」

政務を執っているときの、冷静な彼が嘘のようだ。

アーネスがそう思っていると、カレヴィは彼の胸元を掴んで言った。

「ハルカに手を出すな」

「……だが、まだ婚約者だろう？ 婚礼を挙げたわけじゃない。わたしにも機はありそうだけどね」

胸元を掴まれた体勢のまま、アーネスは不敵に笑って言った。
「手を出すなと言っているだろう!」

アーネスを掴んでいた手を離し、カレヴィは彼を軽く突いた。
アーネスは数歩後退したものの、すぐに体勢を立て直し、カレヴィを挑発するように言った。

「自信がないんだね、カレヴィ」

「ああ、ない」

正直、ここまではつきり肯定されるとは思わなかったので、アーネスは瞳を見開いた。

「ハルカは普通の女と違う。どうやったらハルカの気持ちがあるのか分らない。だから俺は……、いや、なんでもない」

「……?」

途中まで言いかけてやめたカレヴィに対して、アーネスは問いた
だすように眉を寄せる。

しかし、カレヴィはそれ以上言おうとはしない。

仕方なくアーネスは襟元を正すと、おとなしくこの場を去ることにした。

「よく分からないけれど、今日は退散することにするよ。それではね、カレヴィ」

「……ああ」

余裕のある態度のアーネスが不満なのか、カレヴィが不機嫌な顔で返事をする。

そして、最後にまた忠告してきた。

「アーネス、くれぐれもハルカに手を出すなよ」

それは、公爵という立場で親友であるアーネスとて、恋敵は容赦はしないという感情を内包した言葉だった。

しかし、アーネスはそれに肩を一つ竦めただけで、答えは返さなかった。

アーネスは王の執務室を出ると、すぐに王付きの比較的若い侍女を捕まえて、カレヴィとハルカの間になにか変わったことがなかったか尋ねてみた。

すると、侍女はカレヴィがハルカに惚れただりから、離宮建築のことまで話してくれた。

「離宮建築……？」

「はい。なんでもハルカ様はエーメ（桜）がお好きなそうで、それをご覧になれるようにお造りになるそうですわ。それで陛下は宰相様にすぐに着工に取りかかるようにお命じになってました」

「婚約中に離宮建築……？」

「そんなことは過去にも聞いたことはない。」

アーネスはカレヴィの暴走に頭が痛くなる思いだった。

「そう。ありがとう、よく分かったよ」

「は、はい……」

顔を赤くしている侍女を残して、アーネスは廊下を歩きだした。

常軌を逸しているカレヴィを今すぐ問いつめてもいいが、彼にそんな行動をさせているハルカという女性をまずよく知る必要があるようだ。

アーネスは少し考えると、控えさせていた魔術師に、次の行き先を告げた。

「月華の館へ行く。すぐ移動させてくれ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2323r/>

王様と喪女

2011年9月25日03時12分発行